

平成 25 年度 修士論文

## 中国の現代ファンタジー小説「九州」に関する考察

提出：平成 26 年 1 月 10 日

指導教授 佐々木睦准教授

人文科学研究科 日本 中国（中国文学）

学修番号 12870101

金 碧臻

## 目次

序論	P. 1
第一章 「九州」事件の概要	P. 9
第一節 ネット時代	P. 9
1 清韻フォーラムでの開始	P. 9
2 九州公式ウェブサイトの創立	P. 11
3 ネット環境における九州	P. 17
第二節 紙媒体とのコラボ	P. 17
1 『科幻世界』とのコラボ	P. 17
2 雑誌『九州幻想』の創刊	P. 20
第二章 「九州」プロジェクト	P. 23
第一節 「九州」雑誌の運営と潜在的危機	P. 23
1 「九州」雑誌	P. 23
2 分裂の前夜	P. 24
第二節 「九州門」事件	P. 26
1 ネットワーク上の混戦	P. 26
2 紙媒体における公告	P. 30
第三節 多数雑誌の創出	P. 31
1 『九州志』の創出	P. 31
2 『九州幻想』の維持	P. 34
3 再協力と「第二次九州門」	P. 38
第四節 再出発	P. 42
第三章 九州世界におけるストーリー、設定について／内容	P. 46
第一節 設定	P. 49
1 設定の出所	P. 49
1-1 中国の古典文学と神話から	P. 49
1-2 現実と歴史からの変形	P. 53
1-3 外来の影響とユニークな特徴	P. 56
第二節 ストーリー	P. 60
1 メイン小説（主線小説）	P. 60
2 その他の作家の作品	P. 63
3 その他の作品形式	P. 65

第三節 九州の設定と小説の関係 P. 66

第四章「九州」の物語消費構造と作者と読者の関係 P. 72

第一節 作者と読者との関係 P. 72

1 作者と創作 P. 72

2 読者と閲読 P. 75

第二節 メディア P. 78

1 メディアプラットフォーム P. 78

第三節 九州の物語消費構造 P. 80

年表

添付資料 1

添付資料 2

添付資料 3

参考文献

謝辞

## 序論

20世紀の90年代から21世紀初頭にかけて、外国からのファンタジー文化、特に欧米系のファンタジー文化がテレビ、本、ネットのような多数のチャンネルを通じて、ゲーム、小説、または映画の形で、中国に流入し、新しいものとして、中国の文学業界全般に、活力を注入した。最初は、欧米系および日本系ファンタジー文学の模倣であったが、やがて、中国式ネットファンタジー系を中心とする、「玄幻小説」と呼ばれる中国独自のジャンルの小説とぶつかり合い、融合し、(中国)現代ファンタジー系小説が誕生した。このような現代系ファンタジーは、多文化共生が特徴的である。ネットで人気に火がついたことで、この種の小説もネットだけでなく、紙媒体、つまり、出版物として、人々に受け入れられ、紙媒体の定期行物による長年にわたるジャンル区分論争を経て、今の中国式ファンタジーは、多種多様化し、多くのジャンルが形成された。大人気になった原因は、もう一つある。それは、2000年前後にネット文学(ネット小説)創作ブームの波に乗って、一気に人気大爆発を遂げたことである。ネット文学は、「新しいメディア」と呼ばれているインターネットを舞台とする文学である。2008年10月29日に、中国作家協会の指導のもとに、中文在線という会社の子会社17kは『長編小説選刊』という雑誌の出版社とともに、ネット文学10年評論活動を主催した。1998年にネット文学が誕生して以来、ネット文学がやっと中国大衆小説の時代を開拓し、中国文学業界と出版業界の考え方を一新した。

インターネットは、新聞、ラジオ、テレビに次いで、「第4のメディア」と言われるが、単に前者から相続するものでなく、独自の特性がある、例えば、デジタル化、マルチメディア化、リアルタイム性、対話型コミュニケーションなどの利点がある。近年以来、ネットファンタジー系小説も研究者に注目されてきた。代表的な研究成果は、歐陽友権が2008年1月に発表した『ネットワーク文学概論』で、主にネット文学とは何か、ネット文学がどのように誕生し、発展してきたかについて説明した。総括として、紙媒体と比較した際の、ネット文学の6つの特性を提出した。それは文学媒介の違いと閲覧方式の違い、文体の違い、作者身分の違い、創作方式の違い、広がる方式の違い、機能価値の違い、である。全文にわたり、大量のネット文学作品を実例に挙げ、ネット文学の形式と特徴、機能と価値、創作、流通、閲覧、評論、批判、またネット文学の限界、未来、などが論じられた。また王緋は『中国社会科学院研究所学术文库：21世紀新媒体与文学发展』(2012年7月)において、ネットは変化し続ける媒体、つまり「ニューメディア」であるという視点から、ネット文学の発展ルーツを整理した。

上記の研究対象である「ニューメディア」、つまりネット文学の発展と、中国当代ファンタジー文学の始まりおよび玄幻文学の拡張は、時間上ぴったりと一致する。中国国内では、最初のファンタジー系文学に関する論文は、『西方現代幻想文学論』(彭懿、1997年11月)であり、全編にわたり章回体叙述に似たような叙述法を採用し、ストーリーの概要を作者

の人生を語りながら説明し、世界中のファンタジー文学の発展過程を述べた。特に、大量のトップクラスのファンタジー文学作品を例に挙げて、詳しく紹介したのである。

Fantasy を「奇幻」と最初に訳したのは、台湾の翻訳家朱学恒である。1992年には「奇幻小説」もすでに、ニュータイプジャンルとして、中国で出現し、主にテーブルゲームとして、ごく一部の人の間で流行していた。当時のデジタルゲーム雑誌『軟件世界（ソフトワールド）』で始まった新たなコラム「奇幻図書館」は、朱学恒が司会として、ゲームのシナリオを理解しやすく、情景を想像しやすくするため、プレーヤーにゲームに関係のある原作小説を紹介するコラムであった。1998年、朱学恒は『大衆軟件』に「奇幻文学今昔」を發表し、中国文学圏に初めて現代の西洋ファンタジー文学を紹介した。

2004年1月、『今古伝奇奇幻』の責任者の楊巖と熊嵩は初めて「中国式奇幻」というスローガンを提唱し、中国式ファンタジーはどのような特徴があるべきかを具体的に述べた。彼らの考えでは、作品の題材として、中国の古代神話から要素を摂取し、現代小説の手法を使って、再構築するべきだ。そうすることによって、神話中の「奇景異象」を再現できる。また、作品自身の知恵哲理などの面で新機軸を打ち出すことによって、中国的要素が含まれた、特有のファンタジー世界を構築することができる。

この年、『科幻世界奇幻版』による、『2004年中国奇幻小説集』が出版された。収録された作品はすべて「九州」という架空世界の世界観を共通にもつシリーズ小説である。その中には、風変りな作品や異彩を放つ作品もある。これらの作品は、みな共通の世界観の下で物語を語っている。その世界観は作者たちがみんな一緒に作り出すものである。世界観、設定、地理空間は神話典籍『山海経』を世界の原本にして、新しい世界を開拓して創造された。「九州」は民族アイデンティティあふれる、ファンタジーへの追求心が体现された世界である。

中国ファンタジー文学では、2005年を「中国奇幻元年」と称し、その年に中国のファンタジー文学は急激な発展を遂げた。ネット上で最も人気がある作品、例えば、本論の主題である「九州」シリーズの他、『異人傲世録』、『都市妖奇談』、『唐伝奇』、『天行健』や『新宋』などが、次々と読者たちに受け入れられ、出版社もこれらを出版した。また、天津人民出版社が出版した「奇幻之旅」シリーズと海洋出版社が出版した「幻想之城」シリーズはネット文学が正式に紙媒体市場に進軍した証である。

「関于奇幻図書井噴的思索—浅析当前奇幻図書出版態勢」において、楊鵬は近年のファンタジー小説出版物の急成長の原因として以下の四点を掲げた。第一に、外国のファンタジー文学の導入と出版が中国で大量のファンタジーファンを育てた。第二に、台湾と香港の武侠小説が、過去の30年間に渡ってファンタジー系小説の潜在的読者を大量に育てた。第三に、ネットとデジタルゲームの普及により、ファンタジー系の作品が、異なる文化理念を持つ読者たちにも受け入れられるようになった。第四に、ファンタジー系小説の特性

が、現代の読者たちに迎合した。この文章は、欧米ファンタジー系文学の作品の種類、あるいはジャンルを6つの種類に総括した。それは、剣と魔法、ダーク系ファンタジー、日常的なファンタジー、マジック世界観をとるリアリズム系、現代ファンタジー系、そしてアダルトファンタジーである。さらに、2005年に中国で出現したネットファンタジー文学を、ウエストファンタジーの模倣、ダークファンタジー、架空歴史、仙剣奇幻、ゲーム小説類、偽歴史、現代ファンタジー系と玄幻の八種類に分類した。また、アニメとネットゲームが中国ファンタジー創作業界へ大きな影響を与えたことを認めた。しかし、ネット上で大人気になった作品は仔細な推敲を経ずに出版され、大量の書籍商が流行を追って、盲目的にネットファンタジー作品を出版し、その結果として大多数のネット小説が一旦ネットから紙媒体に変わると、その活力を失い、価値の無いものになってしまった。

2005年における出版ブームの後、出版社業界とファンタジー小説の作者たちは反省を始めた。作者のうちに、「東方ファンタジー」と「本土ファンタジー」のスローガンを提唱する者が現れた。作品の中に、中国的な文学価値を表現し、本土化させるためには、民族性が絶対に必要と考えられた。そこから、中国当代のファンタジー小説は中国古代小説を遡って、その原点を発掘しはじめた。また、現代ファンタジーの活力剤として、本土ファンタジーが「自発」から「自覚」を持つものに転変した。

2005年の出版ブームは学術界からの重視を引き起こした。2005年以前、本土ファンタジー文学についての研究は比較的の小規模であった。研究テーマも主に中国ファンタジー文学の分類、ファンタジー文学の特徴の総括に集中しており、決定的な成果はなされていなかったと言える。葉祝弟「奇幻小説的誕生及創作進展」(『小説評論』2004、4月号)が発表されてから、ファンタジー文学に関する評論は次第に増え、2007年7月、西南師範大学の《重慶三峡学院学報》にファンタジー文学とファンタジー文化を含めた「幻想文学与幻想文化」專欄が設けられた。所属の研究グループは西南師範大学と南西大学の文学類型専攻の大学院生を中心メンバーとしており、主として評判になったネットファンタジー小説のテキストとタイプを分析した文章が載った。しかし、一方で韓雲波教授はこのようなニュータイプの文学は依然として外来物として、本土に溶け込んでいる途中である。中国化の過程の中にある最も有力な証拠は、これらへの命名が、まだ統一されておらず、例えば奇幻、玄幻、魔幻、幻想小説等諸説が入り乱れ、他のファンタジー系小説、例えば、武侠、SF等との関係もまだはっきりしていないと指摘した。

中国は、元々ファンタジー要素が豊かな国である。しかし、文化的財産である古代神話や伝説の大部分が、地理上の、民族上の、歴史上の、いろんな原因で失われた。しかし、残存したわずかなものだけを通じて、その隠し切れないほどの膨大で、深淵な、巨大文化的な体躯がすぐわかる。戦国時代神話は人類の原始の文明の光り輝く想像力を積載し、六朝志怪小説、唐代伝奇小説や、宋の講談本および、明清小説もすべて奇怪な想像を含んで

いた。清朝末期にも、SF 小説が流行したことがある。五四の新文化運動の後で、「唯科学」主義が興って、特に新中国建国後、功利的な実用性とイデオロギー的特徴を持った現実主義が出版業界を席卷し、神話や化け物、妖怪などの文学が姿を消した。SF が唯一残り、ぎりぎりの形で、科学普及読物の付属品のような形で残存した。波瀾のあと、中国作者たちの想像力がひどく欠乏し、衰弱したのもこのためである。

その後 2000 年以降になってようやく、中国で、ファンタジーと玄幻をテーマにした小説が、ネットの力を借りて、爆発的成功をとげたのである。

中国で 2002 年に、映画『Lord of the Rings』が公開されたあと、出版社はまるで金儲けの材料を見つけたように、無我夢中にファンタジー系小説を出版した。そのため、2006 年は「ファンタジー出版元年」と言われるようになった。これらの行為は三～五年にわたって続けられ、出版社も利益を得たが、低俗な作品が多数出版されるようになり、ファンタジー系小説は、最も大衆に軽蔑される小説題材となった。

従って、韓雲波教授と同じ意見を持つ陶東風教授も、今の文学業界は混乱状態にあると言った。彼は、「中国文学已進入裝神弄鬼的時代？——由“玄幻小説”引發的一点連想」（2006-09-15『当代文壇』）で、いくつか玄幻小説が体現した価値観の混乱について指摘した。陶東風教授の評論は、主流の視点を代表し、エリート文学者の価値観で流行小説を評論するのも、不公平と思われるけれども、文学鑑賞の上なら、確かに、中国ファンタジー系小説の弱み、特にネットファンタジー系小説が普遍的に抱える内容的な欠陥が認められる。

しかし、これらのファンタジー系小説の出現も、中国創作業界の作者たちの想像力の回復を意味する。混乱状態もまたサブカルチャーが形成される過程の必然段階である。

「文体の変遷とその文化意味」（陶東風、1994）の帰納した文学ジャンルの発展の 3 つの基本的な段階に概括されるように、中国の現代ファンタジー小説の各種のサブジャンルの形成は、第 1 段階の“ジャンル複合体”（genre-complex）の凝集を体現していて、ネットで流行した玄幻小説の段階を経て、欧米のファンタジー系と中国本土のファンタジー系とがぶつかり合い、融合し、いくつかのサブジャンルが紙媒体に固定されてきた。雑誌『今古伝奇 奇幻』の 2003 年末から 2004 年に連載された作品の中では、欧米のファンタジー系を模倣したものと日本ファンタジー系を模倣したものが大多数を占めている。例えば、DND（ダンジョンズ&ドラゴンズ）を原型とした『死霊法師』は、元々一つのシステムに存在するはずがない東洋の神話や侠客と西洋のヴァンパイアを融合して、一作品にした。西洋と東洋の愛情観、宗教観、生死観がぶつかり合った『飛天舞』も同様である。これらも、中国式ファンタジー系小説が形成過程の初期段階に必ず通る、他の作品の模倣である。

陶東風は文学ジャンルの第 2 発展段階を「ジャンルの複製本」（version）と呼ぶ。つまり、作者が意識的に第一段階に現れた多数の祖型（primary version）を参考にしながら、

創作したものである。ジャンルの複製本はそれらの祖型を模倣対象にする。この時、ジャンルの特徴は明確になり、必ず守らなければならない規範が生じる。また、明確なジャンル名とジャンルに応じた文句類の各種の規定も出現する。これも、中国当代ファンタジー小説の発展過程に確認できる。中国の六朝志怪小説、唐代伝奇小説のスタイルを模倣して書かれた、白話筆記体のファンタジー小説はその代表で、読者に大人気だった。例えば、騎桶人が創作した『双髻』や、楚惜刀が執筆した『魅生』シリーズや、本少爺が創作した『江湖珍聞録』などである。この種類の作品はだんだん大規模になって、伝奇文体模倣小説という形式が生まれた。また、もう一つの味わい深いジャンルも出現した。それは仮定歴史の架空小説である。定期刊行物を舞台として、連載される形で、斬新な創作モデルが作られた。何人かが一つの架空世界をシェアにして、創作するモデルである。例えば、「九州」や、「雲荒」、「週天」などのシリーズがある。このうち、最も代表的な架空世界で、創立時期が最も早いのは本文で論述する「九州」である。

最後の、文学ジャンルの第3発展段階は「創造性の転化」の段階である。この段階の作品も第一段階の作品、つまり祖型と背離している。陶東風はこのような変体を作者が創造的に作る「第二次形式」(secondary form)として言及した。第3段階のテキストは「ジャンルが混合と交差をした結果」である。このような作品は、本来はジャンルが確定してから、はじめて発生することが可能である。また、適切なきっかけも必要である。従って、「すべてのジャンルがこの発展段階を経るわけでない」と彼は指摘した。

中国現代ファンタジー小説はまだ発展の途中である。それ故、それぞれのジャンルを観察してもわかりにくい。しかし、個別作品が確かに存在する。例えば、E伯爵が吸血鬼を題材として創作した『百合紋章』である。『百合紋章』はダーク系の西洋ファンタジーの骨組みを持つ推理小説である。当時、掲載された雑誌『今古伝奇 幻想』で、編集者と読者の間でもジャンルについて討論が行われた。結局、「ファンタジー的なミステリー」というジャンル名に落ち着いた。また、本少爺が執筆した『江湖珍聞録』は剣客の占い師とキツネのお化けを主人公とするストーリーである。小説に使用されるのは文言文でも白話文でもない。斬新なのは教科書の中国古典文学の訳文にしか出てない言葉が使われたことである。

2001年に、清韻フォーラムを発端とし、ネットのユーザーはリレーのような創作形式で、「九州」の創作を始めた。当時、中国の幻想小説創作には2つの極が存在した。一つは、西洋ファンタジーの騎士と竜に関する物語、もう一つは東方的な修真を題材とする物語である。「九州」の創作者たちは、当時からこの現状をすでに意識していた。彼らは中国の古典幻想文学の中から滋養をくみ取って、西洋のファンタジー文化の中から規則を探して個性的な道を探すことを試みた。「九州」には全く新しい世界が構築された。この世界は、対立的な「荒」と「墟」という二つの神の理論体系に支えられる。「九州」で生活する人



種は六つある。また、9つの大陸に分かれていて、数十の国家と約百の都市がある。「九州」は中国の伝統文化を結合させ、中国的なファンタジー構造と設定を創作した中国国内では初めての例である。現在でも、中文小説界で比較的高い知名度を持つ空想世界である。さらに、数十人の有名な作家と画家が「九州」の下に集結した。この中のたくさんの参加者は当時すでに有名な作家であるか、あるいはその後創作の実力派として認められた者である。例えば、今何在は『悟空伝』によって、名声が最高潮であったし、江南が執筆した『当時の少年』は新浪金庸旅館と清韻の個人のコラムで連載が始まっていた。また、北星は清韻フォーラムのSFスレッドで長年にわたり管理者を務めていた。滄月も若手武俠小説家として注目されていた。更に、遙控と潘海天は二人とも中国SFの銀河賞を受賞したことがある。参加者の一人である楊叛も『北京の戦争』によってすでに伝説のような人物になっていた。これらの参加たちはすべて創作経験があるし、彼らが単独でそれぞれ世界を創造することができることを疑う必要もないと思う。彼らはすべて中国当代幻想文学史に功績を残している。

最初、「九州」シリーズ小説は『科幻世界・奇幻版』に掲載された。そして、雑誌『奇幻世界』の創刊にも助力することになった。後に『奇幻世界』から独立し、江南、潘海天と今何在の協力によって、2005年に『九州幻想』が月刊誌として創刊された。一時話題になって、大勢の作者が「九州」の創作に引込まれた。さらに、「九州」シリーズの書籍は最も売れるファンタジー類の図書になった。その販売数量は中文幻想小説では奇跡とも言える。

2007年に、「九州」の創作チームの一員である江南と他の二人メンバー今何在、潘海天との間に経営理念の相違が生じた。江南は雑誌『九州幻想』から離れてファンタジー専門雑誌『幻想1+1』を創刊した。また、ムック『九州志』も作り始めた。この分裂は九州の読者から、「水門（ウォーターゲート事件）」をもじって「九州門」と呼ばれている。

「九州門」によって、「九州」創作チームが分立し、対峙し始めた。その後、「九州」はオンラインゲーム「九州世界」とネットワーク版の雑誌『九州幻想』も発行されて、維持された。しかし、一時の風采はすでに失われてしまった。

「九州」ブームが起きてから現在まで、もう十年が経った。この十年間の「九州」の誕生、発展、没落の原因は「九州」システム自身のみにあるのではなく、ネット文学全体の環境やその他の外的要因からも影響を受けている。「九州」の発展プロセスには未熟な部分がたくさんあるが、もし中国現代幻想小説史を書くとすれば、「九州」はその一里塚であろう。

「九州」が中国現代ファンタジー文学の典型的な実例として分析できる理由として、筆者は以下の三点を挙げたいと思う。まず、「九州」のファンタジーシェアワールドは複数の作者の相談の後、次第に形成されたものであること。設定のそれぞれのバージョンは、中

国ファンタジーにおける西洋ファンタジーの受容を反映していると思う。次に、「九州」はネットから始まり、後に会社が設立され、専門雑誌と長編小説単行本の発売に至った。いわば、「九州」はネット文学が発展してからの全過程を目撃した。「九州」の分析を通して、中国ファンタジー小説のメディアミックスにおける発展が分析できると推測する。最後に、「九州」は共同世界として、読者と作者が協力して、シリーズ小説を書く行為であり、かつ、ネットから始まって、会社まで創立された事例は、筆者が調べるところでは世界中では「九州」のみである。その独特な物語消費構造における、作品、作者と読者との関係も通常とは異なる。

前述のネット文学に関する先行研究の主要な成果は、近年におけるネットワーク上に現れる作品のジャンルおよび、ネットワークメディアと紙媒体との違い、また作者の創作モデルの違いなどを帰納し、総括するものである。

中国現代ファンタジー小説についての研究では、主にファンタジー小説が流行してきた原因を探るか、テキスト分析の方法を用いてファンタジー小説の特徴を総括するか、この二種類に分かれている。

「九州」は特殊な創作モデル、メディアミックス的運営モデル、2003年から文学界で津波を巻き起こした事例として、注目されている。しかし、「九州」が独特な「東方奇幻」的な設定を探求したこと、読者と作者との特殊な関係ゆえに、何度も新聞雑誌で報道されたが、学术界ではあまり触れられてない。たまたま、ネット文学に関する研究において、参考例として話題にされるぐらいだ。しかし、「九州」世界の原型と設定についての詳しい研究や、西洋ファンタジーに対する受容、特に「九州」における作者と読者との関係についての分析ははまだ現れてない。

本論は先行研究を参考にしながら、メディア学の理論を導入して、「九州」ブームを実例にとり、中国現代幻想文学の受容と発生原因を探求して、中国的なファンタジー構成要素を検討する。そこで、筆者は「九州」ブームをネットワークの時期と紙媒体の時期に分け、作者の創作方式と読者の閲読方式に、マーケット環境を結び付けて、架空世界「九州」の物語消費モデルを分析する。そして「九州」がセンセーションを巻き起こした原因と「九州」が崩壊した原因を総括する。

本文は小説の設定と内容、および読者と作者との関係という2つの面から、「九州」ブームを分析する。第一章と第二章では、「九州」ブームの全過程を考察して、分析する。それぞれの時期に、「九州」に影響を及ぼした外的、内的要因をまとめる。第三章では、テキストとして、「九州」シリーズの小説と設定を分析する。その上で、「九州」小説の特徴をまとめて、ファンタジーの源泉を追及する。第四章では、第一章から第二章までの資料によって、作者と読者との関係を分析する。そして、ネットワークの時期と紙媒体の時期で、作者と読者との関係はどういうふうに変ったかを探求する。また、第一章から第三章ま

での内容をまとめ、「九州」の崩壊原因を総括する。さらに、物語消費構造を探る。

「九州」の起源である清韻フォーラム及び「九州」関連の文学フォーラムは、2005 年前後に、企業が資金を投入した文学ウェブサイトの影響で次々と倒産した。それゆえ、ネット時期に関連する資料は「九州」専門雑誌からしか入手できなくなった。つまり、『科幻世界・奇幻版』、『九州幻想』と『九州志』、及び単行本に収録された作者インタビューなどの資料である。また一方で、「九州門」においては、内部の人事異動や、外部からの資金介入などが多くて、複雑である。「九州門」に関連する実情もあまり公開されていない。この方面の資料は、主に当事者に連絡することを通して、雑誌の編集と運営会社に関する情報とデータを獲得する。以上の資料を通じて、「九州」ブームの全貌を考察すること、そして「九州」シリーズ小説における物語消費構造を明らかにすることが本論の目的であり、同時に本論の研究方法である。

## 第一章 「九州」事件の概要

### 第一節 ネット時代

#### 1 清韻フォーラムでの開始

2001年12月17日11時17分、水泡というIDのユーザーが清韻フォーラムの天馬行空ボードにおいてファンタジーを共同で創作するパートナーを募った。「最優秀パートナー（原題：最佳拍档）」と題したスレッドにおいて、同じフォーラムのネットユーザーを招集し、カイン大陸を共通の背景とする西洋風ファンタジー小説のシリーズものを創作しようとした。この提案は、大勢のネット作者が集まる清韻フォーラムにおいて大きな反響を呼び、たくさんの作者が討論に参加し、創作し始めた。にわかには空前の盛況となった。

その後、2002年1月8日8時49分に、遙控は「六間臥室，一半是用来做実験的嘛」というスレッドを立てた。彼は皆が共に接龍[引用者注：トランプの七並べに似た遊び]のゲームをしに来よう提案し、「皆で一つの詳細な設定を作り、統一させて、それからそれぞれ自分の好きな内容を書こう。真面目なのが書きたければ真面目なのを書く、軽いコメディイが書きたければ軽いコメディイを書く。世界の設定に違反しなければそれで良い。賛成する人は手をあげてください」創案者自身も一つの想像を発表してたたき台にした。当時、このスレッドの創作方法は、興味のある者は一段落からでも投稿できるし、他の人は時間や興味があれば続きを書くというものだった。読んだ者は好き嫌いを発言して批評しても良かった。当時多くの者が参加し、その物語はこのようにして一群の者の参加によって続いていった。江南はこう述べている。接龍による物語は後の「九州」に堅実な基礎を築いた、と。

2002年1月10日13時47分、「大角」というIDのユーザーがカインの大陸の上に「一つ東洋風の大陸を入れよう」と提案した。実は、この「大角」は中国のSF賞である銀河賞を何度も受賞した潘海天だった。しかし、当時このプロジェクトに関心を持っていた人々は彼の本当の身分を知らなかった。

大角によれば、「最初は北星が面白ギャグ西洋ファンタジー小説を書いたので、誰かが“東洋ファンタジー（原文：東方奇幻）”と言い出した。」<sup>1</sup>この「東方風の大陸を入れよう」という提案はすぐさま江南、遙控、水泡、北星などのたくさんの有名な作者とネットユーザーの関心を引きつけた。それにより、西洋風のカイン大陸を背景としたシリーズ小説の創作計画は棚上げとなった。「蜀山の後、純粹に東洋風の大型の架空設定はほとんどない」という発言は、直ちにこの一群の中国の若手ファンタジー作家たちを奮い立たせ、彼らは中国風のファンタジー世界の構築に熱情を燃やした。フォーラムの多くのユーザーはたちまちこの新しく“東洋風”のファンタジー世界についての討論や創作に入れ込んだ。✎

2002年1月13日9時41分、江南は遙控と連名で「星辰詩篇：天文設定」を発表した。

---

<sup>1</sup> 2004年10月、《大角訪談》

これはこの斬新奇抜な世界に関する最初の設定文章であり、「墟荒創世説」と二つの等級からなる神の系統が提出された。そして、遙控は「みんなでシリーズ全体のために、かっこよく響く名前を考えよう」と提言した。数回の論争や考証、投票を経て、一年後、この世界は正式に「九州」と命名された。それ以前の、「九州」世界の原形は「前身世界」と呼ばれている。

2002年1月14日に、江南は再度遙控と連名で「古九州の地理設定」を発表し、設定において前身世界の大陸を九つの大きな部分に分けて“九州”と称し、それぞれ荊、徐、揚、豫、青、兗、雍、梁、冀と命名した。これは「前身世界」の最初の地理設定と言われており、また唯一読者に受け入れられて、現在に至るまでそのまま用いられている地理の骨組みである。と同時に、この設定において「前身世界」に生存する五つの種族も提案された。人族、蛮族、羽族、鱗族と鮫族である。中でも、鱗族のうち、遠海で生活する一派は竜族と称された。以前の矮人、巨人、精霊族などの純粋の西洋ファンタジーの設定は全く新意がないとフォーラムのユーザーから指摘されたため、このバージョンでは、生まれつき背が高く大きかったり、あるいは低くて小さな種族は設定されていない。また、同じ日に多事が「夸父」と「河絡」の二つの種族の名称を提案した。

2002年1月15日4時28分、江南は「前身世界」の小説の最初の断片を発表した。このくだりは、姫野、呂帰城、竜襄と羽然の四角関係で有名であり、それがこの後却下された「最後の姫武神」である。その日の23時40分に、水泡はすぐさま「暗夜」を発表した。これは江南の「最後の姫武神」に基づいて創作した作品である。同一の背景のものと独立した創作は、この文章において程よく繋がっている。

2002年1月16日、遙控は「夸父的金幣」を発表した。18日、彼はこの文章を修正し、さらに文章の後ろに貨幣制度について説明する注を付した。同日、大角は「不滅の島」（原題《永生的島嶼》）を発表した。これは魚人に関する物語であり、旧稿を書き改めたものである。設定の方面では、遙控が「種族と生物の設定についての提案」を発表し、「種族は基本的に確定して以下六種——人、羽人、竜、夸父、河絡、魅である」と述べ、蛮族を人族の中の一つの民族と設定して、蛮族と鱗族の種族の資格を取り消した。

その後、「前身世界」を世界の背景とした小説と設定が次々と現れた。（詳しくは表「九州の編年史」005-028をご覧ください）

2002年5月8日、遙控が「九州シリーズが天馬行空の三分の一を占めた事を祝う」を発表した。当時、この「共有世界」はすでに清韻フォーラムで圧倒的に最もホットな話題になり、すべての人が「九州」について議論し、参加することを望んでいた。その中には有名な作者、あるいは後に創作界におけるカリスマ的実力派と認められた者が多かった。例えば今何在は「悟空伝」によって高い名声を得ていたし、江南の「当時の少年」は新浪金庸旅館や清韻の個人コラムで連載中だった。また、北星は長年、清韻フォーラムのサイエ

ンス・フィクションボードのマネージャーを務めていた。滄月も武俠小説家の若手として注目されていた。更に、遙控と潘海天は二人とも中国のSF賞である銀河賞の受賞者であり、楊叛の「北京の戦争」もすでに噂になっていた。これらの参加者たちはすべて創作経験があり、彼らが単独でそれぞれの世界を創造することができることを疑う必要もないと思う。

しかし、「九州」は「複数の作者が協力して創作する」という単純な発想から始まった創作計画であり、初期の参加者は全く個人的な興味と情熱から積極的に参加していたため、過度にゆるやかで自由すぎる協力モデルは、参加者の間に多くの矛盾と意見の相違をもたらしただけでなく、「前身世界」には民主主義が広がっていたため、矛盾と意見の相違が生じた際の有効的な交流・審判のシステムが欠如しており、直ちに意見を一致させることはできない。まさに参加者の一人である余恨が「我々にとって必要なのは目新しく精確で完璧な設定ではなく、我々にとって必要なのはただ統一された標準であろう」と述べたとおりである。

意見の相違を整理し、論争を解決するために、参加者より強い権威を持つ「設定チーム」を設立せざるを得ないという状況になった。こうして、2002年1月15日、清韻フォーラムの利用者たちによって、遙控、江南、今何在、大角、斬鞍、水泡と多事が「設定チーム」のメンバーとして選ばれ、世界の創造者として「七天神」の称号が与えられた。設定チーム内において少数が多数に従う投票制度を実行するため、チームのメンバーは奇数である必要があった。協議、比較の末、今何在の推薦を経て、皆は最終的に北星、多事、大家一起来搗亂の三人の中から多事をこの「設定チーム」に加入させることを選んだ。

2002年1月17日、「設定チーム」が正式に発足し、「創世七天神」と呼ばれた。

2001年1月から2002年1月までのあいだに、清韻フォーラムの天馬行空ボードは東洋ファンタジーと西洋ファンタジーが融合した無名のファンタジー世界の誕生と原型の形成過程を見守った。2002年1月17日、設定チームが発足してからは重要な事柄の協議はチーム内で行うことになった。協議を経て決定された統一設定は、ディオゲネスフォーラムが「創世の七天神」のために開設した「竜淵記事」というコラムで発表することになった。ここにおいて、設定チームは世界の名前について再度討論を行い、最終的に、この世界を「九州」と命名した。それとともに、「システム設定 v0.20」が公表した。

## 2 「九州」公式ウェブサイトの創立

2003年3月17日、九州幻想世界の最初の独自のフォーラムが対外的に公開された。「九州」は独自のドメイン名(9z.net.cn)を持つようになった。つまりそれが「九州架空世界フォーラム」である。その後、「九州」に関係する作品のイベントは主に「九州架空世界フォーラム」に移転された。ここにおいて、設定チームは「九州基礎設定 ver2.3」を公表した。この設定では「魅」という生物は種族に変更され、「九州」大陸に生存する種族は最終

的に、人族、羽族、河絡、夸父、魅、鯨と定められた。また、十二主星の名称も確定し、それぞれの主星が制御する力についても起草された。

こうして、清韻フォーラムから離れて、ネットワーク時代の「九州」が本格的に独立した。公式ウェブサイトはアップデートの後、網易や新浪、竜空、幻剣書盟などのポータルサイトとも良好な提携関係を築いた。この提携関係は主に以下の二つの場面に現れた。一つは、それらのポータルサイトや文学ウェブサイトは「九州」のためにコラムを作り、またあるいはネットワークの文学界で「九州」が表現するきっかけを作った。もう一つは、「九州」独特の開放性はまだ建設段階にあったが、これらのポータルサイトや文学ウェブサイトとの提携は、「九州」に関心をもっている者や読者だけではなく、創作能力や設定能力のある書き手をももたらした。

そのため、この提携関係は良好の循環を形成した。ネットのプラットフォームとポータルサイトは「九州」の知名度を高めた。また、「九州」は作者に創作空間を提供し、読者に世界設定に関する討論に参加できるプラットフォームを提供した。

しかし、「創世七天神」の設定チームが設立されてからは、矛盾は公開されるフォーラムの討論モデルから設定チームの内部に移り、すべてが隠され、読者の視線から切り離された。ウェブサイトがすべて廃止されたため、具体的な討論について調査できないが、何れにしても、このシステムの変化がもたらした効果は、九州架空世界フォーラムにおいて、ポータルサイトや文学ウェブサイトにおいて、公表された設定や小説は統一されて系統だったものとなった。一方、弊害は、「九州」に関する討論はすべて設定チームの内部で行われるため、七人の間に生ずる矛盾が目立ち始めたことである。

さらに、九州架空世界フォーラムにおいて、「九州」の設定に詳しく、活発に討論に参加した者の多くは「九州」の発端時期からの読者である。しかし彼らは読者の身分でありながら創作能力に乏しくなく、非常に強い参与能力を持っていたが、彼ら妖怪館の客人たちもまた妖怪同様に出入り消えたりしたため、「九州」初期の読者群は極めて不安定であった。

2004年5月、今何在は「九州基礎設定と説明 ver3.1版」を発表した。二年を経て、九州の基礎の設定は、天神たちのすったもんだの末ついに決定された。これにより、「九州」の設定は公開されて、「九州」世界の小説の創作は次第に軌道に乗った。こうして、時に天神が現れてある作品を廃棄すると宣言したこともあったが、「九州」シリーズの作品はゆっくりながら増えていった。

### 3 ネット環境における九州

以上で「九州」の清韻フォーラム時代から独立フォーラムの建設に至るまでについて論じてきた。これら全ては第四のメディア——ネットワーク上で発生した。従って、「九州」がなぜネットワーク上に誕生したのかを分析するにあたり、「九州」がネットワークの時

代にあつて置かれたネットワーク環境についても考察するべきだと思う。2000年から2004年にかけてのネットワーク環境の変化は、「九州」誕生の過程を直接決定し、「九州」の創作モデルの変化を引き起こし、紙媒体時代の「九州」の上昇下降にも関わっている。

1998年から、初期のネットワーク上に、文学関連の重要なウェブサイトが次々に現れた。1998年3月に「文学城」が登場し、1998年5月に「黄金書屋」が正式に運用され、1998年7月10日に「書路」が創設された。これらのサイトでは著作権の意識が薄弱であり、基本的に書籍をスキャンし転載することによって維持されていた。内容はほとんど同じで、オリジナル作品は少なかった。当時、中国では自国のファンタジー文学はまだ歩きだしてない。その後、黄易や羅森などの作品によって、「黄金書屋」が最も影響力のある文学ウェブサイトになった。

初期のネット文学を分析すれば、蔡智恒の「親密なるファーストコンタクト（原題《第一次親密接触》）」がオリジナル作品の起点となるだろう。「第一次親密接触」が人気を博してから、ネットワーク上で文章を書く人が明らかに増えた。第二回、第三回、第N回の親密なコンタクトの模倣作品が次々に発表された。「第一次親密接触」より少し遅れて、今何在の「悟空伝」も人々の目の前に突如現れた。本作品のシナリオは香港映画『大話西遊』を換骨奪胎しており、今何在は思弁の方法で、悟空、唐僧、紫霞の三人の人物に全く異なる解釈を加えた。「悟空伝」もすぐに同じ運命をたどり、「八戒伝」や「唐僧伝」など、「悟空伝」を必死に模倣しながらオリジナルとは雲泥の差の作品が降って湧いた。

これらの現象はネット文学の複写属性を反映している。それはまたインターネット上で文章を書く目的も説明できる。欧陽友権によれば、「公開されたプラットフォーム上で創作行為を完成することであり、複数人で同時にテキストの行方を設定することであり、かつまた互いに虚構された運命の中でテキストの愉悦に狂喜すること」<sup>2</sup>である。

まさに先述の如く、2000年に今何在が創作した「悟空伝」によって、ネット文学の第二次ブームが引き起こされたのがそれである。しかしこの現象は偶然ではない。中国インターネット情報センター（CNNIC）が発表する「中国インターネット発展状況の統計報告」によると、「2001年6月30日までに、我が国では中国語のネットドメイン名は128362個で、「www」で始まるサイトは約242739個、ネットにアクセスするコンピュータは約1002台で、インターネット利用者は2650万人に達した。<sup>3</sup>

欧陽友権が統計したデータによると、「当時、全世界における中国語の文学ウェブサイトは3720個、中国大陸では「文学」と銘打つ総合性の文学ウェブサイトは約300個、「ネッ

---

<sup>2</sup>欧陽友権（2008）『網絡文学概論』北京大学出版社、P.242

<sup>3</sup>「中国互聯網絡發展狀況統計報告」CNNIC、<http://www.cnnic.cn/>（参照 2013 - 09 - 27）



ト文学」と銘打つ文学ウェブサイトは241個であり、オリジナルの文学作品を発表した文学ウェブサイトは268個」だった<sup>4</sup>。

筆者はその中の三つのウェブサイトが中国のネット幻想文学の礎を築き、かつ「九州」事件発端とも切り離せない関係があると考えており、以下で説明を加えたい。その目的の一つは、「九州」事件の発端と発展時期のネット文学環境について整理できるからである。二つ目は、他のネット文学の特徴と比較することで「九州」の独自性を分析できるからである。

2001年1月、文学のフォーラムの「自娛自楽」、「一意孤行」と「紅塵閣」は西陸ウェブサイトから徹退し、「竜的天空」という新しい連盟ウェブサイトを設定した。「竜的天空」は2001年から2003年までの期間に、中国大陸におけるオリジナルのファンタジー文学の文学ウェブサイトの首位に上がった。統計によると、2001年6月19日から2003年6月23日まで、「竜天書庫」で発表されたオリジナル作品は合計1493部だった。その中で、連載が終了し完結した作品は53部である。

2003年以降、「竜的天空」はきわめて低い価格で、人気のネット作品の著作権を大量に買い取ると、主に台湾の出版社と連絡をとり、作品の著作権を出版商に転売して大いに利益をあげ、ウェブサイトの運営を維持した。言い換えれば、「竜的天空」というプラットフォームは一定数のファンタジー作者を育成したのであり、正に「竜的天空」の仲介のおかげで、大陸のファンタジー作家は台湾の出版商とのコネクションを得、台湾の出版商から得られる印税に支えられて創作事業を始めたのである。

一方、2002年から、「幻剣書盟」や「起点中文」のような文学ウェブサイトは、閲読料金徴収時代のネット文学創作を牛耳った。幻剣書盟の設立は2001年5月で、「書情小築」、「石頭書城」、「小書亭」などのネット文学愛好家が設立した文学ウェブサイトを合併してできた。創立当時は、ネット文学の発展に力を尽くしていた。運営開始以来、ネットの書き手がたくさん集まり、特にファンタジー小説と武侠小説部門では、国内の文学ウェブサイトの中で首位を占めていた。2003年5月に運営しはじめた起点中文ネットは、前身の玄幻文学協会（Chinese Magic Fantasy Union）が準備設立した文学性を備えた個人のウェブサイトである。2002年6月、「起点中文」ネットは第一版を世に送り出し運営を開始し、2003年5月に第二版を世に問い、正式に運行した。起点中文は独立した作家がオリジナル文学を発表していることで有名なウェブサイトだった。このウェブサイトの文学作品は、サイエンス・フィクションや、魔幻などのジャンルを含み、一部の作品はオンラインゲームを基礎にした創作だった。

---

<sup>4</sup>歐陽友権（2008）『網絡文学概論』北京大学出版社、P. 46

文学ウェブサイトは発表するプラットフォームと原稿料を提供し、より多くの作者がファンタジー文学の創作に加わることを激励した。それと同時に、起点中文と幻剣書盟はキロワードあたり二分の料金を領収する策略を採用した。この策略は最初、明楊読書網によって実施されたが、競争相手が増えたため、また資金不足などの問題により、明楊読書網は間もなく倒産した。このような、作家と契約たり、読者から閲読料金を領収したりするモデルは、読者のファンタジー文学に対する閲読週刊と忠誠的な態度を培った。しかし、クリック数によって原稿料を計算する方法のゆえに、ファンタジーの作者は次から次へとエロやギャグ、俗っぽいプロットや大量の粗悪な模倣によって読者を引きつけるようになった。作者はひたすらに更新とクリック数を求めて大量の俗っぽい作品が生産された。

2003年6月28日から29日にかけて、「中国第一回ファンタジー文学サロン（原文：中国首届奇幻文学筆会）」が開催され、この会は起点中文サイトを巻き込んだ。その後、2004年10月9日に、中国最大のオンラインゲーム運営会社である盛大（Nasdaq：SNDA）は、オリジナル娯楽文学のポータルサイトである起点中文ネットを買収したと宣言した。この時の買収はすべて現金で取引されたが、盛大は具体的な取引の条項を漏らさなかった。起点中文ネットが提供した情報によると、起点は買収された時すでに14000部作品を発表しており、文字数総計は十二億を上回った。このほかに、起点はさらに300部の売れ筋作品の電子版著作権を獲得していた。起点の管理者は、目下すでに約一万人の作家の作品の出版権を有していると述べた。<sup>5</sup>

上述の、2001年から2003年にかけての竜的天空、起点中文、幻剣書盟の発展状況から以下の簡単な結論を得ることができると思う。

第一に、最初のネット文学は、主に愛好家が自発的に自由に創作した作品から来ている。

第二に、ウェブサイトのプラットフォームの経営を維持するため、管理者は読者から料金を領収する方法を採用した。これにより、ネット文学の価値が現れた。

第三に、2004年から、運営商はネット文学の経済的価値に気づき、資金投入によってネット文学の経済効果は更に拡大し、ひいては紙媒体の出版業にも影響を及ぼした。

これらと比較して、「九州」はネット文学に属しながら、独立した創作例であり、それぞれの文学ウェブサイトと協力関係をもっていた。けれども文学ウェブサイトが提供する経済利益には依存してない。今何在は「九州——ネットワークに誕生したこの地の帝国」において、以下のように発言した。「当時、私達の考えは、このファンタジー世界はすべての人に対して開かれたもので、既定の統一された規則内で、みんなの作品は相互に呼応することができ、この世界を絶えず真実で豊かにしていくことができるというものだった。すべてのストーリーがお互いに呼応できるなら、独立した文章を合わせれば大作になると想像した。人物は異なる作品の中で動き回って才気の光を放つ。この世界が一砂、一葉の累

<sup>5</sup> 「一次集体写作遊戯和一个商業奇縁」 財經時報、2006年11月6日、第G03版

積によって次第に形作られているのを見ているのは、どうなに幸せな事だろうか。」<sup>6</sup>

従って、「九州」の初期の参加メンバーは、設定チームも「九州」の設定の討論に参加したウェブサイトのユーザーも含めて、みなが文学の世界に東洋のファンタジー世界を打ち立てる抱負を抱いていた。それは『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』、『ドラゴンランス』が中国で大ヒットしたことに照準をあてた対抗意識だった。

西洋には「ダンジョンズ&ドラゴン」(D&D)のようなシステムがあった。その世界を背景にして、すばらしい名作『ドラゴンランス』が生まれ、『マイト・アンド・マジック』や『ヒーローズ・オブ・マイト・アンド・マジック』などの著名なシリーズゲームやカードゲームの「マジック:ザ・ギャザリング」、そして無数の映画とテレビ作品が生まれた。これらはすでに西洋のファンタジー文化の代表の一つとなっている。しかし東洋には、特に中国には、本当に厳密に資料を共有するような設定の幻想世界は一つもなく、みながそれぞれの戦地に無数の物語を創作して、まるで静かな湖に雨が降って、少しさざ波を立てただけですぐに消えてなくなってしまうかのようなのである。あるいは新新封神榜、新新西遊記、新新八仙、新新ナタ閩海という具合に、古代の神話をすっかりつまらなくなるまで何度もひっくり返した。私達はもう想像力を失い、新しいものを創造する力を失ったのだろうか。どうしても誰かが何かしなければならない。東洋の幻想文化の尊厳のためでもいい、子供のように無邪気な空想のためでもいいから。」<sup>7</sup>

以上の発言から、「九州」の作者たちは中国のファンタジー文学が西洋のファンタジー文学に同化することを望んではいないことが見て取れる。このような民族的コンプレックスゆえに、初期の「九州」世界は低俗の隊列に陥ることがなかった。と同時に、「九州」の独特な「複数人が協力」して設定を作り、大筋の小説を協議して創作する方法は専売特許である。他のネット文学サイトに依存する作者が読者からフィード・バックを得るモデルと異なって、「九州」世界はずっと豊かさを待ち受ける未完成の状態にあったため、「九州」に関心をもつネットユーザーは自分の設定と反論を提示して「九州」世界の行方を推進することができた。

しかし、中国のファンタジー文学の平地に高楼(たかどの)を建て、ちりも積もれば山となることは決して簡単なことではない。2003年から2004年までのネット文学の全容が示した経済利益は衆目の認めるところである。「九州」という集団による創作行為はテキストの革命を起こしただけではなく、ネット文学の生態の中で、一つの奇異なビジネスチャンスをも提供した。<sup>8</sup>従って、「九州」の紙媒体への拡張も発展の必然的方向に属すと言える。

## 第二節 紙媒体とのコラボ

<sup>6</sup>「九州、一個誕生在網絡上的「本土帝国」』『中国図書商報』2005年8月5日

<sup>7</sup>創世宣言

<sup>8</sup>「一次集体写作遊戲和一個商業奇縁」財政經濟時報、2006年11月6日、第G03版

## 1 『科幻世界』とのコラボ

2002年5月、『驚奇档案』という雑誌に潘海天（大角）の主宰による「九州星野」コラムが掲載された。『驚奇档案』は2000年に創刊され、初めは『科幻世界』の増刊として不定期に発行されていた。第五号を発行した時には、発行量は三万部から飛躍的に上昇して十五万部に登った。2002年1月から、『驚奇档案』は全面的に改版され、月刊として発行されるようになった。『驚奇档案』は写真付きのサイエンス・フィクション雑誌で、塗工紙を用い、フルカラー印刷だった。少数の優れたサイエンス・フィクションを発表し、世界の最新のサイエンス・フィクションの情報を読者に提供することに重点を置いており、その内容には、美術・アニメ・漫画・ゲーム・音楽・映画・考古学などの領域のサイエンス・フィクションに関する内容が含まれていた。2004年6月に廃刊となり、2004年7月に改版されて『科幻世界・画報』となり、2004年10月に休刊となった。その後、『科幻世界』の「驚奇档案」コラムに変化をとげた。

大角が連載した「九州星野」は長くはなかったが、これは「九州」がネットワークから伝統的な紙媒体への歩みの第一歩だった。「九州星野」をきっかけに、「九州」という全く新しい意味を付与された名詞はより多く読者に理解され愛好されるようになった。掲載された文章は主に「九州」を説明していた。「九州とは、ネット上のファンタジー文学愛好者が共同で作ったファンタジーの世界であり、東方の色彩を帯びた純粹に幻想された大陸である。」そして、清韻フォーラムのリンクも公開された。また、「九州」を打ち立てた初志と参加した人員について紹介した。初めて紙媒体に「創世総述」、「地理総述」、「種族総述」を公表した。

同時に、九州架空世界フォーラムに、「九州」の地理を背景に展開された小説がたくさん現れたのをきっかけにして、最も早い時期からの参加者である今何在には一つの考えが生まれた。「なぜ私達は雑誌社と協力しないのか」一つは、ある雑誌を陣地にすれば良い作者を集めることができる、二つ目は、雑誌は原稿料を支払うゆえに、良好の循環を形成することができる。結局、単に熱情や興味によって、長期間継続することは極めて難しい。

この考えはすぐに実現した。当時、国内で最も有名なサイエンス・フィクションの雑誌『科幻世界』の出品者は作家の阿来であり、阿来はこれらの若者の挙動を称賛した。そのため、「九州」方面の協力要請をすぐに『科幻世界』は承諾した。2003年5月号と6月号の『科幻世界』誌に、二期にわたって「九州」のコラムが掲載されると、編集長の阿来の推進のもと、2003年10月に、『科幻世界』は画報の増刊形式によって『科幻世界画報・奇幻世界』を出版し、「九州」に関する作品を集中的に発表した。

この科幻世界画刊増刊『奇幻世界』という名の刊行物は、後に発行された『科幻世界・奇幻版』と『飛・奇幻世界』の創刊号と見なされている。『科幻世界』の影響力と九州作家のオールスターの顔ぶれから、この増刊号は市場で瞬く間に強烈な反響を引き起こし、二

万五千部が完売した。この増刊号はいまだに多くの「九州」読者の間で秘蔵品となっている。本号の意義は、「九州」の紙媒体市場への全面的な進出を促したことであり、また後には相次いで『科幻世界』の奇幻増刊（つまり『科幻世界・奇幻版』）発行の道を切り開いたことである。

2004年2月から12月にかけて、『科幻世界・奇幻版』は隔月増刊号として六期が出版された。そのうち九州の作品が誌面を締めた割合は半分程度に達していた。この隔月刊は後の『飛・奇幻世界』誌の前身である。『科幻世界・奇幻版』は主に「九州」の創作者たちと協力し、設定創作チームの成員が共同で創作する九州の背景や小説が破竹の勢いで攻めまくり、「九州」に関する作品が紙面の大部分を占めた。その中には、設定チームや主要作者のインタビュー、読者からの質問など様々な形式によって、「九州」がどのようなものなのかを読者に普及した。それと同時に、雑誌も他のネットワークからファンタジーの作者を発掘することに注力するようになり、彼らの作品を掲載した。例えば燕垒生、騎桶人や滄月などがいる。

雑誌は出版された後、市場の認可を得ただけではなく、読者と作者からも好評を得た。2004年10月、発行量は10万部を突破した。『奇幻世界』は創刊から一年あまりで、多くの『科幻世界』の愛読者たちを引きつけ、この新しい読者の群に取りこんだ。また、「九州」の設定チームに導かれて、何人かの実力があつた作者も『奇幻世界』の創作隊列に加わつた。

2003年から2004年にかけて、ネット文学の経済価値は絶えず肯定され、幻想ジャンルの文学雑誌が相次いで登場した。

2003年初め、成都で、ファンタジー雑誌『夢想者』が創刊され、3号まで発行して廃刊となった。

同じ時期に、広州で、ファンタジー雑誌『伝奇文学選刊・奇幻世界』が創刊し、同年10月に廃刊となった。

その年の夏に、武漢で、今古伝奇報刊集団新聞雑誌が雑誌『奇幻』の創刊準備号の発行に向けて活動を始めた。

10月、成都で、『科幻世界』雑誌社もファンタジー雑誌『科幻世界・奇幻版』の運営を開始し、年末に創刊号を発行した。

12月、西安で、雑誌『魔幻』も創刊準備号が発行された。<sup>9</sup>

このうち、科幻世界雑誌社と今古伝奇報刊集団を除いて、その他の刊行物はすべてその年に廃刊となった。今古伝奇報刊集団傘下のファンタジー雑誌が維持できた主要な原因は、今古伝奇報刊集団の武侠雑誌の読者を相手に、増刊号として発行したからである。それについては、ここでは詳しく述べない。

---

<sup>9</sup> 張進歩

一方、『科幻世界・奇幻版』の影響が広がった理由として以下の四つがあげられる。

第一に、『科幻世界』の影響力を借りたこと。科幻世界雑誌社は中国で最も影響力を持つサイエンス・フィクション専門の出版機関であり、同社から発売された定期刊行物と書籍は膨大な数の忠実な読者を有し、中国の幻想ジャンルの定期刊行物市場では、特に都市部においては、安定して95%以上の占有率を維持していた。

第二に、『科幻世界・奇幻版』自身の運営方法も成功を予告していた。他の雑誌社がネット上で流行る質の低い作品の原稿をそのまま採用し掲載したのに対して、『科幻世界・奇幻版』はあくまでもハイエンド路線を歩み、独自の位置と地位を定めていた。

第三に、「九州」を核心内容として、明らかに独自性と読み応えがあり、多くのコアな読者を引きつけた。

最後に、『科幻世界・奇幻版』は「九州」を売りにしつつも、新しいファンタジー作者を発掘し育成することに注意を払い、雑誌の内容を豊富にさせるとともに、「九州」小説の潜在的作者を育成した。

2004年の一年間、『科幻世界・奇幻版』は『科幻世界』誌の増刊号として出版された。2005年、雑誌社は正式に月刊誌『飛・奇幻世界』を発行した。それ以前の『科幻世界画刊増刊奇幻世界』と『科幻世界・奇幻版』に比べ、『飛・奇幻世界』は「九州」を主要な項目の一つとしながらも、「九州」の支柱機能を弱め、視野をファンタジー文学全般に広げた。

「九州」コーナー以外に「短編精品」、「長編連載」と「特別推薦」を加えた。さらに、西洋ファンタジーを紹介するために、例えば、ゲーム「ワールド オブ ウォークラフト」に関する文章などをいくらか掲載した。これはまだ未熟な中国のファンタジー作者に、模倣の対象を提供したとも言えるだろう。さらに、雑誌の編集者である張進歩が執筆した「話神地図」というコラムがあった。「話神地図」は毎月テーマを選択して、中国古代神話の中から幻想文学に利用できる素材を集め、総括するコラムである。掲載した特集には狐仙、劍仙などがある。

2005年7月、「九州」は『飛・奇幻世界』から独立した。それまでの2005年1月から2005年5月号にかけて、『飛・奇幻世界』に掲載された「九州」小説は二十一編あり、九州のコラムは三回掲載された。『科幻世界』の影響力と安定した読者群に加えてファンタジーの新しい作者を育成したおかげで、2005年7月に「九州」が『飛・奇幻世界』から独立して出ていった際には、原稿不足のような問題は生じなかった。むしろ「五陵」、「雲荒」、「週天」などの多数の東洋ファンタジーの架空世界が続々と生まれた。

『科幻世界』はずっと、思惟に新機軸を打ち出すことを提唱し、科学の魅力を展示することを目標として、主に国内外の一流のSF小説と科学の動向を掲載してきた。『ハリー・ポッター』や『指輪物語』のような海外のファンタジー文学が輸入されたことで、国内の文学市場は強い衝撃を受けた。科幻世界雑誌社は『飛・奇幻世界』を創刊してこれを拠点と

し、国内のオリジナルファンタジー文学の旗幟を持ち上げ始めた。更に、2004年に『科幻世界・訳文版』が増刊として発行し、国内の読者に外国の幻想作品を紹介した。『科幻世界』は再び中国のファンタジー文学の最前方陣地に立った。

## 2 雑誌『九州幻想』の創刊

2004年、今何在は九城会社開発部の副総裁の秦潔と知り合いになり、会社創立の準備を行った。九城会社は韓国のゲーム『奇跡 MU』を代理販売し利潤を得ていた。折しも12月15日にナスダックに登録したばかりだった。当時、九城会社はゲームの開発を考えており、「九州」に投資したのは、後者が優秀なゲームの題材を見つけ、ゲームのために出版し、イメージアップを図り、経営販売し、普及させて一定の知名度を得ることを望んでのことだった。今何在はこの情報を当時アメリカに留学中の江南に教えた。それを聞いた江南は学業を放棄し、年末に120万元を懐に抱えて上海に帰国した。

当時の「九州」の参加メンバーのうち、今何在、江南、潘海天の三人が「九州」に出資して職業にすることを望んだ。「九州」は最初、香港で一つの会社として登録された。今何在は専門のマネージャーを雇って会社の財務を管理してもらい、三人は「九州」の内容に集中することを主張した。しかし江南はプロのマネージャーを雇えば経費がかかるうえ、自分でも経営に興味を持っていたので、兼任することを提案した。この提案に今何在と潘海天は賛成して、江南は会社の株の50%、今何在は30%、潘海天は20%を持つことになった。

「もう一年頑張れば利益をあげられるが、私にとってその利益は、第一にそこまで大きいものと言えないし、第二に、もしも私達がそんなに努力した末に雑誌を一つ発行するお金を儲けるのならば、それは私達が最初にこれを創造した目標とは合わない。」<sup>10</sup>江南は『九州幻想』は一つ文化のブランドであるべきで、もっと多角的な発展があるはずと感じていた。

「この雑誌をしっかりと行ったら手放してもいい、私はまた新しいプロジェクトに取り組みたいと思う。」

2005年4月、「九州」のウェブサイトのプログラムが更新され、正式に「九州幻想世界」と命名された。URLは9z9z.comだった。

2005年5月から、江南、今何在、大角は、清華大学、北京大学、南開大学、中国人民大学、華東政法大学、南京大学、武漢大学などの全国十数箇所の都市の大学で、「九州」を宣伝するために講演を行った。どの会場でも満員になり、廊下に立つ人も多かった。このような絶大な支持を受けることは彼ら自身も予想していなかった。同年10月、北京航空航天大学で、第一期の「九州賞」の原稿募集のコンテストの開幕式が開催された。彼ら三人は「九州」の創始者、「九州」世界の主要な作者、「九州」会社の運営者などなどの多重の身分で、インターネットを下りてきて、当時の「九州」の主要参加者と読者に接触した。これ以来、

<sup>10</sup> 「一次集体写作遊戲和一個商業奇縁」財經時報、2006年11月6日、第G03版

「九州」の物語や設定、および「九州」のオープン型の創作計画は次第に更に多くの若者の理解を得、受け入れられるとともに、ますます多くの人が引きつけられて「九州」の構築に参加するようになった。

会社の創設、ネットを下りての多数の大学での講演、「九州賞」の開催と同時に、2005年の夏、江南、今何在、潘海天は『恐竜・九州幻想』を創刊し、『飛・奇幻世界』から本格的に独立した。創刊準備号を2号発行した後、9月から正式に月刊として、毎月の一日に発売することになった。2005年には、7月と8月に発行された創刊準備号を含めると共計6冊が発行された。それに2006年の12冊、2007年1月から6月までの6冊を加えた24冊は『恐竜・九州幻想』を誌名とする「九州」専門雑誌である。

2005年7月、第1期の『恐竜・九州幻想』は3万部発行され、市場の反響はきわめて良かった。第2期も3万部発行され、第3期は5万部、最高発行部数は7万2千部に達し、創刊から二年になる『飛・奇幻世界』と肩を並べる名声を博したと言われている。

2005年の「九州」は、元々インターネットの無数の発言者によって作られた架空世界であり、集団の接産による創作方法で完成し、その後雑誌と単行本が発行され、ゲームの開発が行われた。正に一つの巨大な産業チェーンを形成する途中にあった。2006年、「九州」は十何万のも読者を持つテーマ雑誌となり、中国の市場で最も売れゆきの良い幻想図書シリーズになった。

今日の筆者から見ると、「九州」の集団創作行為は、テキスト革命をもたらしたと思う。九州会社の創業者にとっては、ネット文学の生態の中で、「九州」はファンタジーの文化を再構築するきっかけを提供し、奇異なビジネスチャンスを提供したとも言えるだろう。

「九州」がその他の小説と異なるところは、それが日益しに整備されてゆく世界システムを基盤としている点である。全ての作者は誰もが同一の世界背景の下で創作し、彼らが創作する物語はまたいずれもこの世界を豊かにしてゆく。したがって九州は本質的には共有される一つの世界設定であり、巨人の骨格のようなものである。そして他の小説はそれのために血肉を加えることができる。一人一人の作者の小説中の人物とプロットは相互に呼応することさえできる。一人で大千世界と世事の百態を描写した巨作を作り出すのは難しいが、世界設定を通じれば、多数の作者の力を凝集することができる。

江南は以下のように述べている。「これは九州とその他の小説との最大の違いである。九州は単に小説であるだけでなく、一つの仮想世界の想像と創造を通して、作者間の討論を通して、作者と読者の討論が、物語についての討論が、世界設計そのものについての討論が独特の文化を形成することができるのだ。」今何在も、大角も、「九州」の意義の所在を十分にわかっており、ほぼ同様の口調で記者に答えた。「一冊の小説がずっと関心を集め続け、討論され続けるのは非常に難しいが、一つの世界なら大いに可能性がある。一つの世界の設定に基づいて形成される文化は、大量の投入と長時間の蓄積を必要とし、



時には何世代にもわたる。もしかしたら将来人々が僕らを忘れてしまっても、九州幻想世界は依然として存在し続けるかもしれない。」<sup>11</sup>

以上から、『九州幻想』創立の初期に協力した三人は、一つには「九州」の隠れされた経済価値に気づいたのであり、二つには「九州」の文化的ブランドとしての価値にも気づいたのだろう。しかし、なぜここまで話題になった「九州」が崩壊したかについては、第三節に論じる。

---

<sup>11</sup> 「一次集体写作遊戯和一个商業奇縁」 財経時報、2006年11月6日、第G03版

## 第二章 「九州」プロジェクト

### 第一節 「九州」雑誌の運営と潜在的危機

#### 1 「九州」雑誌

2005年は業界から「ファンタジー出版元年」と誉められた。

なぜかという、まず香港と台湾の出版社に頼ることで、ネット小説の出版が簡単になったため、ネット作家の創作に対する安心感が確保された。『小兵伝奇』をはじめ、『異人傲世録』、『縹緲録』、また『誅仙』はすべて連載中であったが、台湾で次々と出版され、その後中国大陆で簡体字版が出版された。そして、外国ファンタジーの翻訳の好調な売れ行きは出版社の注目を引くことになり、出版社はコストの安い国内のネットオリジナルファンタジー小説に目をつけた。

また、2005年は、幻想ジャンルの雑誌の出版においてもいくつかの発展がみられた。まず、『科幻世界・奇幻版』は隔月刊から月刊に変わり、『飛・奇幻世界』と改名した。一方、『科幻世界』編集部から2005年1月に、ファンタジーを中心にする『科幻世界・訳文版』が発行され、海外のクラシックファンタジーが大量に導入された。『科幻世界・訳文版』は1995年に創刊され、ほぼ外国のサイエンス・フィクション小説の翻訳を中心におこなっていた。

さらに、2005年7月、『九州幻想』が独立創刊されると、2005年9月には九州創作チームが『飛・奇幻世界』から離れ、単独で雑誌『恐竜・九州幻想』を創刊した。『飛・奇幻世界』は巨大な関門に直面したが、以前から九州以外のファンタジー小説家も掘り起こして育成していたため、すぐに困窮の局面から抜け出した。また、燕壘生による百万字の長編ファンタジー小説『天行健』が雑誌に推薦され、九州と同様に市場で反響を引き起こした。『飛・奇幻世界』の発行量がずっと安定を保ちながらやや上がったのに対して、今古伝奇報刊集団は『湖北画報・奇幻版』を旬刊として発行するつもりであったが、結局は無駄だった。

『飛・奇幻世界』から離れた『恐竜・九州幻想』は専門雑誌として発行されると、ネットワーク上の報道を利用しながら、大学内で講演を行うなど、宣伝を拡大した。内容から見ると、『飛・奇幻世界』との共生期とは次のような相違点があった。

第一に、『恐竜・九州幻想』には「九州」のメイン小説、「九州」の中編と短編小説を除くと、その他の幻想小説はほとんど大きな紙面を割いて掲載されていない。

第二に、「九州」を創作する作者の人数が増加し、主に「九州」というテーマをめぐり、大筋の小説や大筋の歴史と衝突しない小説作品の創作が行われた。

第三に、創作者たちが同じテーマをめぐり、討論するコーナーが開かれた。

第四に、主要な参加者、読者の中で交流できるように、問答のコーナーが開かれた。

第五に、設定に関する紙面が増加され、「竜淵大典」や「九闕星野」のようなコーナーが

開かれ、細部の設定が豊富になった。

最後に、外国のファンタジーゲーム、イラスト、作品についての紹介文も多数掲載された。筆者は、これらの鑑賞作品はまだ未成熟であった「九州」創作メンバーにひな型を提供し、思考の筋道を切り開かせたと考える。

このようなコーナーの割り当て状況から、『恐竜・九州幻想』が『飛・奇幻世界』と本質的な区別のないことを見抜くことができる。より多い参加者と作者が集められたが、大部の作品を生み出せず、そのうえ、他のファンタジー小説の掲載を減らしたために、「九州」の創世プロジェクトと文化ブランドの建設はさらに少数派になり、市場における周縁化が始まったと言えるだろう。

この状況に対応して、「大九州」の概念が提出された。「大九州」というのは「九州」というジャンルの境界線を曖昧にする概念である。「ある狡猾なやつがすばらしい分類の方法を提出した。それは、もし原稿がサイエンス・フィクションの雑誌に買いとられたら、それはSF小説である。もし原稿がファンタジー雑誌に買いとられたら、それはファンタジー小説である。私達は今「九州」が一つの幻想小説であると言おう——なぜなら『九州幻想』は自分を「大幻想」としての範疇を吹聴しているからだ」<sup>12</sup>。

この理念が「九州」に新しい生命力をもたらした。一連の構想、数人が共通のテーマで創作するモデルが再び「九州」を豊かにしたのであった。

「九州」がもつ架空世界としての設定はずっと統一されていない。また、単独の創作に比べ、共同創作というモデルでは討議する時間がかかり、創作の過程でも筋に関して他の創作者との衝突がおこりやすく、長い間に優れた小説がなかなか作り上げられなかった。このような状況において、この「九州」を豊かにする一連の構想は確かに「九州」に創作できる素材を提供し、さらに、これら周辺の作品は「九州」のもつ主な架空世界とその偽史の設定に影響を与えることなく、周辺の作者たちの参与への熱情も高め、雑誌の可読性も高めた。これは、もともと、「九州」世界の発展を促進する良策であったが、逆に「九州」を分裂させる暗流を促したのであった。

## 2 分裂の前夜

2006年6月、新雑誌の発行を準備するため、江南は北京をおとずれた。彼は共同で出版業をおこし、読者層を広げたいという気持ちを今何在に伝え、同意を得た。江南は北京で準備を進め、2006年後半、新しい雑誌『幻想 1+1』が創刊された。一方、今何在は業務提携の見通しが明るくないだろうと感じ、江南に対して会社の支出状況を整理し、公開することを望んだが、ずっと返答を得られなかった。

2006年6月に九城の業務が代理商に変わったため、「九州」に投資するかどうか躊躇い、

<sup>12</sup> 「大角訪談」大角『恐竜九州幻想』2005年8月号

江南はこの情況に気づいて北京をおとずれた。その後、九城が明確に九州に投資することができなくなり、もともと投資した20万元が債務になった。つまり、九州会社は事実上共同運営者自身の出資となった。抵当にできる資産がないため、今何在と潘海天が債務の保証人になった。二人はずっと江南に、後者も保証書に署名するよう望んだ。また、会社の帳簿を調べたいと求めた。江南によれば、当初雑誌の印刷費に自らのお金を立て替えたというが、今何在らは信じていない。今何在らに厳しく催促されたため、江南は粗末な帳簿を渡したが、帳簿には領収書も支出もなく、まったく支出について調べて確かめることができなかった。

2006年11月、今何在はとある「九州」の設定本の宣伝ウェブサイト（九州設定書宣伝网站）を発見した。その後、このウェブサイトにはフォーラム、ショッピングセンターが作り上がり、まるで1つの九州公式サイトとなった。ウェブサイトの登録者は九州チームに属さず、江南個人に属しているにもかかわらず、読者明らかにはウェブサイトが九州チームに属していないことを知らなかった。

それ以後も、双方とも自説に固執し、意見の齟齬をきたし、溝は絶えず深まった。

支出状況を共同運営者に公開しなかったことについて、江南は次のように説明している。

まず、資金が基本的に経営ルートの中で流通しており、帳簿が作りにくい。その上、「九州」はずっと商業リスクファンドの投入を得ていないため、チームの運行を支える資金について、一部は江南個人が立て替えたもので、一部は某ゲーム会社から注ぎ込まれたものであり、その中にはゲーム会社が投入した『九州幻想』第一号の印刷費と会社設立当初に購入した事務用品の費用があり、その額はおよそ20万元であり、江南個人の立て替え分は、累計で約34万元であるという。江南は、当時チームの中に財務に明るい人がおらず、雇うこともできず、だいたい自分がどれぐらいの資金を投じたかを推定することしかできなかったと説明している。

また、江南は同時に「権利と義務は互いに補完し合うべきである。私の共同運営者たちは創作を除き、融資に関する事務など彼らに関心を持つべきことについて会社に来て相談せず、ただ帳簿の請求ばかりする」と発言している。さらに、「九州幻想」という商標の登録期日は2006年8月であり、登録者は協力者の一人の潘海天である。この商標は会社に属するものではなく、ずっと潘海天個人の所有となっているという。このよう混乱の原因について、江南は「おそらくすべての共同運営者は協力関係の中で自分の地位を強化しようとしているだろう。また、コミュニケーションと調和にも問題があった」と述べている。江南は当時の協力モデルに大きな問題が存在していたと次のように述べている。

まず、双方は協力する綱領を確立するべきであった。次に、出資の比率を確定し、最後に、貢献の方法を確立する必要があった。以上のルールを私達はすべてもたなかった。法律上あるいは實際上、私は私達の協力関係が本当に形となったところを見なかった。共同

運営者の一員として、誰も経済的リスクを引き受けなければならないことを喜ぶわけがないだろう。

九州会社以外、また別に 2 社を運営していることについて、彼は確かに別の 2 社を運営しているが、私はこれまで九州会社から給料を受け取ったことがないため、自分がその他の会社を運営することに「九州」と共存できない理由を見てとることはできない」と回答している。

実際のところ、江南が北京をおとずれ、雑誌が創立されてから、両者は競争関係になり、ただ、両者は打ち明けていなかったにすぎないのだ。

## 第二節 「九州門」事件

### 1 ネットワーク上の混戦

2006 年の年末、「九州門」事件の前夜、サーバーが更新されたため、9z9z フォーラムに大量の新人が登録した。フォーラムバージョンが更新されるたびに、新しいユーザーが登録するブームが起こった。しかし一方で、これらの新人は「九州」フォーラムの参与方法を理解しないうえに、むやみにスレッドを立てた。このような行為は古いユーザーからの恨み言を招いた。そのゆえ、今何在は「対九州新人老人説幾句」というスレッドを立てた。自分がインターネットを利用しはじめた時期から、九州公式フォーラムを建設するまでの過程を回顧し、この過程で付き合い合った新人の中の一部が「九州」の主要な参加者になったことを述べた。「九州」に新鮮な血液を入れるため、みんな平和共存しようと提唱したのだった。

しかし、このスレッドは一部の読者を怒らせた。ユーザーネーム「黄河之水天上来」は「砲打今何在的閃電戦」を投稿した。これは主に『九州幻想』2007 年 1 月号に掲載された、今何在が創作した「閃電戦」を非難するものであった。「閃電戦」は今何在が「大九州」を提唱するため、創作した例の文章である。

「黄河之水天上来」は「九州」を 4 年間サポートした読者としての身分で、「九州」に対して天神がおこなった行為について、疑問を呈し、また、「九州」の未来についても少し悲観し、「このような「大九州」主義は、実際に「九州」が好きな人たちは見ただけでしり込みするものだ」と発言した。このスレッドは大きな共鳴を呼んだが、多くの読者が近ごろの『九州幻想』のジョークのような風格に対して、あまねく不満を抱いていたのだ。これらの反対の声は 9z9z フォーラムだけではなく、すべての「九州」と関係があるウェブサイトにも類似の発言が現れていた。

そこで、今何在は「砲打今何在的閃電戦」にスレし、退出することができるのことに初めて発言した。そして、次のいくつかのポイントについて解釈した。

第一に、閃電戦と「大九州」はすべて「九州」ではない。「大九州」という作品は『雲

荒』、『中国式青春』、『上海堡壘』と同じように、ただ作者の作品と見なしてもよい。単に「九州」シリーズを見たいならば、直接単行本を買えばよい。今何在自身、「九州」改革を推進しているわけではなく、ただ「九州」の外に実験の場を切り開いたのであり、この「大九州」というイベントによって、より多くの創作者の参与を望んだのであり、理論家の氾濫ではなく、「九州」に貢献できる建設者の出現を願って「大九州」を提唱したというのだ。

第二に、今何在は、九州ウェブサイトの創始者と設定の整理者兼発表者の身分として、もし「九州」について、自分より発言権がある人がいるなら、成果を作り出すこと、あるいは一体どんな「九州」を作り上げたいか、またどんな方法で生命力をもって存在し続けられるか、きちんとした案を提出することを求めた。

第三に、『牧雲録』と『羽伝説』が好きではないと提起した読者たちに対して、今何在はこの二作も「九州」の世界から退出させることができると指摘した。彼はインスピレーションと創造力が失った「九州」はただ虚名と抜け殻にすぎないと考えいた。最後に、今何在は自分が今まで「九州」で経済的な利潤を獲得したことがないと指摘した。

この事件に対して、江南は NOVOLAND ウェブサイトでスレッドを立て、自分は 9z9z での自分 ID の暗証番号を知らないこと、また同時に NOVOLAND で自分はもう「九州」の総合ディレクターではなく、ずっと前から『九州幻想』の前書きも執筆していなかったと表明した。

もし前の「九州」に関わる紛争がすべて「七天神」の間での、また会社の内部における対立だといえ、今回の紛争はすでに読者の前に暴露されたものであった。さらに、「九州門」事件の導火線は 2006 年 11 月に NOVOLAND ウェブサイトで公告された「創造古卷——九州架空世界設定書定購方案」である。公告では、『創造古卷』が全部で 3000 冊の量を限定して発売するコレクションであること、また、セットごとに 256 枚のフルカラー画集一冊、CD1 枚、カラーの九州地図 1 枚、指輪 1 点、限定版番号が書いてある証明書が入っていること、以上のセット内容がすでに確定され、専用の箱で包装されること、その他に、予約購入の方法、発送する情報について詳しく説明されていた。さらに、公告の最後には「本公告は設定書の販売に関する公式の公告であり、『九州幻想』2007 年 2 月号に掲載された広告についての詳しい説明である。設定書の購入に関するすべての情報は本公告に依拠する。当公告と矛盾するニュースがあったら、すべて無効な情報である。無効な情報に従って、発生した購入行為について、本社は責任を持ってない」と説明があった。

その後、今何在は、9z9z で「關於創造古卷、九州主站 9z9z.com 和名為 novoland 網站的說明」というスレッドを發表し、発売公告と『九州幻想』の 2007 年 2 月号に掲載された広告の信頼性を承認しなかった。今何在の発言に対して、飄、つまり盛靈は NOVOLAND で「[公告] 对于 9z9z 網站相關言論的說明」を發表し、九州（香港）有限公司の社長補佐の身分において、

今何在が社長から許可を得ず、事実と合わない消息を発表したと指摘し、「九州」商品に関する情報はNOVOLANDで発表されたものに依拠すると説明した。

これにより、正式に戦争の火ぶたが切って落とされた。大角が「飄是誰？他和九州有什麼關係」というスレッドを立て、社長補佐が「九州」に参加できるかどうかについて、疑問を呈した。今何在は、「声明：現在一切対設定集的征訂活動和最終版式我並未認可」を発表し、NOVOLANDで公開された情報を認めないことを表明した。すぐに大角は「大角声明」において、九州の創始者の一員、会社の株主と副社長、さらに『九州幻想』の編集責任者として、飄の言論が会社、または公式の立場を代表できるものとは承認しないことを書き、また、設定書のことについては、自分、今何在、江南とで協議し、解決する。3人を除いて、いかなる人物による「声明」や「公告」にも取り合う必要はないと指摘した。

戦火は急速に広がり、斬鞍は「天神」の立場で「設定書与設定、九州幻想、九州公司、九州、XX与00」を発表し、九州創作チームがばらばらになったのは昨日今日の事ではないと指摘した。斬鞍にとって、『九州幻想』は知り合いの天神と編集者が参加し、制作した雑誌であり、九州有限会社は『九州幻想』と『幻想1+1』の2冊の雑誌をもつ会社であり、また知り合いの天神と編集が会社に属し、上海と北京の2つの編集部があり、複雑な人間関係をもつものであった。雑誌『九州幻想』と九州有限会社は決して「九州」を代表できるものではないし、三人の株主は「七天神」を代表できるものではなく、また「七天神」も「九州」のすべてを掌握しているわけではない。分けられるのは実現された利益だけであり、「九州」そのものではない。その潜在的な利益を分割することも、名声をうち立てることには及ばず、名声を向上は、すべての参加者に恩恵を与えることができるのだ。斬鞍はそう考える。斬鞍は「九州」の商業価値に期待せず、もし九州会社、または雑誌が自身の操作によってではなく、ただ「九州」の名を売ることによって金を稼ぐのであれば、個人的に「九州」を捨てると決めた。

ここに至って、事態は深刻になり、「九州」に関係するフォーラムは全て大騒ぎになった。また、今何在は「罵幾個人」を投稿し、江南に矛先を向けたが、その言葉は激烈であり、矛盾が激化された。そこに、ようやく江南が現れ、「致読者和九州愛好者的一封短信」を発表し、雰囲気緩和された。皆も事態が一段落し、解決できると考えた。ほどなく、novolandと9z9zにおいて同時に「解決方案提案草略」が公開され、皆が投票できる2種類の案が発表された。

案の一、ウェブ2.0の理念に基づいて、公衆に設定を開放する計画である。それには資金救援計画と利潤寄贈計画も含まれていた。「九州」と関係がある説明は次のとおりである。設定書を出版するという基本において、更に開放的なモデルを選択肢し、広大な愛好者から、設定についての意見、提案を収集し、公開ルートを通じて既存の設定に対して修訂と十全化を行う。ひとつの元設定に詳しい編集グループをリーダーにし、よりと多くの

人に「九州」を十全化することに参加できるチャンスを与える。それと同時に、リーダーとしての編集グループによって選ばれた設定は核心的設定になり、「九州」小説の創作のため新旧メンバーに開放される。

この案は初期に江南が資金を注ぎ込み、発展の問題を解決したことを強調するとともに、同時に、妨害がないように、すべての運営権と経営権を獲得するものである。

案の二は、最初の基本設定を開放し、無償で利用と改正の権力を与えるものである。この案では作者の自由が強調され、それぞれ自分の作品の著作権を持つことが許される。誰でも基本設定を改正し、自分に属する子システムを獲得することができる。子システムに付加したものを共有させるか、自分のものとして占有し創作し続けるかは、創作者本人次第である。

しかし、この解決案はその他の「天神」によしとされなかった。彼らは、この二つの案は、今まで「九州」の設定に巨大な貢献をした人々を軽視するものであると感じたのだ。二つの案を巡り、矛盾は再度激化した。江南は古参メンバーである「七天神」から信用をほとんど失い、形勢は急転直下した。

直後に、大角と今何在は大体と同じような「九州設定Linux方案」を発表した。この案では、まず1つの「九州」の最も核心的なバージョンを確認する。次に、「七天神」から最も多いメンバーの公開の認可を獲得し、変更しない「九州世界設定正式版」とする。このバージョンが発表されてからは、元設定に参加したいどんな人かいはどんな会社でも、改正と添削、または再発表の権利がない。このバージョンが変更できないバージョンとして存在するのである。そして、創作する作者に無料で提供される。しかし、このバージョンに基づいて添削した設定バージョンはすべて「九州世界設定版」の名義を利用することができない。または、「九州」元設定チームのメンバーの名義を名乗ることも許されない。誰であろうと、どんな会社であろうと「九州世界設定正式版」の名義を用い、商業イベントを行うことは許されない。つまり、このバージョンが公開された日から、公衆に属するものとなるのであり、公衆の財産を個人のお金に替える権限をもつ人はいないのである。

また、今回のネット上の論戦においては、その他の問題も引き合いに出された。たとえば、江南が帳簿を公開しないこと、江南が『九州幻想』から離れた5ヶ月間に、販売量が三分之一に下がったこと。また、『創造古巻』の具体的なコスト、北京チームに対して滞っている給料、上海チームの収入のことなど。内容はとても乱雑であり、審査弁別することができず、双方ともすべての問題をはっきり説明することができず、回避されるため、信用できない。

しかし、「九州設定Linux方案」が発表されてから、論戦にしばらく休止符がうたれた。大角、今何在、江南はフォーラムにおいて連名で公告を発表した。九州会社が大きな問題に直面していることを宣言し、3人はこの論争を停止させることを決定し、問題を解決する



ため、一回面会して協議を図る。そして結論を獲得する前に、各自の言論を削除し、マイナスの影響を免れるようにし、皆「九州」に対して、不利な討論を停止することを望むと発表した。

## 2 紙媒体における公告

確かに、ネットワーク上の口論は「九州」システムの内部と九州会社の内部における問題を明らかにした。しかし、ネットワーク上の口論は玉石混交であり、信用できないだろう。

2007年4月、『恐竜・九州幻想』に「[九州幻想] 策劃部声明」、「原「九州設定組」成員今何在 潘海天 斬鞍 水泡關於「創造古卷」的声明」、「原九州設定組四成員 關於制定並公益化「九州世界核心設定版本」的公告」そして「關於九州、關於分歧、關於未来」が掲載された。

「[九州幻想] 策劃部声明」は『創造古卷』の具体的な編成、装丁、定価決定、予約購入、代金の受け取り、出荷などに関することは北京幻想1加1チームによって操作されたものである」と声明を出し<sup>13</sup>、また、『九州幻想』2007年2月号と3月号に掲載された『創造古卷』予約購入広告は北京幻想1加1チームが直接印刷工場を通じて、もともとの組版を差し替えたこと、組版の差し替えについて『九州幻想』編集部門に知らせていないことが明らかにされた。

「原「九州設定組」成員今何在 潘海天 斬鞍 水泡關於「創造古卷」的声明」は、『創造古卷』に関する事務について、『創造古卷』はもともと九州会社が北京幻想1加1チームに制作を委託したものであるが、制作の過程で、九州会社の管理層に関連の事務をめぐって内部紛争が発生した。北京幻想1加1チームは本書の内容が大多数の創作チームの同意を得ていない状況下、作者の本書の内容に対する異議を無視し、発行と販売を行うことを自ら決定した<sup>14</sup>。また、「北京方面のチームによる編集と添削における主観的偏向および独断的なやり方は、この本の内容を私達の心の中の「九州」に対する認知を代表できなくさせてしまった<sup>15</sup>と表明した。

さらに、「私達が認める「九州」世界の設定のバージョンは依然として2003年に元「九州設定組」によって公開されたものである（このバージョンは九州幻想世界公式ウェブサイト、つまり [www.9z9z.com](http://www.9z9z.com) の核心設定コラムで調べられる）」<sup>16</sup>と声明した。

以上の声明によって、南北の「九州」の境界線がはっきり区分されたのであった。それはまた、「九州」の崩壊を宣言するものであった。

<sup>13</sup>「[九州幻想]策劃部声明」『恐竜・九州幻想』, 2007年4月, P.2

<sup>14</sup>「原「九州設定組」成員今何在 潘海天 斬鞍 水泡關於「創造古卷」的声明」『恐竜・九州幻想』, 2007年4月, P.2

<sup>15</sup>「原「九州設定組」成員今何在 潘海天 斬鞍 水泡關於「創造古卷」的声明」『恐竜・九州幻想』, 2007年4月, P.2

<sup>16</sup>「原「九州設定組」成員今何在 潘海天 斬鞍 水泡關於「創造古卷」的声明」『恐竜・九州幻想』, 2007年4月, P.2

### 第三節 多数雑誌の創出

#### 1 『九州志』の創出

江南が2006年に北京をおとずれ、まず創刊したのが先述した中学生向けの雑誌『幻想1+1』である。2007年の第1号の主な内容は「九州」の「七天七夜」シリーズである。つづいて、雑誌『幻想1+1』は『九州幻想』より高い原稿料を払い、『九州幻想』の原稿を引き抜いた。3カ月後、『幻想1+1』は『幻想縦横』と改名し、2008年12月に停刊した。

当時、江南は瀚典堂文化会社を運営しており、その下にいくつかの雑誌があった。この会社はもともと『幻想1+1』を発行するために構成したチームであり、または北京九州天辰信息諮詢有限公司の前身でもある。この会社によって、ムック『九州志』が構想され、2008年9月に第1号が発売された。

形式の上では、『九州志』は国際的に流行していた読書モデル——ムックを採用した。これは欧米、香港、台湾などの国家や地域で広範に流行していた新型の混合媒体であり、このような媒体が興った原因は近年の読者の書籍に対する娯楽性の要求が高まっていることにある。

『九州志』は「九州」をテーマにした、「九州」小説、設定、および「九州」に関する特集や写真画像を含む純粋な「九州」ファンタジー世界のムックである。

『九州志』のブログに、次のような宣伝文句が見られる。

「純粋な九州」を主旨とする「九州」テーマの新しい特典として、『九州志』は完全に九州の創建者達の初志に回帰し、広大な「九州世界」の愛好者達の期待も実現した。『九州志』の中には、いかなる「九州」と関係がない文章も現れることはありえず、言い換えれば、本書全体が九州の小説、特集、モジュールによって構成されている。『九州志』は十全に小説、設定、挿し絵などの各種の要素を統合し、純粋に「九州」という広大な東洋の架空世界を描き出し、九州の愛好者達にとって見逃せない饗宴であり、素晴らしいコレクションである。<sup>17</sup>

それ以前の雑誌『九州幻想』と比較すれば、『九州志』の内容量は膨大であり、毎号平均約40万字であり、少なくとも37、38万字ありながらも、値段は20元まで押さえられ、設定に関するページを増やし、作者によっていくつかのコーナーに分けている。更に、集まった作者たちは江南、唐缺、蕭如瑟、滄月など国内で有名な幻想作者であり、それぞれに

<sup>17</sup>『九州志』追跡報告之一, 2007年9月3日, 九州ブログ, <[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4bbaa6ac010009xc.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4bbaa6ac010009xc.html)> (参照 2013-12-10)

コーナーを担当させ、また、有名な画家張旺を主筆にすえ、すばらしい小説と設定の文とイメージが並行するモデルを採用している。

同時に、当時まだ有名でなかった漫画家夏達を起用し、キャラクターデザインを担当させた。その後、夏達は一举に第5回OACC金竜賞最優秀ストーリー漫画少女チームの金賞を受賞した。2009年2月、夏達が執筆した『子不語』は日本集英社の編集長茂木行雄と有名な漫画編集者松井栄代元に推薦され、青年向けの漫画雑誌『ULTRA JUMP』に掲載されることになり、正式に日本デビューをはたし、初めて日本のマンガ雑誌に掲載される国内オリジナル漫画になった。

架空設定に関する面では、羅四維がチームに参加した。羅四維の別名は白北五であり、キャリアの長いゲームクリエイターである。代表作は『命運交叉的lost temple』、『大烹飪』、『XIII』、『太極潜竜』などである。テーブルトーク・アールピージー界で有名な笨笨と緹爾娜琳は、九州の1つ目のモジュールを作り上げた。二人は若手に教えることが得意であったため、『九州志』創作チームが彼らにモジュール制作を担当させたことは適切な判断であったと思う。また、次にあげる目次からも『九州志』の内容は一目で分かると思う。

史無前例的電影脚本—『獅牙之卷』  
綿延三載的終極怨念—江南『商博良』  
追尋伝説中的第七種族—唐缺『龍痕』  
初出茅廬的九州模組—『河絡函紙』<sup>18</sup>

目次と内容から、『九州志』第一シリーズの目標が風炎時代の世界観のデザインを完成させ、作者に創作のプラットフォームを提供し、読者に読書の効能をそなえた重量級の小説を提供した。

『獅牙之卷』を例とすると、発売前の宣伝文案には次のように書いてある。

『獅牙之卷』は薔薇党設定グループが皆に捧げた1冊の全く新しい味のご馳走である。それは従来の小説の中に歴史を差し入れるナラティブの方法とは異なり、『獅牙之卷』は全く新しい方法を用いて歴史を叙述する試みであり、自らが先頭に立った江南、薔薇党設定グループが全力で作りに出した「小設定、大專題」である。

「小設定」とは『獅牙之卷』が風炎皇帝が即位する前の歴史を述べるだけで、前後20数年間にすぎず、物語もほとんどが天啓城内に限られるため、「九州」が

<sup>18</sup>江南(2007)『九州志』新世界出版社

もつ数千年の歴史と115万拓土地においては取るに足りない小さな時間ときわめて小さい地点だからである。

「大專題」とは『獅牙之巻』は10万に近い文字と、映画のカット割り台本に類似する約60枚の設計図を擁するが、上述の時間と地点を基準にして、1つの巨大な横断面を切り取ったもので、天啓城内の高官や貴族、市井の庶民の日常生活シーンおよび風炎皇帝の白清羽の一生を詳細にあらわしている。<sup>19</sup>

「小説の中に歴史を差し入れるナラティブの方法」とは異なる歴史を叙述する方法という宣伝文句について、筆者は、このような叙述の方法が歴史科学教育映画（ドキュメンタリー）に類似するもので、読者にある時期の「九州」の歴史と世界設定の全貌を与えるものであると考える。それは年表に比べてより精緻であり、小説の描写と読者に感移入させる部分は薄くなっている。

以上の内容から見ると、江南の今回の創刊は『九州幻想』の「大九州」という方針と異なり、「純粋な九州」を創立することを目指していることは明確に分かる。一方で、業界で有名な作家が提供する高い品質の小説をセールスポイントにし、他方で、設定を完成させる任務のため、江南が起用した新人たちは確かにその任に堪えることができている。また、『九州志』はムックとして、雑誌のようにコーナーをいくつも設けることも、短編を多数載せることもなく、どの文章もすべて十分な分量を持ち、読む価値とコレクション的価値を提供している。

ムックという媒体は書籍がもともと持っている思想の深さと品格の高さを保持しながら、同時に娯楽性を強調する特徴があり、「九州」の架空世界がもつ叙事詩的感覚に適すると考えられる。読者もまた購買欲の空前の高まりを見せている。しかし、ムックは定期刊行物ではないため、出版日が決まっていない。編集部は力を尽くして、出版時期を比較的固定させたが、依然として販売は不安定な状態であった。この弊害に対応して、『九州志』のブログにおいて販売ルートと各地の販売場所との連絡方法<sup>20</sup>が公開された。また、「東方幻想商城」<sup>21</sup>が開かれ、ネットワーク上での販売ルートが開かれた。

『九州志』は全部で三つのシリーズが発売された。2007年9月から2008年11月までの3冊は第1期『獅牙之巻』となり、2009年4月から2010年1月までに出版された3冊は第2期『葵花之巻』であり、2010年3月から2010年11月までに第三期『啓示之巻』として5冊が出版された。あわせて、11冊である。

<sup>19</sup> 「『獅牙之巻』情報、2007年9月3日、九州志ブログ、<[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4bbaa6ac010009x1.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4bbaa6ac010009x1.html)>（参照2013-12-13）

<sup>20</sup> 『九州志』各地経銷联系方式、2007年9月18日、九州ブログ<[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4bbaa6ac01000a5h.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4bbaa6ac01000a5h.html)>（参照2013-12-13）  
《九州志》各地経銷联系方式 [http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4bbaa6ac01000a5h.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4bbaa6ac01000a5h.html)

<sup>21</sup> <http://shop.novoland.com.cn>

最初の『九州志』は確かに「純粋な九州」というスローガンを貫徹しており、「商博良」、  
「竜痕」、「龐歌尼染」などの作品は品質がとても良いと言われている。しかし第二期か  
ら『九州幻想』と同様な問題が現れた。それは原稿の不足である。『九州志』はその他の  
ファンタジー作家からも原稿を集め始め、組版も第一期ほどすきがないほどではなく、第  
三期に至ると、原稿が不足し、中身がいいかげんに済ませるだけでなく、更に、「純粋な  
九州」とは逆行して、増刊号『N' PLUS』が加えられた。

『九州志』（王朝啓示録・復仇姫武神）の前書きに、江南は「合計 300 ページで、以前よ  
り「九州」を背景とする小説は 2 万字が減らした。もし「九州」に関する内容を加えたら、  
以前より 1 万字が増えただろう。約 4 万字の非「九州」の幻想小説を増やしたので、総計  
で 5 万字増えた」<sup>22</sup>と書いている。今回のコーナーの調整は「純粋な九州」を主張する『九  
州志』は、『九州幻想』とまるで一つのわだちから出たようにした。つまり、「九州」を  
メインとしてファンタジー雑誌である。

2011年、知音伝媒集団、または知音動漫公司是北京で、創刊十年目の『九州志』と雑誌  
を発行する協定を結んだことを宣言した。初発売は10万冊である。新しく装いを変えた『九  
州志』はアニメ・漫画の風格が加わった。それは、知音アニメ・漫画のプラットフォーム  
上で活躍するベストセラー作家、イラストレーター、漫画家のおかげである。しかし、小  
説の方面では多くの作者たちが加入したが、大筋の小説を支えることができたのは江南1人  
しかいなかった。

新版の『九州志』は、旧版に比べより挿し絵が増え、文章の風格は日本の漫画やアニメ  
の匂いがするようになり、全体的に、恋愛小説の読み物ようになった。また、新版には  
以前の「九州」歴史や設定に多くの変更が加えられ、更に、表紙の裏に載せられていた「九  
州」に関する創立年表は2001年から「九州」に対する構想、雑誌の創刊、単行本の出版リ  
ストとされた。しかし、リストで「七天神」が一切触れられることはなく、「九州」崩壊  
事件にも書かれていなかった。以上数多くの原因によって、再び江南の人气が下がった。

## 2 『九州幻想』の維持

「九州門」の分裂事件以後、『九州幻想』は、『九州志』の発売、出版社ベルテルスマ  
ンの中国市場からの撤退、ネットゲームプロジェクトの中止といった一連の異変に次々と  
遭遇した。

国内のすべての架空世界の模範となった後、「九州」の初期の成功はまるで自分が吐い  
た糸に縛られたカイコのように、『九州幻想』を束縛した。大角は、「ある角度から言え  
ば、そのまま進めば依然として何割かの市場を占有することが可能だが、もし予想外の動

<sup>22</sup>江南（2010）『九州志・王朝啓示録・復仇姫武神』北方婦女児童出版社

きをしたら、新しく生まれかわるか死亡するかのどちらかだ。『九州幻想』は後者を選択するのだ<sup>23</sup>と述べている。

2007年4月、『九州幻想』に「九州幻想策劃部声明」、「原「九州設定組」成員今何在潘海天斬鞍水泡關於『創造古卷』的声明」が公開されたほか、さらに「關於制定並公益化「九州世界核心設定版本」的公告」と「關於九州、關於分歧、關於未来」が発表された。

この二つの公告は「九州」の未来について計画を打ち出し、公益化を提出した。今何在、潘海天、斬鞍、水泡との四人が連名で発表した「原「九州設定組」成員今何在潘海天斬鞍水泡關於『創造古卷』的声明」に次のように述べられている。

私達は、以前「七天神」が設定したバージョンの基礎の上に、それぞれ一部分一部分ごとに原作者の同意を求め、1つの「九州世界核心設定版本」を共同で整理補完し、無料で公衆に開放した。

誰でも無償で「九州世界核心設定版本」を使うことができ、すべてのこの設定に基づいて創作された製品および製品に関する設定、すべての「九州世界核心設定版本」を背景として新たに創作されたキャラクター、ストーリーの背景、図案デザインなどの所有権は原作者に属し、原作者は単独で発行、著作権の譲渡、さらに会社をおこしてそれを商業化させる権利が持ち、原「九州設定組」の審査を経る必要はない。

すべての「九州核心設定」に基づき創作あるいは製品の運営をおこなう者は、みな「九州核心設定」というプラットフォームに子システムを創立することが可能である。例えば、「九州一縹渺録」システム、「九州一羽伝説」システムなどである。どのシステムも独立した創作チームと製品の体系を持つことができ、ただ共通の源と核心をもつだけである。しかし、これらの作品と行為は原「九州設定組」、原「九州創作組」の名義とグループ内のメンバーの名義を使うことは許されない。各子システムを創作する人は無料で開放すると声明しない限り、単独で創造したシステムの著作権の所有者である。

設定が公開された後、「九州のメイン」、「九州の正式」、「九州からの授権」「九州の公式」の類の言い方は存在しなくなり、「公式システム」も存在しなくなり、ただ同一の核心に基づいた異なる子システムチームがあるだけである。もう神はおらず、創造者しかいないのだ。<sup>24</sup>

<sup>23</sup> 潘海天 (2009) 『九州幻想・四年』新世界出版社

<sup>24</sup> 「原「九州設定組」成員今何在潘海天斬鞍水泡關於『創造古卷』的声明」『恐竜・九州幻想』, 2007年4月, P. 2

「九州」はますます多くなる規則とエリート的な独占のため、生命力を失った。その原因には自身の固有の創作の特徴があり、また商業化の過程の中で求められた著作権の制御もあった。「共同創作」システムのため、「七天神」は数年の時間を使って、論争しなればならなかった。彼らは投票によって設定案を決定する制度を定めたが、これももし誰かが設定案を拒否し、小説を書かなければ、たとえ採用されてもただ空文にすぎなくなる。これは「九州」の2度目のデッドロックであった。

このデッドロックを解決するため、「七天神」の中の3人、つまり江南、今何在、潘海天は九州会社を創立し、商業化させようとした。しかし、著作権は最初から明確ではなく、作者達が持っているのはただ自分の作品であった。商業化された「九州」も新しい設定の制度を形づくることがなく、また紛争が誘発された。さらに重要なのは、未来の発展の目標についても相違が生まれたことである。彼ら各自の中「九州」世界は明らかに異なっており、自分が考える「九州」が本当の「九州」であった。続く周知の「九州門」は理念の上の相違が運営上の差異を招き、誰か正しいかどうかはさて置き、「九州」は分裂に至った。

一方、2002年から2007年までの5年間に、「九州」の発展はその初志からそれていった。商業化する過程で、様々な能動的、受動的な要因によって、「九州」は一つの開放的な世界体系から閉鎖的な構想になってしまった。この構想はいずれかの会社が構想チームを成立させたら、数か月間のうちに作り出せる架空世界である。商業化のプロジェクトになってしまったことで、九州のもともとのチームはバラバラに崩れ、協力する情熱と共通の理念を失った。

この危機に対応して、『九州幻想』は「關於公益化「九州世界核心設定版本」的公告」を発表した。無料の「九州核心設定」が公開された後、原「九州設定組」、「九州創作組」が活動を停止すると、相応する世界は核心的規定を認めたことにより意義をもった。協力する作者は自然にルールを守って創作し、彼らの作品も自動的に世界の本質的特徴を体現するようになり、ある個人やあるチームが強行的に定める必要はなくなった。この基礎の上で無数の子世界が派生し、それぞれの子世界、つまり子システムに創作、運営チームがあるはずであるが、しかし、最終的には受け手は彼らの認可する世界を選択するのだ。

この公益化の目的とは、子システムの増加と子システム間に生まれた相互運用性が「九州」を強大化させることにある。オーサリングシステムに参加したい人、または規則が守れる人が集まるため共通の理念を持つ人たちは本当の創作の熱情が保証することができる。「公式」や「正統」の称号を奪い合うことも「九州」創世時の初志ではない。コントロール者に比べれば、「九州」にとってより重要なのは、創造者と選択者なのである。子システム間において、互いに競争があるかもしれないが、このような優勝劣敗の機制は、「九州」を長く続けさせる可能性を保持できるのである。

「七天神」の神格化を取り除く一方、『九州幻想』は以前の「大九州」概念を系統化した。「大九州」という概念は九州に平行する世界に類似し、今何在は「大九州」について「九州」以外の世界は、中国の外にさらに多くの大陸と大海があるのと同じようなもの」であり、「大九州」の意味は「天神」から創作できる地域や歴史の時間が配られることを待つ必要はなく、自分で「天神」になる<sup>25</sup>ことにあると解釈している。

潘海天の観念は、「九州」幻想は「九州」だけではなく、さらに多くの他の幻想のアレイ (array) にもなれるものであり、「ある日、この言葉は私達が「九州」を書くことを示すばかりではなく、さらにこのような誰でも参加できる創作方式も代表できるようになる、これが私の望みだ」<sup>26</sup>と述べている。次々に蒸気演義、母系~~の~~氏族、見えない都市、都市の危機など一連の構想が登場した。潘海天は、それぞれの構想は1つのシリーズであり、どのシリーズも皆一つの「九州創作方式」であると提起し、また、「私が「みんな15分の九州を書こう」と言うとき、それは決して小説あるいはストーリーだけを指すのではない。創作に興味があり、ストーリーが把握できる人は小説を書けばいい。架空世界を想像する事が好きで、架空世界が構想できる人は設定を書けばいい。二者が結び付き、世界は自然とゆっくり形づくられるのである」<sup>27</sup>と述べている。

「九州自由行」というコーナーをはじめ、様々なイベントが積極的に開かれた。作者は連合し、「九州」の大筋としての『九州・縹緲録』と『九州・羽伝説』などの胤朝歴史を避け、その他の時代の建設が始まった。また、その他のファンタジー世界の建設も応援されるようになり、宣伝原稿などがどんどん載せられた。例えば、「周天」、「雲荒」などがあげられる。

それにより、『九州幻想』は包括的な道を歩みはじめ、現在や現実との繋がりを重視するテンポの速い幻想小説が幻想文化の新しい流行となった。<sup>28</sup>しかし、内容と形式上の変革は「九州」システム内部において活発であるばかりで、雑誌の売り上げはあまり上昇しなかつた。

『九州幻想』は2005年の夏に創刊され、2006年の夏に販売量のピークに達した。一年間で販売量は数倍に増加し、雑誌業界では幻想ジャンルの雑誌の奇跡とも言える。この奇跡は当時『九州幻想』の制作に参加する作者と読者の貢献と切り離して考えることはできない。

しかし、2007年の夏から、まず雑誌コードが取得できず、次に、販売量が大幅に下がりはじめ、最も分かりやすい現象が元々雑誌を購入できた読者たちから雑誌がどこでも買えないといったような苦情が殺到したことである。しかし、販売量が大幅に下がった根本的

<sup>25</sup>『九州幻想』2007年2月、P.70

<sup>26</sup>潘海天「草根狂飲——每个人写十五分钟九州」『九州幻想』2007年5月号、P.9

<sup>27</sup>「九州漫遊指南」『九州幻想』2008年1月号、P.110

<sup>28</sup>潘海天(2009)『九州幻想・四年』新世界出版社



な原因は販売のサイクルにある。2008年11月に出版された『九州幻想』において「近頃、『九州幻想』の発売時期が不規則な問題について、主に印刷と発売ルートが順調でないことが原因である」<sup>29</sup>と説明された。その後オフ・シーズンに入り、販売量が下がるのもきまっていた事であった。

『幻想1+1』、『九州志』および『幻想縦横』の発売によって、九州会社はやっと取次である記憶坊文化との連絡を密接にすることができたが、記憶坊文化は『九州幻想』の発売も担当した。しかし、2007年の夏以降、今何在が一方的に協力を中止したため、無数の悪い結果を生み出すことになった。

いきなりルートを替えると、そのルートにとって、『九州幻想』は全く新しい商品であるため、取引先の基盤ほとんどないか、極めて少ないものと言える。改めていちからルートの体系をつくり上げていかなければならない。販売ルートもキャッシュフローの通路であり、販売量が30万か、40万かのような実力をもつ商品に限り、発売ルートが変わっても維持することができるのだ。販売ルートの変化のために、『九州幻想』の発売量は大幅に下がった。また、取次にとっては、もともとの販売ルートに突然商品の欠落が現れたことになり、信用の損失を招いた。その上書籍と刊行物の発行にはすべて帳簿期があり、雑誌は3ヶ月間から半年までの間で清算し、書籍は一年間か二年間経ってから清算する。後続の商品が更に資金の滞納や決算されないようになると、取次は経済的に数十万の損失をこうむることになる。

新しく契約した取次の万榕は、契約する際、九州会社にも何度も元の取次が今まで築いた基盤を捨てるのは非常に残念なことであると言った。当時の状況では、確かに元の取次のほうが『九州幻想』の発売ルートを広げたのであった。

読者にとっては、それまで『九州幻想』が買えた書店から突如雑誌が見当たらなくなってしまったことになる。書店が取次に問合わせても、商品の後続情報を知らないため、読者からの問い合わせに対しても回答できなかった。このことは読者の購入欲にも打撃を与え、『九州幻想』の販売量は引き続き下落した。

### 3 再協力と「第二次九州門」

ほどなく、分裂した「天神」たちが再度協力できるチャンスを迎えた。

ネットゲーム『誅仙』を開発した完美時空会社は、2008年に江南と今何在のグループを買いとり、縦横中文ウェブサイト投資し、江南と今何在は完美時空会社に属する縦横中文ウェブサイトに勤めることになった。二人とも副社長として、別々の部門を担当することになった。まだ投資が決定されていないうちから、江南と今何在は「九州」について、希望を見出したのだった。

<sup>29</sup> 「九周刊」『九州幻想』2008年11月号、P.250

今何在は、「もしも完美時空に九州プロジェクトをやるプランがあるなら、単独でどちら側と交渉しても協力することはできない。両社の著作権をすべて買いとって、はじめて「九州」をプロジェクトにすることが可能になるのだ」と述べ、2008年11月に、文章によって「九州」が資金を得て支えて発展し続けるため、または「九州」開発の方向性を監督できるために、江南と再度協力したと説明している。しかし、赴任後、今何在がお互いに信頼感が存在せず、協力が不可能であると気づき、また、今何在が『九州幻想』と『九州志』を一本に合併することを提案したが、江南に拒絶された。

委員会を創立する提案、つまり投票で「九州」の基本設定を決定させる点においても、双方の意見は一致しなかった。今何在の考えは、「「九州」をやるなら、基本設定が必要であり、基本設定を一致させなければ、皆書きたい放題に創作し、委員会が制御できない。その内実は、同一の名前で別々のものである」というもので、また、今何在は再協力が表面的なものであり、実際には内部で闘争が続いており、どちらも自分のものを相手のものにとってかえたいのであり、このような協力は偽りの協力にすぎないと言っている。

今何在は九州の未来をととても憂い、完美時空が投資しないのは双方がまたお互いに攻撃し合っており、協力関係が作られていないためであると感じた。また、江南と今何在は九州チームに数千万字の作品を創作したが、原稿料を除いたら、利潤は雀の涙ほどであった。

再度の協力は「原九州設定組」を元に戻せず、新しい運営モデルを打ち出せないまま、対立は依然として存在したため、ほどなく紛争が再び発生した。

最初、名義上のオフィシャルサイトであった9z9z上で、『創造古巻』に言及して、喝采する人がおり、それを今何在が見みると、自分がずっと認めていない商品が好評を受けたことに対して、怒りをおぼえ不満と鬱憤を発散したのであった。

2009年1月8日、江南チームによる言葉の挑発を受け、今何在は豆瓣ウェブサイトで『大過年打孩、閑着也是閑着』を発表し、昔のことを蒸し返し、江南に従って働く従業員に対して批判闘争を展開した。また、江南が急いで金を儲けることと功利を求めることを目的にし、『創造古巻』を制作していると指摘した。渡鴉は今何在の批判に対して、印刷量が7千冊であり、コストがまだ普通でないため、4000元だけの利潤しか得ていないことを明らかにした。

戦火は再度燃え上がり、全部の九州の愛好者がいるプラットフォームに蔓延した。江南、大角、多事、遙控、蕭如瑟らが次々に登場し、読者たちも観戦しながら、スレッドで討論した。彼らの口論は間違いなく、多くの人の夢が積み重なった世界を粉々にした。この世界は確かに天神によって創造されたが、開かれた世界は彼らの理想あるいは商品であるだけではないと読者達は疑問を持ち始めた。

今回のネットワーク上の混戦はお節介な読者たちに「第二次九州門」と呼ばれているが、再度大量の忠実な読者を失った。また、多数の読者の心の中での「天神」の地位も動揺し、

「天神的黄昏」と称された。一方、今回の昔のことを蒸し返す行為から、改めて「九州」が崩壊した原因を追究することが可能である。

「九州門」が行われた根本的な原因は信用の問題である。つまり、創作チームの間に、互いに信用が失われていたことである。

しかし、「第二次九州門」を通して、江南が正面から色々な問題について回答したため、もっと多くの謎が解けてきた。「大体2008年の真ん中から、私は自分が『九州縹緲録』を書き続けることはまるで下り坂を下っているようだと意識した。確かに、『九州縹緲録』というシリーズ名はとても安全で、私に毎年高い収益を得ることを保証できた。しかし、創作し続けても、作品が進化することはないと理解した。また、販売高もだんだん下がってきた。しかし、私はシリーズの創作を中止するつもりではなく、ただ主役の視角をかえ、新しい路線でストーリーを構築したが、これが『九州縹緲録』が6巻で完結した原因である。主人公たちの若い頃の勇敢な事績を叙述し上げたのだった」と、江南は述べている。

「アメリカで愛していない学科を専攻する自分は不完全な人生を過ごしている」と自ら言ったように、「九州」の初期において江南が積極的に設定の討論に参加したのはアイデンティティを獲得するためであったといえるだろう。また、「九州」という名前を献上し、『縹緲録』をシリーズに加入させたのも同じように、恐らくただの試みにすぎず、人生のために1つの出口を探そうと試みていたのである。彼が自分と自分の作品を「九州」シリーズに縛りつける態度には喜びの中に躊躇を帯びたものがある。「見た目ではこれが私が興味を持ったことであり、参加できそうなことである。その上、ビジネスに将来性があるなら、試してみることも可能である。少なくともアメリカで苦しみをなめる生活はしたくない」と発言しているように、当時の江南はこのような気持ちで「九州」に参加したのだった。これは今何在と大角とは明らかに異なる。

そのために、それぞれの動機によって、微妙に致命的なズレが発生したのだった。確かに、江南は作品、人脈、ビジネスの手腕において、チームの中で実際に核心的作用を發揮した。しかし、彼が自分のすべての人生を「九州事業」に差し出すつもりはないと発言したように、彼の動機と心理状態は、自らを一人の参加者と意識するものであった。九州会社は彼の1つの試行的な「プロジェクト」であって、必ず発展させ続けなければならない「息子」ではなかった。今何在と大角が「九州」に創始者としての心理を持っているのに対して、彼にはそれがなかったことが指摘できる。江南は次のように述べている。

「九州」自身のいくつかの特徴もチーム内部の対立をゆっくり助長するものであった。当時、私の考え方は単純であり、どの作品が成功するかに関わらず、「九州」の成功であると感じていた。ある日、みんなに創作された作品に登場した人物にすべて連絡で

き、最後に1部の長巻にとけ込ませられると思った。それはある個人の力作であるばかりでなく、「九州」世界に属するものであったなら、どれほど良いことであろうか。

これは「九州」に対する最初の期待であった。しかし、「九州」は歴史性を強調し、年表も詳しく連続しているため、異なる作者の作品に高度な互換性が求められる。その上、雑誌の草創期においては、天神たちに大量の原稿を供給することが必要とされ、また、スピードや設定の束縛、互換性の要求は、間違いなく疲労感と不自由さを感じさせるものであった。慌ただしく雑誌を発行することの悪い結果は、「九州」が工場生産へと変わり、天神たちが「九州」の建設労働者となることとして現れた。当初の雄壮偉大なヴィジョンも生産の重さに押しつぶされ、江南も次第に自分がこの生産に縛られていることに気がつき、自分なりのことをしたなり、退出したくなったのだ。確かに、他の人の目の中では、彼は九州会社の社長であり、核心メンバーであるが、彼自身の心においてはただの退出する権利を持った参加者にすぎないのである。後は北京に行き、問題と対立を回避し、最後に決裂したのだった。

一方、今何在は「第二次九州門」の論争の中において、更に深い段階の原因を暴露した。2006年に『創造古巻』の出版によって引きおこされた論争は単純に、誰が「九州」設定の最終様式を決定する権利を持ち、その設定の著作権を所有すると宣言するのかという問題と要約することができる。

『創造古巻』の出版に関する意見の相違は、まず「九州」世界自身の設定に対する考えの相違によるものであり、今何在は江南が提出した設定が他の作者の作品を排斥するものであると考え、大角は設定が十全でなければ、改正し続けなければならないと考えたのだ。次に、所有権についての相違である。当時、九州(香港)有限公司は『創造古巻』の出版計画をスタートさせたが、しかし、上海支部は時間どおりに完成させなかった。その後、会社が『創造古巻』計画を北京支部に振り替えたが、今何在にとっては、江南が自分と大角の意見を顧みないまま、『創造古巻』の改正と出版に関する事務を接収管理したと思えたのだ。『創造古巻』以外にも、財務について今何在は江南に対して早くから不満をもっていたのである。

更に深いレベルについていえば、今何在の立場で開発したかったのは、「九州」の無形的な価値であった。「九州」のような集団的な設定は知的所有権として、資本の比重を占めるが、『創造古巻』はまさにこの知的所有権に基づく商業製品であり、今何在が忘れられないことは江南の独断で出版された製品が九州のライフサイクルを貸越すると同時に、そうした行為が天神たちに受け入れられなかったことだ。今何在は多くゲーム開発会社と商談をもったが、多くの人が「九州」のモデルをとっても良いと考えたが、彼らは「九州」と協力することより、自分で新しいものを作ることを選択したのだった。

今何在の意見は簡単に次の三点にまとめられる。

第一に、『創造古巻』が未成熟の設定として、さらに未成熟の製品として、市場に向けて押し出されたことは「九州」世界の設定の商業価値を下げた。

第二に、『創造古巻』の発売は十分な利潤を得られなかった。換言すれば、「九州」の名義で儲けたお金を再投入にすることに欠けた。

第三に、「九州」は多数の人で協力で創造するプラットフォームであるため、設定は絶えず更新する必要がある。『創造古巻』はある程度このことの前途において障害を増やした。

最後に、この行為はチームのメンバーから許可を得てない。チームのメンバーが江南に対する不満によって、「九州」を創作する情熱が失ったことも排除できない。これも「九州」損失になる。

大塚英志は、「小さな物語」という言葉を、特定の作品の中にある特定の物語を意味するものとして用いている。それに対して「大きな物語」とは、そのような物語を支えているが、しかし物語の表面には現れない「設定」や「世界観」を意味する。

そして、大塚によれば、個々の作品はもはやその「大きな物語」の入り口の機能を果たしているにすぎないという。消費者が真に評価し、いまや競って買うのは世界観なのだ。とはいえ実際には、設定や世界観をそのまま作品として売ることが難しい。従って現実には、実際の商品は「大きな物語」であるにも関わらず、その断片である「小さな物語」が見せかけの作品としてられる、という二重戦略が有効になる。大塚はこの状況を「物語消費」と名付けた。

つまり、江南に従う北京チームによって出版された『創造古巻』は、世界観と設定を「九州」シリーズ小説と同じような作品として、または断片化された「小さな物語」を読者に提供した。そのため、「九州」のライフサイクルを貸越させた。もし創作チームの創作理念、経営理念の相違と『創造古巻』の出版が、二度の「九州門」を誘発した争いの発端を表象しているのだとしたら、『創造古巻』の出版による「九州」のライフサイクルが貸越されたことは崩壊の本質的な原因だったと考えられる。

#### 第四節 再出発

二度の「九州門」事件によって、南北チームは徹底的に対立した。2010年から2012年までの間に、江南に従う北京の北九州のチームの「九州」に対する態度は利益を図る道具と考えるものであり、『九州志』にも江南の小説がなかったら、抜け殻にすぎないというものである。それに対して、今何在と潘海天が率いる『九州幻想』は多方面の創作モデルを探求するが、しかし、雑誌の品質から見ると、上海の南九州チームは散漫である。

『九州志』が安定的に毎月1号ずつ発行されているのと比較して、『九州幻想』は2009年は7冊、2010年は10冊、2011年は7冊と発行され、そして、2012年に2冊が発行されると、停刊を宣言した。

確かに、雑誌は一時的に停刊されたが、筆者は2012年が『九州幻想』チームにとってモデルチェンジの時期であると思う。雑誌の業績はないが、全面的に拡大化の仕事を展開している。

2012年1月10日19時半から21時の間に、九州は新浪微博と協力して、「九州十年微訪談：潘海天、今何在、多事、水泡、遥控五天神再聚首」<sup>30</sup>というインタビューを行っている。斬鞍は時差が原因で欠席し、江南は用事のため参加しなかった。新浪微博のユーザーが提出した質問について、「天神」が回答する形式で、「九州」の創作を振りかえり、「九州」の未来、また2012年の創作計画に関して述べた。

2012年5月1日、上海文芸出版社から『九州全民幻想一咬時代』が出版された。この本は有名なファンタジー団体である「九州幻想」が全力で制作した、ゾンビの特集である。欧米では昔からゾンビ文学があり、また、近年ではドラマ『ウォーキング・デッド』、ゲーム『植物 vs. ゾンビ』が流行っているように、ゾンビも吸血鬼と同じように、幻想の創作母体となっている。流行しているファンタジー文化の場をテーマにして、大量のゾンビが現れるニュースの画像も挿し絵も文章もあり内容が豊富である。また、潘海天、馬伯庸、駱靈左、巖蓬、李多などファンタジー作家を招請し、全く新しいテーマの叢書である「九州全民幻想」は、再び「大幻想」の道を開いた。編集主幹の潘海天は創刊号に新しいスローガン「サイエンス・フィクションの飛行高度を下げ、幻想と現実の違いを抹殺する」を提出している。

潘海天は新浪微博で『九州全民幻想』を編集する目的について、「一つ新しい道を探したい。小説以外に、例えば画像や科学の模型、データや図表などのような新しい形式で幻想の観念を表現し、毎号1つの新しいテーマを探したい。画像（可能ならミニ映画も）などの形式で製作することは比較的困難なため、現段階では不定期のムックの形式で進もうと思う」と述べている。

筆者は『九州全民幻想』が提唱する「大幻想」は以前に『九州幻想』が提唱した「大九州」の延長だと考える。

また、2012年4月28日に海九州幻想文化伝媒は、最新の3DファンタジーMMORPGゲーム『九州世界OL』を5月11日に正式にテストし始め、多数のルートを通じて限定の登録IDを発給すると発表した。

『九州世界OL』は、『九州幻想』に掲載された「暗月六族本」の広大で豊富な各種の要素を使い、今何在が執筆する『海上牧雲記』における時代を背景とし、暗月紀という不安

<sup>30</sup>潘海天ブログ<<http://talk.weibo.com/ft/201201103429>> (参照 2013-12-13)

定な災害と事変に陥った世界が現れる。それは六大人種、つまり人族、羽人、河絡、夸父、魅、鮫が共に支えあう世界である。<sup>31</sup>

2012年の調整を経て、2013年『九州幻想』が豆瓣閲読プラットフォームを借りて、電子版で復刊した。豆瓣閲読は豆瓣ウェブサイトによって開発され、Web、iPhone、iPad、Android、Kindleなどの設備で読めるデジタル閲読サービスである。2012年5月7日、システムが完成してから、料金を払い作品を購入したか、あるいは無料の作品を注文したユーザーは50万にのぼる。豆瓣閲読は内容の領域を限らず、歴史、科学技術、芸術、デザイン、生活などの多様なジャンルをカバーし、短編作品と書籍を一体させる総合プラットフォームである。作者が個人的に直接豆瓣閲読に作品を発表することができ、発売後、作者は直接作品の販売利益から収入を得られる。

2013年8月から、毎月「九州」の雑誌が二冊アツプされている。『九州幻想』電子雑誌の第一号は『九州幻想・鋒芒畢露』であり、小説と設定を含め、純粋な九州の内容を6万字提供した。純粋な九州を中心とする『九州幻想』に対して、『九州の幻想・九歌』は騎桶人が編集を担当し、「非九州」、ファンタジー、サイエンス・フィクションなど、幅広い幻想小説を中心とする電子雑誌であり、「九州」が貫徹している「大幻想」を実行するものである。この2冊は、多看、アマゾン、京東での発売が折衝中である。2012年『今古伝奇奇幻版』が停刊され、創刊10年の「九州」誕生の地である『飛・奇幻世界』も、2013年6月に停刊された。それによって、専門のファンタジー定期刊行物は全面的に市場から退出した。

2013年5月20日、科幻世界雑誌社委員会の決定によって、『飛・奇幻世界』編集部が停刊に関する公告を発表した。『飛・奇幻世界』は2003年12月に創刊され、2013年6月に停刊されるまでに、増刊を含め、計117号が出版し、10年の間に大量の実力を備えた幻想文学作家を発掘し、ファンタジーブームにも応え、それを推進した。現在有名なファンタジー作家はほとんど、この雑誌に作品を発表したことがあり、多くのファンタジーファンとサイエンス・フィクションファンが雑誌をサポートしてきた。

ファンタジー雑誌が次々と停刊された原因を探究すれば、『今古伝奇・武俠版』の元編集長鄭保純は「ファンタジー文学はだんだんネットゲーム、映画、テレビ、アニメ・漫画などの形式で表現され、小説であっても、だんだんと携帯電話、コンピュータなどのメディアに発表されるケースが増えている。しかし、伝統的な紙媒体の雑誌のほとんどが1ヶ月を周期にして、読者に小説を提供しており、徹底的に競争力を失っている」<sup>32</sup>と述べている。

『飛・奇幻世界』の停刊説明を書いた副編集長拉茲は「停刊された根本的な原因はやは

<sup>31</sup>『九州世界 OL』5月11日封測 水墨副本体験古香意」2012年4月28日、電玩巴士<<http://ol.tgbus.com/news/csww/201204/992166.shtml>> (参照 2013-12-13)

<sup>32</sup>「中国老牌奇幻期刊全面落幕」2013年5月23日、新京報 <<http://www.bjnews.com.cn/ent/2013/05/23/265077.html>> (参照 2013-12-13)

り市場の需要である。ここ数年、すべての雑誌社とも販売量がひどく下がっていることを感じている。特に青少年向けの雑誌にとって、モバイル端末の影響はもっとも大きい」<sup>33</sup>と述べる。

ファンタジー雑誌がそれぞれ停刊された現状によって、編集者と雑誌社にファンタジージャンルの雑誌がどうやったら生きられるかという問題が提出された。そして、2013年に『九州幻想』が豆瓣閲読に働きかけ、電子雑誌を発行したことはこの問題に対する、自らこの問題を実践したものなのである。

ところで、2010年に『九州幻想』編集部は「城市毀滅」シリーズ、「看不見的城市」シリーズという企画で星空賞特別貢献賞にノミネートされた。2009年から2012年までの間に、「城市毀滅」シリーズは9編、「看不見的城市」シリーズは11編が発表されており、スタッフは国内のサイエンス・フィクション、ファンタジー、武俠の三つのジャンルを含め、一流の陣容、一流の構想と原稿の品質が揃えられた。また、二つのシリーズは2013年に単行本で出版される機会も獲得し、『毀滅之城：地球碎塊』と『毀滅之城：生命副本』に書名を改めて、新星出版社から出版された。

2つの特集の発行は以前に今何在の構想を検証している。つまり、「永久機関」のような、永遠に財産を創造し続けることのできる「九州」である。

2013年、「九州」の再出発について、筆者はさらに観察し分析する態度を持っている。

---

<sup>33</sup> 「中国老牌奇幻期刊全面落幕」2013年5月23日、新京報  
<<http://www.bjnews.com.cn/ent/2013/05/23/265077.html>> (参照 2013 - 12 - 13)



り市場の需要である。ここ数年、すべての雑誌社とも販売量がひどく下がっていることを感じている。特に青少年向けの雑誌にとって、モバイル端末の影響はもっとも大きい」<sup>33</sup>と述べる。

ファンタジー雑誌がそれぞれ停刊された現状によって、編集者と雑誌社にファンタジージャンルの雑誌がどうやったら生きられるかという問題が提出された。そして、2013年に『九州幻想』が豆瓣閲読に働きかけ、電子雑誌を発行したことはこの問題に対する、自らこの問題を実践したものなのである。

ところで、2010年に『九州幻想』編集部は「城市毀滅」シリーズ、「看不見的城市」シリーズという企画で星空賞特別貢献賞にノミネートされた。2009年から2012年までの間に、「城市毀滅」シリーズは9編、「看不見的城市」シリーズは11編が発表されており、スタッフは国内のサイエンス・フィクション、ファンタジー、武俠の三つのジャンルを含め、一流の陣容、一流の構想と原稿の品質が揃えられた。また、二つのシリーズは2013年に単行本で出版される機会も獲得し、『毀滅之城：地球碎塊』と『毀滅之城：生命副本』に書名を改めて、新星出版社から出版された。

2つの特集の発行は以前に今何在の構想を検証している。つまり、「永久機関」のような、永遠に財産を創造し続けることのできる「九州」である。

2013年、「九州」の再出発について、筆者はさらに観察し分析する態度を持っている。

---

<sup>33</sup> 「中国老牌奇幻期刊全面落幕」2013年5月23日、新京報  
<<http://www.bjnews.com.cn/ent/2013/05/23/265077.html>> (参照 2013 - 12 - 13)

### 第三章 九州世界におけるストーリー、設定について／内容

第一章と第二章では「九州」をそれぞれネット時期、紙媒体時期に分け、「九州」事件の経緯を簡単に述べた。

中国ファンタジーの先駆者と認められ、出版業界でも話題になった「九州」は発展する過程で、未熟な部分を多く有したが、もし中国現代幻想文学史を書くとするれば、「九州」は無視できない座標だと断言できる。

確かに、「九州」が今まで発展してきたのはネット文学ブーム、そして幻想文学が普及したタイミングと時期的に一致したこととも関連がある。しかし、「九州」が多くの読者に認められ、かつ専門的な雑誌、単行本、ゲームが発売されたのは「九州」の内容とも無関係ではないと思う。

まず最初に、ネット上の発言が混乱に陥ったため、「七天神」と呼ばれる設定チームが組織された。それから、「九州」は一気に発展した。しかし、「九州門」事件が起きたため、膨張を続けながらも「九州」は決して統一的な設定が作られなかった。「九州門」事件が起った後、「原『九州設定組』成員今何在潘海天斬鞍水泡関于『創造古卷』的声明」に以下のような宣言がなされた。「私達が承認する「九州」世界の設定は、依然として2003年に元「九州」設定チームによって公開されたバージョンである。（このバージョンは当時九州幻想公式ウェブサイト、つまり [www.9z9z.com](http://www.9z9z.com) では、調べることが可能であった）」

34

しかし、このバージョンに書かれた設定の文章は創作するためのものであり、少し複雑である。また、九州幻想公式ウェブサイト、つまり [www.9z9z.com](http://www.9z9z.com) はもう廃止された。

したがって、「九州」創造初期に『飛・奇幻世界』に掲載されたコーナー「竜淵閣」を引用し、「九州」がどのような架空世界であるかを、簡単に紹介しよう。

最初、広大な空虚な空間には、混沌しかなかった。混沌の中に、二種類の原始の力は争いを始めた。この二つの力は「墟」と「荒」と呼ばれており、「墟」が混沌を分裂させる意志であるのに対して、「荒」は凝集の力を代表する。つまり、「墟」は物質と精神を分化させ、別のものにさせたい。一方「荒」はすべてのことを統一させ、混沌に戻したい。この二つの源力によって、蒼茫が生まれた。蒼茫には無限な大陸があり、この大陸と天空にある星が蒼茫と総称されている。「九州」大陸は蒼茫の一部であるが、海水の上がり下がりのため版図は異なり、異なる歴史を持つ。また、「九州」大陸に通用された暦法は星流紀元であり、一千年を1紀とする。填闔時期に、洪水によって大陸は3つの陸地に分かれ、それぞれ東陸、北陸と西陸と呼ばれている。

<sup>34</sup> 「龍淵閣——九州發現与探索」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年2下半月，P.26

九州には六つの人種がある。人、羽、夸父、河絡魅と鮫である。人族は最も普通な人種である。羽人は毎年特別な時期に飛び回ることができる。夸父は巨人のような体であるのに対して、河絡は背が低い種族であり、地下に住んでおり、高度な技術と製錬文明を持っている。また、魅は意識の凝集体であり、虚魅と実魅の二種類がある。虚魅は体がない。しかし、虚魅は物質を吸収し、他の人種の形態をまねて実魅に凝集できる。体が繊弱だが、抜けている魂力が持っている。鮫は海洋の支配者であり、彼らはひれを持ち、陸地の上での前進が困難である。

それ以外に、各種の動植物が存在する。しかし、全てが高等な知恵を持つ種族というわけではない。そのため、文化も形成されていない。

三つの海に仕切られ、異なる陸地ではそれぞれの文化がある。異種族の間に文化が異なるだけでなく、同じ種族で国々もそれぞれの言語と文化がある。東陸に王朝と諸侯は相当長い間に戦争している。北陸は遊牧民族と夸父は草原と雪原間で走って駆ける。西陸は神秘的な土地であり、砂漠と密林に埋められたなくす文明である。元々、この三つの大陸は1つの古老帝国に統一されたことがある。当時、この三つの大陸はまた繋がっており、総面積の約1百50数万拓(約4千万平方キロメートル、海洋の面積は含まれていない)、まだ海水に仕切られてなかった。その帝国の王様は帝国を瘍、瀚、寧、中、瀾、宛、越、云、雷の九つの地域に分けた。その後、帝国が崩壊し、洪水は世界を変え、限りがないストーリーがこの大陸で起った。<sup>35</sup>

この簡単な紹介は“九州”のあらましをうかがうことができ、幻想文学の定義に一致し、まちがいなく架空幻想世界に分類させることも可能である。J・R・R・トールキンによれば、私達が日常生活する「第一世界」(the Primary World)が神に創造される世界。「第一世界」に縛られる人間は「第一世界」に対して不満があったら、神に与えてくれた権力を利用し、幻想で「第二世界」(the Secondary World)を創造することが可能である。第二世界は第一世界についての模擬である。従って、それらの創造者、つまり幻想文学の作者たちは「準創造者」と呼ばれている。<sup>36</sup>

風間賢二は「第二世界」を更に三つに分類した。第一に現実の距離と遙か遠く隔離する異なる世界である。第二に、現実の世界と不確定な国境がある異世界である。第三に現実の中に含まれる異世界である。<sup>37</sup>

実際には我々は、「第二世界」の一つ目の種類、つまり現実の距離と遙か遠く隔離する世

<sup>35</sup> 「龍淵閣——九州発現と探索」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年2下半月、P.26

<sup>36</sup> 猪熊葉子訳(2003)『妖精物語についてファンタジーの世界』評論社

<sup>37</sup> 風間賢(1986)「ニハイ・ファンタジーの三つの様式」『幻想文学 特集◎ハイ・ファンタジー最前線』16、P.56

界を「異世界」と簡単に呼ぶことができる。「異世界」の特徴は現実の世界と全く関係がなく、単独な体系として構築されていることだ。また、現実の世界と時空の上の連絡が存在しない。「九州」はJ・R・R・トールキンに指摘された「第二世界」、または風間賢二による分類の第1種類、つまり現実の距離と遙か遠く隔離する異なる世界に属すると考えられる。

作家が「第二世界」を構築するのは不思議なことで読者を驚かしたり神秘的な色彩を添えるためだけではなく、それは作品自身にとって必要なのである。つまり、プロットを構築しテーマを表現するため、主人公と読者を未知の世界に投げ、旅をさせる。しかし、「九州」の創造者達には別の意図もある。江南はこう語る。「ファンタジーについて語る際、日本のアニメや漫画、あるいは西洋の魔王や騎士しかでてこない状態を望んではいない。中国は東洋文化の中心国として、自分なりの想像国家があるはずです。」<sup>38</sup>

1990年代に、外国からのファンタジー文学が翻訳され、出版され、ファンタジーゲームが次々輸入されたことに応じて、2000年前後、中国国内のオリジナルファンタジーは確かに増えた。しかし、ほとんど無秩序で、魔法と仙術修行が混在した作品が多かった。核となる世界観が作品には見えないし、世界運行の原理も定められてない。従って、読者に認められる架空世界は生まれなかった。『科幻世界』の編集長阿来によれば、私達の祖先は多彩な幻想の宝庫を残し、奇麗な幻想文化が出来上がった。昔から、中国では幻想文化は欠けてないのに、現代は我々はこの伝統を失ってしまった。現実主義の作品と現実すぎる生活のせいで私達は自分がまったくこのような想像力を持ってなかったと思い込んでいる。<sup>39</sup>

この現状に対して、「九州」の創造者たちは「東方奇幻（中国的なファンタジー）」を創り出すことを望んでいた。できるだけ、現実のような複雑な世界を作り上げ、それぞれ人種の文化を描写する。また、大陸文明と海洋文明の間の衝突、遊牧部落と農業帝国の間の戦争、さらに空から地底までを舞台とした物語を編み出したいと望んだ。

ところで、今何在は「九州」は中国人に創造されたファンタジー世界である。それゆえ、生まれつきの東洋的である<sup>40</sup>と語った。しかし、草創期には「九州」世界についての世論は主に二派に分かれていた。一方では「九州」は正統的な西洋ファンタジーファンに嘲笑され、「九州」は「ファンタジー」の看板を掲げ東方文化を売り物にする作品だと非難された。その一方で、「九州」は本格的な東方文化のマニアにも卑しめられた。彼らは「九州」の人種や魔法など、すべては西洋化されたものであり、いわゆる東方の皮をかぶった西洋のものにすぎない。「東方文化」とは言えないし、まるで大きいバナナのような移住者だと非難された。

何故「九州」はこのように大きい影響力をもたらし、多い読者を獲得したのか。本章ではテキスト解析の方法で「九州」の設定とストーリーを分析し、「九州」シリーズの設定、

<sup>38</sup>「龍淵閣——九州発現与探索」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年2下半月、P.26

<sup>39</sup>阿豚「筆会特別報告」『科幻世界奇幻版』2004年10下半月、P.96

<sup>40</sup>「龍淵閣——九州発現与探索」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年2下半月、P.26

またはストーリーの原型を追及する。創作者がどのように「西洋ファンタジー」と区別をつけ、「東方ファンタジー」の創造を試みたか。この方針に基づいて創造された「九州」には、一体どのような独自性が認められるか。これらの特徴はなぜ生まれたか、そして、これらの特徴は「九州」が人気を博したこととどのような関係をもつかを本章の目的として、明らかにしたい。

## 第一節 設定

### 1 設定の出所

#### 1-1 中国の古典文学と神話から

2007年9月29日、新浪互動試聴は江南と今何在に取材した。インタビュー中、ネットユーザーに「九州」の羽人と鯨人はすべて『山海経』からインスピレーションを受けたのか?と聞かれ、江南は明確に「はい、そうです」<sup>41</sup>と答えた。

また、2004年2月、『飛・奇幻世界』に掲載された「九州」コラム「九州地理雑誌」にも、直接「山海経」の挿絵を引用した。(添付資料3、図1)

さらに、「九州」の動物画像は、しばしば『山海経』の怪物の変種に見える。例えば、2004年10月『飛・奇幻世界』に掲載された「九州」の地図上の動物(添付資料3、図2)は、「燭竜」(『山海経』海外北経)を似せて作ったものだろう。(添付資料3、図3)

確かに、上述した例のように、「九州」は中国の古典文学の幻想要素からの啓発を受けている。また、神話に現れたキャラクターやイメージを借りて作られている。しかし、『山海経』の続作のようなものではなく、江南は「1つの世界をまるまる創り上げ、かつ単なる「中国」的な世界ではないものを目指している」と述べている。<sup>42</sup>

ここで筆者は「九州」の「夸父」という人種を中国古代神話における「夸父」と比較し、「九州」における中国の古典文学と神話についての材料収集と利用について説明したいと思う。

「九州」における「夸父」は清韻フォーラム時代に提案された。2002年1月4日、江南と遙控は連名で『古九州地理設定』を投稿した。スレッドで「前身世界」を荆、徐、揚、豫、青、兗、雍、梁、翼の九つの地域に分けた。これも現在まで「九州」にずっと利用されている地理構造である。また、「前身世界」に生存する種族を人族、蛮族、羽族、鱗族と鯨族と提案した。「矮人」(ドワーフ)や「巨人」(ジャイアント)や「精霊」(エルフ)などは元々西洋ファンタジーに代表的な種族のため、意識的に採用しなかった。五つの種族には体格に大小の差もなかった。

<sup>41</sup>新浪互動試聴<<http://video.sina.com.cn/v/b/7126654-1192438080.html>> (参照 2013 - 11 - 28)

<sup>42</sup>「江南訪談」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年4下半月、P.25

しかしながら、同日このスレッドに多事が「夸父」と「河絡」の二つの種族名を提出した。

その後、2002年1月16日に遙控は清韻フォーラムで小説「夸父的金貨」を発表した

また、2004年6月の『飛・奇幻世界』の、「九州」の創世伝説と「神裔」思想を解説する文章の中で、夸父族についての詳しい設定が以下のように述べられている。

夸父がどうやって誕生したかについては確定的な説がない。夸父の文明発展の初期には、先賢達は口述で創世伝説を流伝させてきたと想像できるだろう。そして、口述によって、いくつかのバージョン。18日に、文章を改正し、改めて発表した。また、小説の後に夸父種族の貨幣制度を書き添えた。

これが「九州」における「夸父」の創出である。(添付資料3、図4)

2003年に、元「九州設定組」に公開されたバージョンでは以下のように説明される。

夸父族：巨人種族である。聞くところによると神話中の太陽を追いかける巨人夸父の後裔のため、「夸父」と呼ばれている。伝説の中では、彼らは無限に背が高くなるが、ほとんどの夸父は人類の身長2倍ほどしか大きくなれない。山のように大きい夸父の出現には特別な事件や長い寿命などの必要条件がある。夸父族の数量は常に少なく、人族のわずか1パーセントである。彼らは北陸の雪山と高原に分散して住んでいる。夸父の体力は精神力と互いに排斥し合うため、夸父の星祭師は往々にして年寄りじみやつれている。<sup>43</sup>

現在、最も普及しているバージョンが三つある。それは俗世説、神裔説、先天地説である。三つのバージョンは少し異なるところがあるが、大体の内容は同じである。

#### 夸父創世伝説

世界は生命を代表する墟神と壊滅を代表する荒神に管理されている。荒神と墟神は戦い続けている。どちらが敗けたら、二万年間昏睡する。四万年前に、荒神は勝利したので、全世界は壊滅に陥り、すべての生命が消滅した。光もなく、暗もない。「有」もなく、「無」もない。墟神が生き返り、巨人の盤古に転生するまでそれは続いた。

盤古は両腕を挙げ、尽きることがない力を身につけた。彼と荒神は二千回渡り合ったが、勝負がつかなかった。最後に、盤古は巨獣になり、荒神を飲み込んだ。そこで、荒神は大地になり、盤古は空になった。盤古の心臓は太陽になり、両肺は月

---

<sup>43</sup>公式ウェブサイト

と影月になり、肝臓は郁非になり、脾臓は填闔になり、胃は印池になった。また、盤古の血はすべて空にある星になった。軌道は盤古の脈絡である。

盤古は荒神を丸飲みにした後、荒神を鎮圧するため、それぞれの人種を創造した。これらの人種を生存させるため、さらに各種の動物と植物を創造した。生命の種が続ければ、荒神は生命の息に永遠に鎮圧され、目が覚めることはありえない。そのため、東陸でこの二万年間に生命が満ちあふれた。ある日、荒神が生き返り、すべてを消滅させるまで。

その後で、人種の誕生について三つの伝説に相違が生じた。

俗世説によると、夸父族はその他の人種と同じように、盤古に創造された。すべての人種は同時に誕生し、衆生が平等であり、盤古の子孫である。夸族の薩満は断固としてこのような伝説に反対する。長年の教化によって、夸父族内部ではこのような理論はすでに消滅させられた。

神裔説は夸父族内部では、受け入れられ、信奉された理論である。神裔説では盤古がそれぞれの場所を鎮圧するために各種の人種を創造した。高山を鎮圧するため羽人を創造し、地面の下を鎮圧するため河絡を創造し、海を鎮圧するため竜を創造した。最後に、彼は衆生に自分の偉大な勝利を目撃させたいと思い、自分の形をなぞり、鮮血を使って巨人夸父を創造し、荒神の魂を鎮圧させた。従って、巨人夸父は盤古の後裔であり、最も気高く、強大な人種である。また、空は盤古の化身のため、この理論は天裔説、または星裔説とも呼ばれている。

このバージョンの伝説によると、魅は盤古に創造された種族ではなく、彼らは神の意図に従わない生命である。そのため、巨人夸父は魅に対して、生まれつき憎しみを抱いている。魅が荒神の意志が変化した生物であり、使者であり、また、夸父の敵であると思っている夸父さえいる。

三つめのバージョン先天地説のことは急進的な宗教の宗派によって伝えられている。このバージョンによると、墟神と荒神との闘争は二人の闘争ではなく、二種族間の戦争である。そこで、盤古は夸父族の祖先と首領であり、彼が夸父を率い、荒神及び荒神の子孫と戦争した。（荒神の子孫が誰かについては、説が一致しない。荒神の子孫は消滅したと思う人もいるし、魅が荒神の子孫であると信じている人もいる。

この説はとても急進的だが、そう思われる理由は二つある。まず、このバージョンを信奉する夸父は夸父族が全種族のリーダーであり、夸父族の使命は他の種族を統率し、荒神の残りの子孫を全滅させ、荒神の蘇りを抑制することだと考えている。もう一つは、この説によると、夸父は天地より早く生まれたため、たとえ天と地がすべて壊滅したとしても、

夸父は依然として生存できる。また、天と地がすべて壊滅した後、盤古は人間の形に戻り、すべての夸父の子孫のために新しい完璧な世界を創造してくれるのだ。

宗教と信仰によって、夸父内部でもたくさんの小さな派閥が存在する。急進的な説もあるし、保守的な説もある。しかし、彼らは自分が夸父の後裔だと認めている。2つの部落が異なる信条を持ちながら、同一の祖先の子孫だと認めているのだ。そのため、夸父族内部には闘争が少ない、その上、総じて言えば、すべての夸父部落が酋長とシャーマンのもとで、団結する。一方では共通の信条の基礎であり、一方は夸父が家族と血族関係を重視するためである。

夸父に関する伝説は主に『列子・湯問』と『山海経』に見える。（添付資料3、図5）  
『山海経・海外北経』にはこう書かれている。

夸父は太陽と落日を逐って走り、のどが渇いて飲み物が欲しくなり、黄河と渭水の水を飲んだ。しかし、黄河と渭水の水でもたらず、北方で大沢の水を飲もうとしたが、まだ行き着かぬうち、途中で渇きのために死んだ。そのつえを投げすてたところ、鄧林に変わった。<sup>44</sup>

また、『山海経・大荒北経』にはこう書かれている。

大荒の中に山があり、成都載天と名づけられる。人がいて、二匹の黄色の蛇を耳飾りにし、二匹の黄色の蛇を持つ。夸父と名づけられる。后土は信を生み、信が夸父は自分の力を考えず、太陽を追いかけようとし、禺谷で追いついたが、黄河の水を引いてきて飲んでも足らず、大沢まで走ろうとして、行き着かぬうちに、ここで死んだ。応龍は蚩尤を殺してから、さらに夸父をころした。<sup>45</sup>

中国古典文学における夸父はただの神話人物である。しかし、上述のように、「九州」では夸父は呼称と巨大な体形をそのまま用いながら、一つの人種に変化させた。また、盤古に関する神話も夸父民族の神話伝説に溶け込んだ。

『中国神話伝説大事典』によれば、唐代の『芸文類聚』と清代の『繹史』に引用されているのが盤古神話の原型である。『繹史』巻一に引く『五運歴年紀』にはこうある。

この世に始めて生まれた盤古が臨終を迎えた時。その全身に大きな変化が生じ、口

<sup>44</sup> 前野直杉(1975)『山海経・列仙伝』集英社、P.420

<sup>45</sup> 前野直杉(1975)『山海経・列仙伝』集英社、P.580



から吐き出す息が風と雲、発する声が雷鳴、左目が太陽、右目が月、四肢と五体が大地の四極と五岳、血液が河川、筋と血管は道路、筋肉が田畑、毛髪と髭鬚が天上の星、皮膚と産毛が草花や樹木、歯と骨が金石、心髄が珠玉、汗が雨や露になり、身中のさまざまな虫が風に感応し庶民に化した。<sup>46</sup>

「九州」における「盤古」の設定はこれと全く同じパターンだが、変化するものが異なる。また盤古が自らの意志で各人種などを創り出す点も異なる。

簡単に言うと、「九州」の夸父は古典文学、または神話における夸父の加工である。また、他の神話と混合し、出来上がったものである。

蕭茹瑟が「九州」は特別な風格を持っている。私がそれを確信したのは「夸父」の二文字を読んだ瞬間であった。古代神話は私達の共通の下層の記憶であり、たった二文字で、私は全民族の魂まで読むことができた<sup>47</sup>と指摘したように、「九州」は神話における形象と符号を利用し、読者の共通感と呼び覚ます。

また、「羽人」、「鮫族」などの設定も同じく『山海経』から発想され、同じような手段で内容を添加し、イメージを豊かにしている。

## 1-2 現実と歴史からの変形

現実を照り映えさせるのはファンタジー作品の一つの特徴である。「九州」設定の編纂、小説の創作にも多くの現実の中の物事が参考にされている。

「九州」の地理を例に挙げると、「九州」という言葉は歴史上『禹貢』に初出する。大禹が治水する時、天下を九州に分けてから、九州は中国の代名詞になった。もう一つの説では、黄帝が「九州」の創始者である。

『禹貢』に書かれた「九州」はそれぞれ徐州、冀州、兗州、青州、揚州、荊州、豫州、梁州、雍州と命名され、これと「九州」世界創草期に提出された地理名は全く一致する。

2002年1月4日、江南と遙控は連名で清韻フォーラムで「古九州地理設定」を発表し、前身世界を荊、徐、揚、豫、青、兗、雍、梁、翼9つの地域に分けた。「洋々たる大海に、いくつかの大陸が形成され、その中にひとつの文明が繁栄している地区があり、いくつかの人種がこの大陸で生活している。部族連盟から創立された晁帝国では、彼らに探索し調べた世界を9つの州に分けた。古代帝国はとっくになくなったが、もとの九つの地区の区分は保留され、そのまま使用された」<sup>48</sup>

確かに、それ以後の設定バージョンでは9つの地域をほかの漢字で命名している。しか

<sup>46</sup> 鈴木博『中国神話・伝説大事典』(1999)大修館書店、P.566

<sup>47</sup> 「名家訪談島嶼&公寓」署名なし『飛・奇幻世界』2005年10月、P.34

<sup>48</sup> 今何在「龍淵閣」『飛・奇幻世界』2004年6下半月、P.30

し、前身世界を踏襲し、9つの地域という地理構造が現在まで採用されている。疑いもなく、最初の地理構想は完全に中国古代文献における「九州」に啓発されたと言えるだろう。

2003年に公開されたバージョン、つまり「九州門」事件以降核心設定に宣言させられたバージョンでは、9つの地区は、それぞれ殤、瀚、宁、瀾、越、宛、雷、云、中の漢字に命名された。大陸をめぐるのは「浩瀚洋」と呼ばれている水域であり、陸地の間は3つの内海である。それぞれ渙海、濰海と滌潦海と呼ばれている。大陸は3つの内海により東陸、北陸と西陸に分けられている。(添付資料1と添付資料2)

地図からうかがえるように、三つの大陸の地理は大体以下のような特徴がある。

東陸は最も高い雷眼山脈が大陸の中南部にあり、山脈が東西に走る(東西走向)。雷眼山脈より北は中州と呼ばれている。それは文明の進んだ地域であり、かつ「九州」の中央に位置するためである。雷眼山脈より南は越州と呼ばれている。中州より東は瀾州と呼ばれている。雷眼山脈のはずれには宛州がある。

北陸の最も東側は寧州と呼ばれている。寧州の北側は烏揚大河、また河の北側には飛び越えることができない雪山がある。西北面は狭くて長い峡谷で瀚州と繋がる。瀚州は広大な平原である。西側は殤州である。瀚州と殤州の間に、北陸に最も高い蛮古山脈がある。

西陸の中央部は沈砂海と呼ばれている海湾である。沈砂海より南方は雷州であり、北方は雲州である。

以上が「九州」の大体の地理構造である。地理の細部設置は中国元代の版図を参考にし、明らかに現実をまねた痕跡が見える。

宛州を例にとろう。

宛州は東陸の西側にある。北は中州と接し、東は越州と隣り合っている。面積は約12万拓。建水と西江に分かれ、大部分は丘陵地帯である。中州と接するところは平原である。また、雷眼山脈と北邛山に影響を受け、越州と接する地形は複雑である。山脈に近い雁返湖は大部分の河川の発祥地である。

宛州の気候は温和であり、冬はあまり寒くないし、夏はあまり暑くない。ほとんどの地区は乾燥しておらず、降水は適切である。木本植物の生長に適し、広葉樹林が多い。

上述したように、宛州の地理構造、また気候は中国の東南丘陵地帯に似ていると感じられる。そして、商業が発達しているところも似ている。それ以外のそれぞれ地域の特徴も現実と似ている。例えば、雲州における巫術も雲南と似ているなど。

なぜこのような類似性が感じられるかの原因を探ると、設定チームが「九州」世界を設定する際に、確かに大量の史料を参考にしたからである。

江南は自分が「『九州縹緲録』の創作のきっかけを回顧する際、いつも五代十国の時代に思い至る」<sup>49</sup>と述べた。また、多事も「九州」を創世する時期、『世界通史』、『科学

<sup>49</sup>江南「九州縹緲録綱領」『科幻世界奇幻版』2004年4下半月、P.25

簡史』、『ナショナルジオグラフィック』シリーズを読み、中国の考古の記録映画を全部観覧した」<sup>50</sup>と語ったことがある。

さらに、新人を育成し、作品を講評する時、直接に史書から例を出す事例も多い。例えば、江南は非設定チームメンバー尾指銀戒の作品「九州・飛」を評論する文章で、「もしあえて欠点を指摘するとすれば、私は会話に使われた言葉がぎこちないと思う。（中略）蛮族は北方遊牧民族のため、言語がもっと簡潔はず。『蒙古秘史』と『黄金史』を参考にしたら、セリフとのレベルアップの助けになると思う」<sup>51</sup>と述べたことがある。

そして、「九州」の全体的な歴史を中国の歴史に対応させると、※厳密に対応するわけではないが、おおむね以下の表のようになる。

表 九州—中国王朝対応関係

王朝	継続期間	その王朝を舞台とする代表作	対応する中国の王朝
燹	約350年間		夏 商
晁	約540年間	斬鞍『朱顔記』 斬鞍『青蘅伝』	周
賁	約400年間		
胤	約700年間	大角『白雀神亀』 江南『縹緲録』 今何在『羽伝説』 大角『風起雲落』	唐  五代十國
燮	約120年間	江南『捭闔録』	宋
晟	約300年間	天平『鎖山河』	
端	約300年間	今何在『海上牧雲記』	明
徵	約600年間	蕭茹瑟『斛珠夫人』	清
昕	未祥	多事『跋浪』	

<sup>50</sup>「焦点作者閱讀多事」署名なし『九州幻想』2005年11月、P.32

<sup>51</sup>江南「跋」『科幻世界奇幻版』2004年8下半月、P.129

大筋の歴史に関する設定の権利が「七天神」に掌握されることに対して、「九州」の参与性を高めるため、いくつかの設定権限が開放された。例えば、動物と植物の設定権限が開放された。これらの設定も同じような変形特徴が現れる。

この設定は変形の典拠も明らかにしている。描写の助けになるよう、「九州」に生存する生物はたとえ不思議な生物でも、常に現実にいる生物の例を出しながら、説明された。例えば、「大風」という巨大な鳥類は、江南の小説に描写された以外に「生物篇有翼垂雲」<sup>52</sup>にも設定文として『九州幻想』に掲載され、詳しく描写された。設定文章の説明部分には「「大風」は翼手竜、モア、始祖鳥を参考にし、創作された生物である」と述べられている。また、三つの生物に挿絵をつけ、生活習慣の簡単な解説も加えた。確かに、当時の『九州幻想』の雑誌コードは科学普及刊行物なので、科学的なものの掲載が必要だったという可能性も排除できないが、読者に1つの虚構なものを描写させる方法として、良策と言えよう。

また、「生物篇草原鎌刀馳狼」<sup>53</sup>にも同じように、馳狼という動物についての設定文に、原型動物の写真とそれらの動物の生活習慣の簡単な解説が加えられている。

初期の「九州」、特に「前身世界」における設定とストーリーはどの時代の歴史に基づいたかをはっきりと見抜くことができる。例えば、『九州縹緲録』における人族と蛮族との戦争は、中国で古代から長い間繰り広げられてきた北方の遊牧民族と中原の戦争に取材し、それを写し取っている。

しかし、設定チームが結成され、創作する人の増加によって、このような痕跡はだんだん薄くなった。「九州」に現れた設定、人物、歴史は模倣した具体的な対象が最初ほど簡単には探し当てられなくなった。

江南の説明によれば、「私達の目的は1つの世界をまるまる創造することである。それは単なる「中国」風の世界ではなく……あるいは「九州」世界の東陸のような……東方化された土地である。しかし、私達は中国文化に基づいて創造したものであるし、設定チームが全員中国人を考慮して、システムの「中国化」を推進した。従って、中国人が中国風のファンタジーを創作しようというのは単なるスローガンだけではなく、理想でもある」と指摘した。

### 1-3 外来の影響とユニークな特徴

ファンタジーの起源はもともと西方にあり、また、日本ではファンタジーを改良し、東方の要素を取り入れて、日本式ファンタジーが生まれた。それでは私達はもっと東洋的な

<sup>52</sup> 「龍淵大典」署名なし『九州幻想』2005年8月号、P.56

<sup>53</sup> 『九州幻想』2005年12月号

要素を入れ、中国独自の中式ファンタジーを作り上げることは可能だろうか。これが「九州」設定チームの初志である。

1990年代中期、西洋ファンタジーの翻訳がいくつか出版された。中国の読者はこれらの作品を通じて、西方のファンタジー文化、作品のキャラクター、各種のファンタジー元素について全面的な認識をした。また、1990年代の後半、二十一世紀出版社が「大幻想文学」シリーズを出版した際に提唱した各種のファンタジー文学の理念は、当時、影響力は児童文学の世界に限られたが、潜在的に出版社の同様の事業を行おうという考え方に影響を与えた。外国のファンタジー小説の導入と出版により、中国で大量のファンタジーファンが育成された。そして、香港と台湾からの武侠小説も過去の20年間に大量の本土ファンタジーの潜在的読者を育成した。

ほぼ同じ時期に、つまり1990年代、『ダンジョンズ&ドラゴンズ』もコンピューターゲームとともに、中国に上陸した。しかし、それは公式に輸入する形ではなく、全く民間的なルートで広がったため、伝播路線を明らかにすることは簡単ではないと思われる。

早期に「九州」に注目した作者、参加者と読者がこれらの作品の読者とプレイヤーであった例は珍しくない。

設定チームの一員である水泡によれば、「私の心の中では、ファンタジーは『ドラゴンランス』シリーズと『ダークエルフ物語』である」<sup>54</sup>と指摘した。水泡が清韻フォーラムで最初に架空世界の創造を発起した行為も確かにこれらの作品と関係がある。「ある時期、私は『ドラゴンランス』シリーズと『ダークエルフ物語』に夢中になり、自分でも3編の西洋ファンタジー小説を創作してみたかった。そして、あまりに数人の協力創作モデルに対して、興味が持つので、みんなにいっしょに参加することを招待した。」<sup>55</sup>

また、斬鞍も「ずっと前からファンタジーを読むのが好きで、出国する前からすでに『指輪物語』と『ドラゴンランス』シリーズなどを読んでいた。」<sup>56</sup>と述べた。

そして、創作チームの最年長者、多事も「宮崎駿監督と高橋留美子に影響を受けた。最も影響を受けたのは小野不由美先生の『十二国記』である。小野不由美先生が中国の周朝の文化と『山海経』における伝説に基づいて執筆した作品であり、現在の日本の学生が戸惑っている人生の問題を描写している。私は小野不由美先生の作品に深く感動した」と語っている。<sup>57</sup>

江南は筋書きについて質問された時、D&Dのプレイヤーキャラクターの創造モデルに直接言及しながら、キャラクターの武力、知力、魅力を挙げつつ、ストーリーの展開をほのめかしたことがあった。<sup>58</sup>

<sup>54</sup>「名家訪談新警故事」署名なし『九州幻想』2006年1月号、P.50

<sup>55</sup>「水泡訪談」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年10月下半月、P.139

<sup>56</sup>「斬鞍訪談」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年10月下半月、P.123

<sup>57</sup>「名家訪談 聖地亞哥的文学土匪——多事訪談」署名なし『九州幻想』2005年11月号、P.36

<sup>58</sup>「天神答問」署名なし『九州幻想』2005年10月号、P.82

上述のように、外国ファンタジーの導入による「九州」の誕生、または設定への影響は軽視してはいけないう。さらに、最初の『科幻世界奇幻版』と『九州幻想』初期の雑誌は頻繁に西方のファンタジーの挿し絵を使用している。<sup>59</sup>

後に張旺が「九州」のために創作した人種のイメージ図は好評を博した。それから、「九州」独自の挿し絵が増えてきた。

張旺も自分の大学時代には「確かに、先生の指導を受け、そわそわして落ち着かない気持ちを抑え、深い中国画の芸術に浸った。しかし、どうしても直せない「悪習」があった。それは、本来古雅な芸術の作品の中に意識して、アメリカ映画か日本のアニメ・漫画の要素を入れることである。」<sup>60</sup>と同様な発言をした。

そのため、「九州」においては、自分たちの「東方奇幻」を作り上げるという方針に基づき、できるだけ外来ファンタジーの引用を避けた。原稿募集の要領には以下のように明示している。「小説原稿にはコンパクトなプロットを用い、冗長を避けること。文章はできるだけ流暢につとめ、当て字や句読点の乱用などを少なくすること。また、歐洲式言葉と日本アニメに登場しそうなセリフは禁止する。題材については制限しない」<sup>61</sup>。

確かに、創作者たちはつとめて「東方奇想」の尊厳を守ろうとしたが、西洋ファンタジーからの影響、または模倣は依然として見える。例えば、種族「羽人」は呼び名は中国古代神話に現れる翼がある人間に由来するが、体形の特徴、矢を射る技能、吟じる魔法は明らかに『指輪物語』におけるエルフの模倣である。また、早期に人種「羽人」の特徴を解説した文章では、常にエルフを例に挙げ、両者を比較しつつ説明された。

また、有名な竜の三大法則にはこうある。その一、竜族に会ったことがある人はいない、その二、竜族の存在を証明することができる人はいない、その三、竜族の不存在を証明することができる人はいない。形式上から言ったら、アイザック・アシモフによる「ロボット三原則」をまねたものだろう。

一方、創作を模索する過程で、設定チームが外来ファンタジーと区別するため、努力した部分も明らかにみえるだろう。「九州」の竜に関する創出過程を例として説明する。

長きにわたり「屠竜」（竜殺し）という夢が「九州」に存在した。竜は、あるいは、殺戮されるために創造されたと言っても構わない。竜の特徴として、数量はまばらで、出産は困難である。また、竜は最も偉大な秘道士でもある。しかし、あまりにも強大すぎて、その他の種族の生存バランスに影響を与えた。しばらくして、設定のバージョンが更新された。それによると、竜は1種の獣類ではなく、知恵の生物である。身長は20尺に達し、双翼がなく、歐洲の竜のような爬虫類の外観を維持している。知力が極度に進化したジュラ

<sup>59</sup> 『科幻世界奇幻版』（2003）『九州幻想』早期の雑誌（例：2004年6月号、P.82）

<sup>60</sup> 「張旺簡介」署名なし『九州幻想』2005年7月号、P.7

<sup>61</sup> 「徵稿啟事」署名なし『科幻世界・奇幻版』2004年2月号、P.115

紀の恐竜に類似する。巨大な体と長い生命を持っている。だが、設定チームはそうすると、「九州」大陸は竜の大陸ということになってしまい、『ドラゴンランス』シリーズと区別できないではないかという疑念を抱いた。後に、今何在は竜の三大法則を提案し、龍族の存在は設定から廃止した。

筆者dは、この創出過程、または創造された龍のイメージは中国人の心の中にある龍のイメージと合っていると思う。江南は、「私自身にとって、龍の本当の姿は描写できないものである。ちょうど孔子が老子に会った時、龍のようなため息をついた、というように。長い雲の間でとぐろを巻き、一般人にはよく分からない、それこそ私の心の中にある龍のイメージである」<sup>62</sup>と語った。

また、読者による分析は「九州」と西洋のファンタジーとの関係をうまくまとめている。「九州」の種族設定は確かに西洋のファンタジーを剽窃した痕跡が見えるが、背後には東洋的哲学思考の味わいがある。絶対的善と絶対的悪のようなものが存在しておらず、普通の人間に存在する欲求、困惑、抗争と喜びが溢れている。「九州」はファンタジーの世界であり、現実の影であり、「道」の思想も含んでいる。」<sup>63</sup>

「九州」の世界観は道家の思想と似ている部分、つまり「荒神」と「墟神」の闘争伝説をベースに構築された。両者の戦いによって、蒼茫が誕生した。蒼茫は無限の大地とその上の天空と星の総称であり、「九州」は蒼茫における一つの大陸である。また、蒼茫に存在する神は純粋な精神概念であり、上述の「荒神」と「墟神」に分裂された「神」のかけらは人格と外形を持っておらず、喜怒哀楽、欲求、言語もない。従って、彼らは天の神様と言うよりも、永遠に世界の運行に影響を及ぼすプログラムである。「自然的な意志」と解釈できると思う。敵対している「荒神」と「墟神」は人格と外形を持たず、善悪が未分な上、互いに補完し合い、一方が消えれば、も一方は生き延びるという循環のシステムである。この点で西洋ファンタジーにおける善悪の対立とは根本的に異なる。

また、西洋ファンタジーの特徴としての「剣と魔法」という主題も「九州」には現れていない。たとえ似たような設定が現れても、筆者はその使用手段と意図が異なると判定する。

例えば、「九州」でも『指輪物語』と同じように、指輪がストーリー展開を推進する伏線の一つとして使用されている。赤井敏夫『トールキン神話の世界』が指摘するところによれば、『指輪物語』における指輪は支配を意味するものであり、指輪の持ち主は不死の存在である。しかし、指輪の持ち主は禁忌を侵犯するという意味もある。指輪を巡って展開された物語は繰り返し現れた願望である。持ち主たちの悪運は避けられない宿命ではなく、禁忌を侵犯した結果である。

<sup>62</sup>江南「彩虹的盡頭」後記『科幻世界奇幻版』2004年4月、P.32

<sup>63</sup>「回音谷」『飛・奇幻世界』2005年1月号、P.156

一方、「九州」にも指輪が登場する。それは天駆という組織のシンボルとして出現し、持ち主は天駆武士の身分を持つ。一般的に、天駆武士は指輪を子孫か弟子に渡すが、継承者が組織から承認を獲得できるかどうかは彼ら次代である。また、特別の指輪は7つあり、内側に銘文が彫られ、「七宗主」に属し、宗主の地位を表明する指輪である。この7つの指輪はストーリー展開に影響を及ぼす。

指輪のデザインから見ると、二つの指輪は大体一緒だが、『指輪物語』の「中つ国」における指輪が支配と不死を意味するのと異なり、「九州」における指輪は身分を象徴するうえ、世界を救うイメージも持っていると思われる。

## 第二節 ストーリー

### 1 メイン小説（主線小説）

「九州」の創出目標は西洋ファンタジーと対抗できる東洋ファンタジーである。その上で、最終的に実現したいのは、1つのファンタジー世界の規則を創造し、作者は共通な世界を背景にして、ストーリーを展開させること。また、新しい作者が創作に参加する場合は先行する作品と既存の地域文化設定を借りることにより、世界観や背景を紹介する文章を節約できること。さらに、すべての作品の間は互いに呼応することができ共に複雑で雄大なストーリーの体系を創造することである。

一方、「九州」の設定とストーリーはほぼ同時に編纂されたために、設定チームは長い間に設定についての論争に陥った。江南によれば、「九州」の歴史は小説の中で説明される<sup>64</sup>つまり、設定は小説の伏線である。また、大角も「小説は永遠に最上位に位置づけられる。設定は作者に対するサービスであり、作者を縛るものではない。読者にとっても心配はいらぬ。設定を読まなくても、八十パーセントが理解できる小説こそいい作品だと思う<sup>65</sup>と語った。

従って、小説も「九州」に対して極めて重要な構成部分である。

設定チームが成立した初期から、本筋の歴史に関連する小説の創作権限は開放されていなかった。そして、最も注目された部分について、天神の間でも論争があった。そのため、比較的に「九州」の特徴が表現されたメイン小説はほとんど「七天神」の作品である。

主要な七人の作家に特徴に対する筆者の総括は次の通りである。

「九州」の読者が江南の個人的な係争に対してどの考えているか、また彼が「九州門」事件の際に一体何をしたかなどに関わらず、作品から見ると江南の『九州縹緲録』が「九州」の代表的作品だということについて批判できない。「九州」の全貌を最も反映することができ、東洋ファンタジーの要素と歴史の重々しさを持つのは『九州縹緲録』だと認めら

<sup>64</sup>江南「老妖答問」『九州幻想』2005年12月号、P.158

<sup>65</sup>「大角訪談」署名なし『九州幻想』2005年8月号、P.44



れている。ストーリーの進め方、読ませる力、リズム、また広大な作品に対するコントロールの仕方、心を揺さぶる文章などの方面に関して、「九州」の作者に彼よりもっと良い人はいないだろう。「九州」事業のことに関わらず、これは否定できない事実である。

斬鞍の作品にはファンタジーのような成分が少ない。九州公式フォーラムでも豆瓣ウェブサイトでも、もし「あなたが最も推薦する九州作家は誰か」のようなスレッドが投稿されたら、不思議なことに十中八九のユーザーが斬鞍を支持する。斬鞍の作品は「秋林箭」、「博上灯」「水晶劫」などの短編と「旅人」シリーズがあり、どちらも優秀な作品である。

今何在は『悟空伝』によって、ネット上でスターになった。「九州」に関する主な創作は「羽伝説」である。また、九州ウェブサイトの成立、雑誌『九州幻想』の画策アイデアに関する功績は消えることはないが、小説創作上では大きな成果がない。

大角は中国の第3世代のサイエンス・フィクション作者における極めて優秀な人材である。銀河賞を四回受賞したことがある。彼の文章は想像力に溢れ、美しい言語と悠遠な境地が好評を呼んでいる。また、「九州」の歴史の編集について、抜きん出た貢献をしている。

多事、水泡と遙控は作品は少ないが、「九州」の世界設定を確立させた。その中、別名SHAKESPACEの遙控はサイエンス・フィクションとファンタジーの二つのジャンルで創作した経験があり、「九州」の縁の下の力持ちのような人物と呼ばれている。早期に彼が設定について行った改訂により堅実なファンタジーシステムがうち立てられた。彼ら三人は「九州」を創作する初志はリラックスのためにすぎず、創作も当然断片的である。

確かに、「九州」の創作者たちは実力があり、武侠とサイエンス・フィクション界の作家が常に創作に参加してきた。しかし、『九州幻想』が創刊されて以来、原稿が緊迫する問題はずっと存在していた。複雑な世界設定、設定チーム内部に存在する論争はやはり周辺の自由な作者にとって、創作に参加しにくくするものであった。

「九州」に存在する本当の問題は「現在の作品からみると、系統性と一貫性が欠けていることだ。それに対して、社会と自然に関する部分は細部まで設定されている。また、最も重大な問題は支柱となる作品がないことだ。既存の短編は叙述面ではそれぞれの長所があるが、ストーリーの展開や感情の描写には不足がある。換言すれば、私たちには進歩できる空間がある」と大角は指摘している。<sup>66</sup>

上述のように、最も「九州」の全貌を反映し、東洋ファンタジーの要素と歴史の重々しさを持つのは『九州縹緲録』だと認められているため、私は主に『九州縹緲録』を紹介することで、「九州」シリーズの小説の特徴をまとめたいと思う。

江南の創作計画によると、「九州」の胤朝全後を『九州往世書』、『九州縹緲録』と『九州捭闔録』三つのシリーズに分け、創作するつもりであった。すべてのシリーズは蛮族と東陸の覇権の奪い合いに主眼を置く。夸父、河絡はほとんど登場しない。羽人との間にいく

<sup>66</sup> 「大角訪談」『科幻世界奇幻版』2004年4月号、P.2

つかの国境都市の争奪戦があるが、羽人種族の国内のできごとについては書いていない。廃位させられた羽人の御姫様が主役のひとりとして登場するだけだ。

『九州往世書』は縹緲録シリーズより40年前の歴史を描写し、胤帝国の絶世兵法家である公山虚が帝国の九番目の皇子白清羽を補佐し、二度にわたり蛮族に北伐した物語である。

『九州縹緲録』が描く王朝の晩期には、帝国は16個の諸侯の国に分裂し、北陸も内乱に陥ったため、乱世の時代に入った。主人公姫野と呂焜塵は南北帝国未来の君主の身分として登場する。彼らは詭道軍事家の項空月、天演士の西門也静、歌吟者の羽然、冥殺暗殺者の龍襄、不動大尊の息轅と合流し、天駆武士七星歴史を再現した。かくて、南北対抗時代が始まった。

『九州捭闔録』はそれから120年後を描いている。姫野本族の子孫は弟姫昌夜の子孫に追い払われ、単独の「野王」族になった。各種の事件を経て、姫雲烈は再び「野王」の一脈に地位を奪回させた。そこで、東陸晟王朝は燮王朝に取って代わり、歴史上後燮王朝と呼ばれた。

最も力量を感じさせるのは『九州縹緲録』シリーズであり、『蛮荒』、『蒼雲古齒』、『天下名将』、『辰月之争』、『一生之盟』と『豹魂』の六冊が出版された。『九州縹緲録』シリーズに属す最初の作品は「虎齒」という中編小説であり、『科幻世界奇幻版』に掲載した後、好評を受け、科幻世界雑誌社から出版された『2004年中国科幻小说選』に収録された。この小説から、「九州」世界における東陸人と北陸の「蛮族」が次第に定義され、江南自身やその他の作者による作品の中で発展していった。一連の小説は単一ストーリーの形式で掲載され、描写対象は近いものの、厳格なプロットや論理上の整合性が全くない。さらに、いくつかの齟齬が見られ、時に事件の時間順も多少逆さまであり、理解しにくい。従って、「縹緲録」と名づけられたのである。その後、文章が一定数量まで蓄積し、連続できる筋が現れた時、江南はストーリーの歴史順をきちんと整理し直した。また、添削し潤色した後に、長編の単行本として出版された。また、短編の作品「九州縹緲録・歌行者」、「星野変」、「最後の姫武神」と「九州縹緲録・燕子焚」などもこのシリーズに属する。

それ以外に、『九州捭闔録』は『九州志』に連載された。いまだに未完の状態である。しかし『九州志』は北九州チームが仮想世界観を建築する際の地形のモデルであると江南は語った<sup>67</sup>。『九州志』は1つの世界観の体系であり、異なった作者たちがこの体系を通じて世界観を広げることができる。「私達は10年間に近い時間を投じ、およそ60作以上の小説が『九州志』という体系を構成している。すべての小説は続いており、私は一作だけを書いており、残る50余作はすべて彼ら書いたものだ。」<sup>68</sup>

<sup>67</sup> 江南(2007)『九州志』

<sup>68</sup> 「江南揭秘九州志世界観 称小説遠泳不会完結」2012年8月29日騰訊<<http://games.qq.com/a/20120829/000290.htm>> (参照2013-12-11)

江南の作品は確かに気迫に満ちている。しかし、常に歴史を剽窃したと非難される。福州の読者王爾陽君がかつてこう尋ねたことがある。「江南にひとつ聞きたいことがあります。『宋史』をパクったとしても、もっと痕跡を消すことができなかつたのですか？ 僕はずっと作者はわざと「縹緲録」シリーズを『宋史』に似させたのではないかと疑っています」。この質問に対して、江南は自分の手元には『宋史』はないと回答した。さらに「最後の姫武神」に対して、王君はその疑念を持ったと思います。内部事情を明かすと、「最後の姫武神」は確かに、私が書いた偽史小説「燭影斧声」に基づいて書き直したものです。「燭影斧声」には姫野という人物は登場せず、主人公は確かに宋太祖本人です。従って、小説の後半から姫野を趙匡胤に読み替えても成立します。当然ばらすのは今回だけ。これから、筆記小説や史料を引用する場合、私はしっかり隠します<sup>69</sup>と回答した。

一方、江南は自分がファンタジー小説に対する定義を「本質的には幻想と娯情の小説である。第一は限りない想像力である。第二は娯楽性である。私が創作する時も「もしも歴史上、ある事件が起こってなかったら、世界はどうなっていたらろうか」という構想の方法で小説を創作する<sup>70</sup>と発言した。

## 2 その他の作家の作品

「九州」が開放される創作モデルを宣伝することとは裏腹に、歴史的な大事件に関係する長編創作はまず設定チームの許可を得なければならない。その他の中編と短編小説は投稿自由である。創作自由の架空世界であるが、基本的に創作チームと読者に認可されてはじめて、「九州」世界の小説と呼ばれる。

『九州幻想』が2009年7月に、2009年までの優秀な作品12篇をまとめ、『九州幻想四年』として出版したことがある。また、付録の部分に編集者に優秀と認められた作品のリストをまとめた。一段階の総括と言えるだろう。

この12篇の作者はほぼ自分の意志で、「九州」の創作に参加した。「幻想が自由を意味するだろう。しかし、なぜ「九州」を選択したかは「九州」自身が幻想ジャンルに規則を示す幻想の形式であるからだ<sup>71</sup>と蕭如瑟により指摘された。

サイエンス・フィクション作家と西洋ファンタジー作家を除けば、作者中の相当な人数が武俠小説作家である。架空世界「雲荒」を創出したチームの一員沈瓔瓔はインタビューで「2003年前後、武俠小説作家たちには次第にファンタジーを創作する願望が生じた。『指輪物語』を読んだ後、滄月（チームの一員）も創世したいと思うようになった」と語った。

72

<sup>69</sup> 「江南訪談」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年4下半月号、P. 26

<sup>70</sup> 「江南訪談」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年4下半月号、P. 26

<sup>71</sup> 「島崎&公寓 蕭如瑟訪談」署名なし『九州幻想』2005年10月号、P. 34

<sup>72</sup> 『九州幻想』2006年11月号

これらの作者はもともとファンタジーを創作した経験がなく、ほとんどがサイエンス・フィクション、西洋ファンタジー、または武俠などのジャンルから転入して来た。ここで、1つの問題が発生した。どのような小説が「九州」シリーズと認められるか、である。特に、長編小説は一番判断しにくいと思う。筆者は論議を呼んだ「榊珠夫人」に関する事件からその一端をうかがうことができると思う。

「榊珠夫人」は本来『科幻世界』に連載された中編架空歴史小説である。二人の主人公、方鑑明と帝旭との絆が全篇を貫く鍵である。作者蕭如瑟は二人の主人公の少年時期を追憶しながら、兄弟の情を深く描写する。全体的に悲しい基調を引き立たせ、優美な文字と極めて感動的なプロットで読者から好評を得た。

それで、蕭如瑟はある読者から「九州」小説を創作してみないかと問い詰められたことがある。蕭如瑟は確かに同じような提案した人がいると回答しながら、今の自分は「九州」の創作には堪えないと感じると語った。「九州」の設定はあまりに巨大であり、時間をかけて勉強する必要があると思う。また、今自分が執筆している作品もある。自分は真剣に「九州」の設定を検討したいし、気軽な態度で「九州」に対応したくない<sup>73</sup>と回答した。

しかし、2006年に『九州斛珠夫人』出版決定のニュースが駆けめぐった直後に、もう1篇のインタビューが掲載された。今回の単行本は以前雑誌に載せた文章とどこが変更されたかと質問されて、彼女は「まずは「九州」の二文字をつけました。次に、設定の方面では蘇冰、今何在と花盆君が協力してくれて、すでに「九州」の体系になっています。最後に、約1万字を増やして、主役の少年時期の物語を加筆しました」と語った。<sup>74</sup>

このように本来は「九州」シリーズに属していない架空歴史小説、つまり「榊珠夫人」が「九州」に吸い込まれた。確かに、作品のレベルは高いが、人々からただ「九州」の二文字をつければ、シリーズに入れるのかという疑問が出された。

「榊珠夫人」の先例があったため、「魅生」シリーズの作者である楚惜刀にも読者から同様に「魅生」シリーズを「九州」に組み入れようという提案があった。「榊珠夫人」と同様に文字が優美な文章である「魅生」シリーズであるが、結局「九州」マークを得ることはなかった。その原因を追求したところ、中国の文物の実際の名前が大量に用いられ、現実的すぎるからとの声があった。

「九州門」が起こる以前、特に早期「九州」は一体どんな文章を求めていただろうか。

江南はかつてこう語った。「ある立場から見ると、「九州」と西洋ファンタジーとは非常に違いがある。もちろん、我々の世界には自然のエネルギーが操縦できる秘道家（魔法師に類似する）、不思議な生物（龍、專犁、大風）、英雄（天駆武士）など、ファンタジー小説の「定番の要素」に認められるものもある。しかし、更に深い次元で、私達は厳格な

<sup>73</sup> 『榊珠夫人』Q&A『飛・科幻世界』2005年5月号、P.117

<sup>74</sup> 『飛・科幻世界』2005年1月号

仮想の世界環境において、歴史と人間性について思考している。私達の本はいい評判を得たいが、放縦と誇張を手段として、目的に達するわけではない。我々が目指す風格は相対的に厳格かつ重厚なもので、適切な英語で説明するとすれば、それに当たるのは dark である。」<sup>75</sup>

また、「九州」には戦争が多すぎ、ストーリーのパターンが少ないとのクレームに対して、大角は「九州」はまだ歴史全体の骨組みを編纂する途上であり、戦争が多く書かれているのも当然である。市井の小説を書きたくないわけではなく、時間がなかった」と語った。

76

設定チームの二人が発言した「九州」小説に対する要求によって、「榊珠夫人」と「魅生」との異なる点を比較しながら、「九州」シリーズ小説への選抜条件をまとめてみたいと思う。

その一、厳格な架空世界が必要である。「魅生」シリーズの現実感はあまりにも強烈で、架空世界におけるストーリーと言うより、陰陽師ものに近い。

その二、歴史と人間性に対する思考が必要である。「榊珠夫人」を恋愛小説に分類する人もいるが、全文で描写したのは主に国家中枢機関に関わるストーリーである。一方、「魅生」シリーズは大角が提出した「市井の小説」に属すると感じる。

### 3 その他の作品形式

「九州」はずっと原稿が不足していたため、今何在は「大九州」という概念を貫徹することを決心し、2006年の初めから原稿を募集し始めた。また、中国人の想像力を開拓しようという信念を持っている大角は提案を支持した。大角の考えはこうだ。「大九州」は一つの試みであり、いくつかの有名な作者も参加する予定である。それらの小説が「九州」かどうか、主にみんなのフィード・バック、つまり読者の判断によって決める。

それから、『九州幻想』は可能性を開拓するため、いくつかの試みを実現した。その他の世界の作品を受け入れ、各界の作家を招待し、雑誌自身を一つの幻想文化プラットフォームとして3年の間プロジェクトを運営した。

前述の『毀滅之城：生命副本』と『毀滅之城：地球碎塊』はもともと2つのプロジェクトであった。2009年に、『九州幻想』が再開する際、阿豚が『九州幻想』の編集の仕事に参加してから始めたシリーズである。2010年に『九州幻想』が10冊出版され、毎号に「毀滅之城」に関する文章が1篇掲載された。2009年から2010年にかけて、『九州幻想』に「看不見的都市」シリーズが9編、「城市毀滅」シリーズが11編発表され、SF作家、ファンタジー作家、武俠作家は共に参加した。

<sup>75</sup> 『科幻世界奇幻版』2004年4下半月号、P.25

<sup>76</sup> 「大角訪談」署名なし『九州世界』2005年8月号、P.44

また、いくつかのプロジェクトは、その集大成はまだ出版されていないが、高い名声を博している。例えば、『九州幻想』がすべての男性 SF 作家を招いて、未来の母系社会を想像し、社会地位が低い平民スーパーヒーローを描写してもらった「母系氏族」シリーズ。また、「2050 年的語文課本」をタイトルにするシリーズは、2050 年の国語の教科書の疑似編纂である。この 2 つのプロジェクトはすべて大角がリーダーとなり、自分たちの風格と互いに符合する作者と読者を探すために開催された。

これらのプロジェクトは幻想文学の意味を掘り起こすには、あるいは読者の想像力を開拓するには意義があると認められている。しかし、サイエンス・フィクションへの偏向があり、ターゲットとする読者の位置付けがずれているとも言えるだろう。

もう一つ注目されるプロジェクトは「東方幻想」の雰囲気溢れている。今何在が提案した「海国図志」シリーズである。『鏡花縁』と似ていて、九州大陸以外の不思議な都市を描写する国巡りのシリーズである。しかし、上述のように九州に必要とされたのは厳格な架空世界と人間性を思考する文章であるという結論から見ると、これらの文章は「九州」のメイン小説を豊かにさせるものではない。そして、「海国図志」に現れた不思議な国々が「九州」大陸の一部分かと質問された際、公式サイトは「いいえ。しかし将来九州の拡張部分、あるいはより大きな世界設定になる可能性は排除しません」<sup>77</sup>のように曖昧に回答した。

従って、『九州幻想』の読者から「純九州」小説を読みたいという声は次から次へと発せられた。また、購買熱も下がり続けた。

ところが、その一方で歌やマッドムービー、つまり既存の音声・ゲーム・画像・動画・アニメーションなどを個人が編集・合成し、再構成したもののような同人作品が次々に創作された。

歌の代表作は『九州・縹緲録・乱世歌行』と『九州・虎牙・槍魂』である。ほとんどの歌は「九州」シリーズの小説を題材にして創作された。

そして、2011年7月8日に、舞雩島主人は動画投稿サイトである優酷に「江南今何在」というマッドムービーをアップロードした。一般の同人作品と異なるのは「九州」を題材にする同人作ではなく、「九州門」事件を背景にし、『東邪西毒』と『東方不敗』などの映画を編集合成し、再構成したものである。歌の歌詞も「九州門」事件を描写している。この作品は非常に深い意味を持っており、第四章の物語消費に関する部分で検討する。

### 第三節 九州の設定と小説の関係

第一節と第二節で小説と設定との調和問題が存在することに言及した。最も高く評価されている『九州縹緲録』にも時間順の乱れとストーリー論理の不整合などの問題が存在す

---

<sup>77</sup> 「雲中客棧」『九州幻想』2006年11月号、P.116

る。また、「九州門」事件によって、設定のバージョンも2003年にオフィシャルサイトに公表された基礎的な設定に後退した。

「九州」の多くの小説が読者の心の中で高く評価される理由は独特な設定にも関係がある。設定も小説に用いられる。しかし、厳密な意味では、実は「九州」には架空世界を支える小説と架空設定はないと思う。従って、小説と架空設定との間のリンクも厳密とは言えないだろう。これも普通の読者が「九州」を理解しにくい根本的な原因である。

その上、小説と設定との各種の衝突が存在する。「九州」を創作したいが、設定に文句を言う人々がいつも、執筆能力がある人ならば設定なんか気にしないと非難されたにも関わらずだ。主要な作家も「九州」を支えるのは設定ではなく、小説であると公言した。実際に、小説が設定から与えられた影響は軽視してはいけない。主要な作家を見渡すと、何人かがずっと設定を守りながら、創作水準を維持しているのを除いたら、ほとんどの作品は設定を打ち破ることによって、レベルを保っている。そのため、「九州」の設定は何度も直してはいけなくなった。さらに、主要な作家は新人に対して、厳格な設定を守らせようとしても、自ら模範となっていない。

確かに、「九州」では創作は勝負のようなものであり、よいものを書き、選ばれたら、「世界規則」を変更できる権限が与えられる。しかし、何度も変更される設定は、参加者の創作積極性をくじいてきたことも確かである。

「九州」の設定チームは非常に想像力を持っている。これは「九州」の設定から見出すことができ、ハイファンタジーと同じように、人種から歴史まで、地理から風習までの設定が細分化されている。しかし、「九州」作品は設定を小説に溶け込ますことがうまくできてない。これも一部の読者が「九州」をファンタジー小説と認めない一つの原因である。

ストーリーと設定との関係について、大塚英志は「一話分エピソードの中では直接的には描かれない細かな設定が無数に用意されているのが常なのだ。この＜設定＞が多いほど、一話分のドラマが受け手にはリアルなものとして感知される。そしてこれらのひとつひとつの＜設定＞は全体として大きな秩序、統一体を作り上げていることが理想であり、＜設定＞が積分された一つの全体を＜世界観＞とアニメーション番組で書かれた表向きのドラマは、＜世界観＞という全体から見た時、異なるプレイヤーの手にかかれば異なる物語が出現する可能性だってあるのだ」と指摘している。<sup>78</sup>

それでは、「九州」の設定と小説は一体どういう関係だろうか。この関係は外国ファンタジー、架空歴史物語とはどう区別できるかも探求する問題になる。また、「九州」における設定と小説の関係も中国の「東洋ファンタジー」と「西洋ファンタジー」との対照になるだろう。

---

<sup>78</sup>大塚英志(2001)『定本 物語消費論』角川書店、P.12

「九州」はよく「ダンジョンズ&ドラゴンズ」と比較されるため、まず「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の中国での普及ルートを簡単に紹介する。

序章で述べたように、1990年代、「ダンジョンズ&ドラゴンズ」がコンピュータ・ゲームに伴って、中国に入った。しかしそれは全く公式的な輸入ではなく、民間で自発に広がったものである。そのため、伝播路線を探究するのは簡単ではない。しかし、朱学桓という人が最初のリーダーとして、よく知られている。朱学桓は台湾人、1975年に生まれ、台湾の中央大学電機系を卒業した。奇幻文化芸術基金会の創立者兼執行長であり、奇幻基地出版事業部の画策と顧問を担当している。

2000年、朱学桓は『指輪物語』を翻訳した。台湾ではよく売れ、約80万冊販売された。その後、彼は「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の代表的作品『ドラゴンランス』シリーズ7部の長編小説を続々と訳した。また、1000万台湾元を提供して奇幻文学基金회를創立し、台湾の若者が民族的なファンタジーストーリーを書くことを奨励した。

大陸の若者はネットワークを通じて、台湾の翻訳を読んだ上に、ファンタジーに注目しはじめた。董寧はこう指摘する。「しかし、たくさんの若者はこのような文化を受容したとしても、その背後にある「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の規則を意識していないことは明白である。彼らが接触するのは『ドラゴンランス』か『バルダーズ・ゲート』のような、「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の規則にしたがうゲームや文学作品である。また、大陸では朱学桓のような人が現れてない。しかし、『ロード・オブ・ザ・リング』の売りあげをみれば、大陸の若者の受け手がどれほど存在することが理解できるだろう。」<sup>79</sup>

また、大陸では「ダンジョンズ&ドラゴンズ」に関する出版物はルールブックしかない。翻訳と出版はファンたちが自発的に行った。この本は460ページもあって、敷居が高く、規則を熟知するのはシナリオを提示するゲームマスターしかないだろう。従って、テーブルRPGは広く受けるとは言えないと思われる。「間違いなく、青少年に広く受けたのはテーブルRPGではなく、460ページの規則だろう」とも董寧は指摘している。<sup>80</sup>

上述のように筆者は中国の若者に作品として読まれたのは「ダンジョンズ&ドラゴンズ」のルールブックであると思う。

しかし、「ダンジョンズ&ドラゴンズ」ルールブックは受け入れながら、なぜ創作された「九州」には商品価値が生じないかという問題について、筆者は以下の3点のように分析した。

第一に、世界の表現方法が違う。「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の形式は多様化されており、テーブルRPG、コンピューターゲーム、アニメや漫画、または文学などの形式で同時に

<sup>79</sup>「歐美「文化植人」从少年抓起」法治週末、2013年4月16日<  
<http://www.legalweekly.cn/index.php/index/article/id/2491>>(参照2013-12-13)

<sup>80</sup>「歐美「文化植人」从少年抓起」法治週末、2013年4月16日<  
<http://www.legalweekly.cn/index.php/index/article/id/2491>>(参照2013-12-13)



表現される。一方、「九州」の運営を支えるのは文学という唯一の形式である。はっきり言うと、「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の主体は小説ではなく、ルールブックに従うゲームが利益を得る。翻訳という要因を排除しても、「九州」の小説の品質は「ダンジョンズ&ドラゴンズ」公式小説より優れていると評価される。しかし、「九州」のメディアは確かに弱点である。小説を唯一の商品形式としたら、受け手を引きとめるため、品質がよい作品を連続して登場させなければいけない。

第二に、読者に対する吸引力。「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の主体はゲームである。これらのゲームはすべて規則から派生したものである。派生した小説も「ゲーム文学」に分類できると思う。一方、「九州」は受け手を引きつけるのは文学しかない。根本的に、文学は作者と読者との相互解読である。それに対して、ゲームのプレイヤーは自分しか持っていないキャラクターで、深くゲームに入り込んだ感覚を得られる。一方、「九州」における小説創作というのは、参加型の文学創作ゲームである。しかし、ルールが十分に完備していないため、ゲームとしては十分には遊べないのだ。

第三に、商業運営について。「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の誕生はちょうどファンタジーブームの時期に載った。大量のファンタジー小説とコンピューターゲームが同時期に現れ、多くのプレイヤーが「剣と魔法」に興味を持った。その上、「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の著作権ははっきりしている。ジャンルも明確である。これと比較すると、まだ模索の段階である「九州」は同人活動のため著作権が曖昧であり、商業を利用し、利潤を上げることは困難であった。

「ダンジョンズ&ドラゴンズ」と「九州」との比較を通して、小説と設定との関係を再び検討したい。

明らかに、「九州」ではメイン小説の地位は設定より高い。設定は小説を書くための背景として作られたと言うより、むしろ作品に引き立たたされている。一部の作品は確かに設定を剥離することができないが、ほとんどの「九州」作品は設定を剥離しても依然として良いストーリーである。その上、「九州」の設定に接触したことがない人にも理解不能な感覚を与えない。

従って、作者は「九州」はファンタジーと名乗るが、実際には完全に東方架空歴史的な武侠小説として読めば、違和感もない。楊鵬も「九州」を架空歴史に分類した<sup>81</sup>。個人的な定義だが、架空歴史小説というのは、時間的には完全に架空の歴史段階を創造し、空間的には架空歴史に現れた人や事件がすべて現実の中の人や事件と一定の関連があり、特に、基本的な世界構造と自然の法則は現実とは区別できない。これもファンタジーと架空歴史の相違点だろう。

「九州」も大体は架空歴史小説であり、特にファンタジーに傾いている作品もない。実

<sup>81</sup>楊鵬「関于奇幻圖書井噴的思索—浅析当前奇幻圖書出版態勢」『出版广角』2006年03月号、P.16

は、このような架空歴史の設定はより多くのファンタジーに接触したことがない読者に対して、魔法を中心にするファンタジーより受けやすいと思う。これに加えて、「九州」のシリーズで最も人気がある江南は歴史をずらして小説を創作する方法を主張したため、歴史要素がさらに際立った特色になった。

その一方で、「九州」の作者たちはすべて設定が作品より高い地位を持つことを望む。この目標は果たされていないと思うが、「九州」全体の発展に対して決定的な意味合いを持つと指摘されている。

創世、民族、地理、宗教、歴史などに関する設定を含め、「九州」の設定はハイファンタジーになる潜在能力を備えている。一般的に、もしある架空世界の設定がこの程度までに詳しくなったら、それは独特な世界観と哲学を持つものである。この点については「九州」では設定から見ると優秀なレベルに達するが、しかし、作品からは優秀さを見出すことができない。また、ほとんどの設定は小説に書かれていない。つまり、これら魔法体系はどれほど厳密なものになったとしても、受け手に受容されていない。確かに、たくさんの妖怪、悪魔、異民族と魔法の設定が作られたが、意外にも小説に描写されると、武侠小说と同じような雰囲気になってしまった。確かに、架空歴史小説や武侠小说は上述のように中国の読者に読みやすいが、せっかく作った極めて完備した世界設定を浪費しただけであった。

武侠小说の中国における影響力は語るまでもない。「九州」が武侠的要素を備えていることも明白であるので、ここでは詳しく述べない。確かに、健全な「東方奇幻」は構築されていないが、架空の歴史の東方らしさ、および武侠小说の要素、「九州」の備えたこの2つの基本的な特徴だけで、中国の読者にとっては最高に受け入れやすいものとなった。

「もともと、西洋に武侠がないように、東洋には伝統的なファンタジーがない。私は東方的ファンタジーを創り出すことを望んでいる。東方的なファンタジーはSF小説でも歴史小説でもない」<sup>82</sup>とかつて水泡が語ったように、「東方奇幻（東洋ファンタジー）」を創り出すことの困難は推して知るべしである。また、西洋ファンタジーの受容は必然的に変形を伴う。

滄月はかつてこう語った。「ファンタジーの中国化には武侠との結合が最も適切な方法である。武侠化する方法以外に、神話や『還珠樓主』のような神話＋武侠というやり方もあると思う」<sup>83</sup>。また「西洋ファンタジーであろうが、中国の武侠であろうが、みな多かれ少なかれ現実の投影である。そのため、西洋ファンタジーの作品モデルをそのまま写しても、中国国内では全く通じないと思う。現実だけではなく、歴史も同じようなものである。中国と西洋の歴史では、人文的価値観も違う。機械的に当てはめても、いい効果を生むわけ

<sup>82</sup> 「名家訪談新警察故事」『九州幻想』2006年1月、P.50 名家訪談

<sup>83</sup> 「滄月的訪談」『科幻世界』2004年8下半月号、P.132

がない」と分析した。その上で彼女は「九州」について、「歴史+江湖」であると総括した。また、「修仙」、「靈山」、「仙島」等はすべて「江湖」の延長線上にあると指摘した。

確かに、古典的な西洋ファンタジーは作者に心に深く隠されている宗教的意識の上に作られた作品が多い。それに対して、中国人にロマンを感じさせるのは「歴史」と「江湖」かもしれない。

「九州」と歴史との関係は前文で証明したが、「江湖」が「九州」に一体どう関わっているか、もう一度検討しようと思う。

岡崎由美によれば、「中国の書物に、「江湖」という言葉は古くからある。日本語では、「江湖」はたいてい「天下」「世間」「世の中」と訳されている。これはもうまったくその通りで、国土のことを「山河」というように、「江湖」は川と湖によって広く世間をさした。中国で最も長い川「長江」と、最も大きな湖「洞庭湖」を併せて「江湖」とし、世の中を表したものともいう」。また、唐代伝奇に出てくる「侠」「俠士」と呼ばれる連中が普段身を隠している普通の人々の社会を「江湖」という。さらに、『水滸伝』では「江湖」とは一所不住で天下を渡り歩きながら、一匹狼の好漢同士がネットワークを築く社会なのである。<sup>84</sup>

確かに、「九州」にはそれぞれいくつかの秘密組織が存在する。その中のかなめとなる組織、つまり「天駆武士団」は「江湖」との役割を担当する。武俠小説における「江湖」のようなネットワークを持つ。も各地を転々としながらそれとも市井で生活している。しかし、いったん九州に戦争の火の手が上がると、天駆の首領は鷹のマークが記された手紙を出し、天駆武士は手紙を受け取るやすべてを捨て、天駆武士の共通の目標のため戦う。

従って、天駆武士の設定は「江湖」における「好漢」と似ている。また、共通する特徴として組織、俠士、身分を隠すことなどが挙げられる。

---

<sup>84</sup> 岡崎由美(2002)『漂泊のヒーロー』大修館書店、P. 58

## 第四章 「九州」の物語消費構造と作者と読者の関係

第三章で、筆者はテキストについて分析し、「九州」の設定と小説との関係を分析した。「ダンジョンズ&ドラゴンズ」の小説、ゲームや運営モデルを「九州」と比較した上で、中国では代表的なファンタジー作品「九州」は西洋ファンタジーを受容しながら、設定と小説との間の関係に変化が生じたことを証明した。

しかし、「九州」の複雑な形成の過程と作品モデルを分析するに当たって、一般の作品のようにテキストのみの分析では全貌を明らかにすることはできないと思う。

まず、早期の「七天神」のような多数の作者が共同で創作するモデルはいまだかつてない。次に、後期から、「九州」が著作権を開放したことで、独自の旗印を掲げたと言えよう。多数の作者の共同創作と著作権開放のモデルによって、独特な作品モデルが形成された。最後に、インターネットの普及に伴って「九州」は大きく発展を遂げた。また、専門雑誌も創立された。もともと特殊な読者、作者、作品の関係はメディアミックスの環境下では、更に深い意味を持ったと思う。確かに、「九州」はずっと中国架空ファンタジーの一里塚と呼ばれており、また、ネット文学においても特に優秀な作品である。しかし、現在に至るまで明確に分析されていない肝心な点はここにある。

つまり、「九州」の発生、発展、更には盛衰のプロセスを分析する鍵は、「九州」が置かれた特殊なメディア環境下における読者、作者、作品の間の関係である。あるいは、「九州」の物語消費構造と作者と読者の関係である。

### 第一節 作者と読者との関係

#### 1 作者と創作

「九州」の作者と言え、インターネットのユーザーによって選抜された設定チームが最初に認められた公式作者ということになる。つまり、「創世七天神」と呼ばれた江南、今何在、大角、斬鞍、遙控、水泡そして多事である。

七人の経歴を対比すると、いくつかの共通点が発見できる。

その一、チームが構成された際、その中の四人が海外に住んでいた。江南と遙控はアメリカで学校に通い、斬鞍と多事は働いていた。

その二、七人はほぼ高学歴である。

その三、七人の専門、あるいは仕事は小説創作と関係がない。たとえば、江南の専門は分析化学で、大角の専門は建築学、今何在の仕事は広告業関係で、多事は生物の科学者であり、アメリカで癌に関する研究をしていた。

その四、七人の中に、70年代生まれが五人いる。

その五、ほとんどSF小説を執筆したことがある。

2002年1月15日に、中国互聯網信息中心(CNNIC)に発表された第九回「中国互聯網発

展状況統計報告」と結びつけることによって、ある程度この共通点について解釈できると思う。

2001年12月31日の段階で、我が国でインターネットに繋がるコンピュータは1254万台に達し、去年に比べて40.6%増加した。また、我が国ではインターネット利用者はすでに3370万人に達し、去年より49.8%増加した。さらに、国際ライン容量は7597.5Mになり、去年より1.7倍に増加した。<sup>85</sup>

中国の全人口に対して、ネットを使える人数は極めて少なかった。このことは「九州」設定チームになぜ高学歴者と海外組が多いかの説明になるだろう。

この2つの要因によって、「九州」設定チームのメンバーと作品のレベルが保証された。文学に関するウェブサイトが営利事業を開始した際、ネット上にはレベルの低い作品が大量に現れた。それに対して、「九州」はずっと小説の品質を維持し続けたのだ。

また、早期の「九州」がなぜ読者の好感を獲得したかという点、単に品質がいい作品が読めることだけではなく、作者の創作理念とも関係する。

江南の小説は歴史を原型にして創作されたが、歴史の大きな流れを追求することではなく、小さいエピソードを書くのが好きだと彼は語っている。「自分に書かれる人物はもはや歴史年表の中の単なる一つの記号ではなく、生き生きとした人物であると感じる。歴史の教科書や普通の通史の中にはこんな生き生きする人物は登場しない。また、自分が書こうと思っている「縹緲録」の物語は乱世の時代に生まれた。戦争で社会秩序が乱れた世を舞台に、歴史人物の面影を帯びた英雄たちが次々に登場し、高らかに歌い踊る。最も重要なのは彼らがみな歴史書の1ページに載っている人物の記号ではなく、血肉を持った存在だと言うことだ。「縹緲録」には真の主人公は一人もいない。東陸を統一し、巨大な帝国を打ち立てた天駆武士の首領姫野も、同じく乱世に輝いた一粒の星にすぎない。」<sup>86</sup>

同様に、水泡も自分が創作したストーリーに登場する主人公はほとんど自分のような小人物であり、驚天動地の偉業をなすことはないと言った。<sup>87</sup>

一方、水泡が参加した小説創作は主に「九州」世界内の旅行記である。彼は旅行記を通じて「九州」を完全なものにしたいと語る。「旅行記は他の架空世界に欠けているものである。すばらしい小説であっても、細部の小さな文化は描いていない。細部の描写があつてこそ、虚構世界を本物に見せることができる」と彼は述べた。このような創作の方法もまた人間に寄り添った視点を持っている。

また、多事は「私は単に自分の「九州」に対する理解を表すのではなく、読者の心の中

<sup>85</sup>「中国インターネット発展状況統計報告」CNNIN <http://www.cnnic.net.cn/>(参照 2013 - 11 - 15)

<sup>86</sup>江南「九州縹緲録綱領」『科幻世界奇幻版』2004年10下半月、P.2

<sup>87</sup>「新警察故事」署名なし『九州幻想』2006年1月号、P.50

の「九州」がどのようなものかを考えながら創作する。私は読者の夢の中の世界を展開させたいのだ」と述べた。<sup>88</sup>

斬鞍もこう語る。「各人の創作はすべて個人的な人生経験と関係があると思う。私個人としては、下方を見下ろす視点に慣れている。相対的に、私は下層社会の生態に関心を持っている。言い方を変えれば、皇帝や王、将軍や大臣、威風堂々とした物語は私には描写できない」。<sup>89</sup>

確かに、「九州」には世界を支える大筋の小説があまりないが、設定チームの創作理念によって、「九州」にも自分なりの特徴があることが理解できるだろう。「九州」は乱世に生きている卑しい小人物から、東陸を統一する首領まで全部平等に書かれている。また、すべての登場人物は「九州」の主演ではなく、偉大でアンタッチャブルな人物も登場しない。読者の生活と視点に寄り添っているのだ。

このことから、「九州」が多くの読者から認められた理由を説明できるだろう。「九州」は真っ先に架空世界を作り、専門雑誌を創刊し、オンラインゲームまで発行した。しかし、「九州」の小説創作にはずっと1つの問題が存在していた。それは多人数による共同創作方式である。

ネット文学の叙事の特徴を分析した翁雋嬰は、「大勢が寄り集まって語る叙事文では、テキスト内で叙述される事柄に二つ、または二つ以上の、相容れないロジックが存在する。それは事柄が多方向へと発展することの表れである。つまり、同じ頭に、多くの胴体やしっぽがついている状況である」と指摘している。<sup>90</sup>

しかし、ネット上の手短で随意的な「多方聚談」と違って、「九州」はもっと厳格であり、更に計画性がある。統一設定の下で行う「接竜（カード継ぎゲーム）」式創作なのだ。しかし、それぞれの作者による作品に用いられる設定は衝突を起こした。これは早期の創作において大きな負担となった。

設定チームが結成された初期、つまり第一章で述べたネットでの独立時期に、「九州」の設定と小説の創作はチーム内部で協議してから、外面へ公表するやり方で行われた。同時に、チームメンバーの創作進度に基づいて作品の発表が行われた。このことが世界設定作業を繁雑なものにした。チームメンバーが書いた小説はほとんど協議し上がった設定と衝突し、ボツにせざるを得なくなった。例えば、極めて好評を得た『最後姫武神』である。「設定と合わせる際、面倒なのは主に歴史的イベントとイベントの因果関係を調節することだった。ちょうど自分の『無星之夜』の設定と時間上交差するため、創作が停止した」<sup>91</sup>と遙控はかつて語った。

<sup>88</sup> 「名家訪談、聖地亜的文化土匪——多事訪談」署名なし『九州幻想』2005年11月号、P.36

<sup>89</sup> 「斬鞍訪談」『九州幻想』2005年11月号

<sup>90</sup> 翁雋嬰「基于網絡小説的叙事分析」『牡丹江教育学院学報』2007.4、P.16-17

<sup>91</sup> 「遙控訪談」『科幻世界奇幻』2004年10下半月、P.75

また、いくつかの原稿は比較的早く執筆されながら、後で設定のバージョンアップや細部の内容の変更などが原因で何度も書き直さなくてはならなくなった。メイン小説と呼ばれている『縹緲録』もその一つである。不思議なのは、『縹緲録』が改正された後のバージョンより前のバージョンのほうが人気があることだ。

インタラクティブな創作方式は確かに操作が難しく、特に歴史の大筋や共用される登場人物などは調和させるのが難しい。また、繁雑な設定のため、創作を試みたい新人作者も「九州」に加入しにくくなった。

## 2 読者と閲読

2009年5月3日、江南は『華商報』に取材された際、「中国では幻想小説を書く人がたくさんいるが、うまく書ける人が少ない。主観的に言うと、作品のレベルの問題であるが、客観的な要因としては読者層が狭すぎることで、消費能力に制限がある学生をメインとしていることだ」<sup>92</sup>と語った。

「九州」シリーズの小説と『九州幻想』が直面している問題は設定チーム内部内の設定と歴史についての論争だけではなく、もう一つの厳しい問題が存在した。それは読者が基本的に収入がゼロの学生だったことである。

また、後期に起こった「九州門」事件によって、グループが南北に分裂し、2冊の九州専門雑誌が同時に市場に現れたことや、単行本が発行されたことは、確かに収入ゼロの学生読者に対しては、購入の負担になった。あるいは、読者の二分化もまた問題となった。

更に、読者の二分化について、筆者はもう一つ深層的な問題が存在し、「九州」の発展に影響を与えたと考える。

最初、「九州」創世計画、または「九州」に関連する小説を読んでいる人はネット小説家と主な七人の作者であった。その後、「九州」の知名度の拡大に従って、雑誌と単行本が出版された。読者は確かに増えたが、引きつけられたのは「九州」に参加したい作者と愛好者であった。また、これらの愛好者は、単純な読者とは異なり、九州に夢中だった。

雑誌だけを読んでいる単純な読者は、数編の「九州」シリーズの小説を読んだことがあるだけであり、創世に関する作業には関心を持っていない読者も少なくなかった。

つまり、第三章で分析したように、「九州」の小説と世界の設定はうまく調和していない。確かに、同時期のファンタジー小説と比較すると、「九州」世界は完全な世界の背景と設定が揃っている。しかし、詳細に分析すると、設定として小説に現れたのはほとんどが歴史である。また、「九州」は現代中国ファンタジーの一里塚と呼ばれているけれども、実は武

<sup>92</sup>「中国幻想文学現状差 孩子読不懂『哈利・波特』」、2009年5月9日、華商報  
<<http://news.hsw.cn/system/2009/05/04/050161309.shtml>> (参照 2013 - 9 - 12)

侠小説の延長線上に置いても違和感がない。更に、「歴史」と「江湖」という二つのキーワードで「九州」全体をまとめることも可能である。

設定と小説がうまくつながっていないとしても、一部の読者の設定に対する熱はずっと高まり続けた。

雑誌に掲載された読者からのフィードバックコラムに、システム化された設定を読みたいという声は何度も載った。また、もっと雑誌に設定を掲載してもらって、世界の全貌を知りたいという手紙も届いた。また、系統的な提案をする読者まで現われた。それは例えば九州の兵器譜、人物のイメージ図集、詩歌集などの編纂である。また、映画とテレビを開拓するため、今から九州の人物造型を募集し、今後の参考にすることも提案された。<sup>93</sup>設定に対して高い関心度を持つ読者は少数ではなく、確かに、彼らによる貢献的な提案で、「九州」の設定が豊かなものになった。

しかしながら、複雑な設定があまりに多く介入することによって、読者に小説を読む際の障害を与えることを避けるため、設定チームの「九州」小説に対する認識はずっと「設定を離れても楽しめる物語」であり続けた。

ここから分かるように、初期の読者にもすでに二分化する前兆が現れていた。

元々、「九州」が『飛・奇幻世界』から独立し、雑誌を創刊したことが読者を二分化させる行為であった。後期に起こった「九州門」事件も読者を傷つけ、南北の九州の対峙で、月に雑誌を二三冊出す挙動が読者を二分化に導いた。もともと安定していなかった読者数はどんどん減少した。

ところで、実際に、完全な「九州」の世界設定は存在しないと第三章で分析した。唯一「九州」の大筋を引き立てるシリーズである『縹緲録』は、創作初期には中編や短編などの形式で連載された。『縹緲録』のプロットのつながりを疑う読者もいた。<sup>94</sup>しかし、こういった非線形的な閲読は欧陽友権がネット文学の特徴のひとつとして帰納するところである。

また、『縹緲録』は6冊の単行本を発行して完結したが、本当の完結が作者自身の願望である。というのは、この6冊に書かれているストーリーは順序がちぐはぐであり、歴史事件をはっきりさせていない。つまり作者はまだ本当の脱稿をしてはいないのだ。

一方、創作権力の開放によって、「九州マニア」が現れた。彼らは一般読者より「九州」の小説と設定について熟知していた。彼らは「九州」を背景する小説と設定を創作することに熱中した。また、もともと作家である人も多く含まれる。

彼らの中から特殊なグループが現れた。「我們」は私も含め、夏筋、莫雨笙、公子木、

<sup>93</sup> 「回音谷」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年4月、P.40

<sup>94</sup> 「回音谷」署名なし『科幻世界奇幻版』2004年6下半月、P.37



燕然、蘇離弦、楚夜戈、七尺を代表として、続々と九州の雑誌に小説を発表した作者たちを指す。また、編集者を務める isotone と紅袖。および数多くの読者に過ぎない人々が討論に参加した。この団体は約2年間存在した。「九州門」事件が起きるとともに、みんなが続々と卒業し、グループは解散した」と胤祥は語っている<sup>95</sup>。後に、さまざまな原因、特に現実生活の困難によって、このグループのメンバーは各々1年で1～2編の原稿でも出せればましという状態になった。

つまり、元のグループのメンバーが様々な原因で「九州」から離れた後、原稿を提供する新しいサブ創作グループは形成されなかったのだ。

サブ創作グループとは、公式創作チーム以外で、よく「九州」を熟知し、創作する読者と定義される。彼らの「九州」に対する理解は単なる雑誌や単行本の読者とは異なり、小説と設定の創作に参加している。正に彼らの出現で、「九州」の閲読形式に変化が発生し、同人サークルと似たような形になった。

胤祥は「厳格な設定に従う「九州」を創作することと「九州」を解読することは非常に悲壮な事である」<sup>96</sup>と発言した2005年前後、サブ創作グループは特に「九州」の設定を編纂することに夢中になった。もし小説が「九州」の最も重要なものと認められたら、設定を増やすことに意味があるかとグループのメンバーに懐疑され、グループ内部で楽しむ行為に過ぎないのではないかと指摘された。

確かに、彼らに創作された設定はあまりに歴史に記述されてない。それは彼らが個人的に行った「九州」に対する解読と再創作に過ぎないのである。

大塚英志は観衆がアニメの伏線についての解読を分析する時、「一話分のエピソードの中では直接的には描かれない細かな設定が無数に用意されているのが常なのだ。この設定が多いほど、一話分のドラマが受け手にはリアルなものとして感知される。そしてこれらのひとつひとつの設定は全体として大きな秩序、統一体を作り上げていることが理想であり、設定が積分された一つの全体を世界観となる。」(P12)と指摘した。

この解釈は「九州」の読者が「九州」の世界観について行う解読ときわめて似ている。九州の愛好者が創作に参加する行為は無数のアマチュア作者が同人誌の創作を行うのと非常に似ている。九州はオープンな創作形式をとり、創作は参加者が作者から許可を受けた上での行為である。また、『九州幻想』に掲載された作品も公式に選抜されたものである。

私は「九州」について、創作をゲームとして行う同人サークルと定義したい。

また、私は「九州」のサブ創作グループには、共同創作以外に「二段伝播 (two-step flow)」も存在すると考える。「二段伝播」とは理論や観点などがしばしばラジオや新聞雑誌を通じ

<sup>95</sup>胤祥「前言」楚惜刀(2013)『九州・天光雲影・風雲会』江蘇分芸出版社、P.3

<sup>96</sup>胤祥「前言」楚惜刀(2013)『九州・天光雲影・風雲会』江蘇分芸出版社、P.3

て、先に世論の指導者に伝わり、それからまた彼らによって比較的あまり主体的でない受け手に伝わる。「二段伝播」は直接的なマスコミに比べて更に説得力があり、更にターゲットが明確であり、受けやすい。

「二段伝播」が九州で主として体現されているのは、「九州」の設定チームと主要作者が創作に用いられる幻想素材を揃える作業である。例えば、騎桶人の「夢幻百家講壇秦漢幻想小説」と多事の「重騎兵背景閲読」など。また、雑誌に推薦された小説も含まれる。例えば、「網絡奇幻当月熱門推薦榜」、あるいは『科幻世界』誌と『九州幻想』誌とが共同で編纂する「幻界動態」コラムである。

## 第二節 メディア

### 1 メディアプラットフォーム

中国現代ファンタジー小説の形成が、ネットの普及から切り離して語れないというのは公認の事実である。「九州」のネットでの創立、会社の設立、専門雑誌と長編小説の発行という一連の事業は、ネット幻想文学が現在まで発展してきた全過程を目撃しており、代表性があると思う。「九州」を通じて、中国現代ファンタジーの複合メディアにおける発展も分析できると思う。

この節では主に欧陽友権によって総括されたネット文学の特徴を対照しながら、ネットと紙媒体の特質を比較して、「九州」の独特な部分を分析したい。また、ネットから紙媒体に進出する時、システムの内部にも一連の変化が発生した。これらの変化は、第一節で検討した読者と作者の関係に新しい分析の視点を提供できると思う。

欧陽友権は「ネット文学はデータ伝送の方法で、伝統的な文学システムを一新させ、創作と閲読を即時性のある相互的なゲームに変えた」と指摘した。また、ネット文学の特徴を六つにまとめ、第一に、発信する主体の一般化、第二に、伝播スピードの速さ、第三に伝播の非線性、第四に伝播の相互化、第五に伝播の非中心化、その六、伝播目標の多元化を挙げた。<sup>97</sup>

この六つの特徴で「九州」のシステムを分析すれば、初期に注目された原因も明らかにできる。まず、発信する主体の一般化と伝播スピードの速さによって、「九州」は清韻ウェブサイトで迅速に参加者を集めた。

「専者共議網絡文学勢必重組當代<sup>98</sup>文学新格局」でネット文学の出現は、文学を支配してきた利益構造の存在基盤をうち壊したと指摘された。また、ネット文学には題材に対する制限がなく、各種の文体が融合できる。大衆文学の時代が来たと宣言されたように、ネッ

<sup>97</sup> 欧陽友権 (2008) 『網絡文学概論』 北京大学出版社、P166

<sup>98</sup> 「専者共議網絡文学勢必重組當代文学新格局」 署名なし『人民日報』2009.7月23

ト文学では異なるジャンルの作者が参加した。

また、bbsの評論機能は伝播非線性と伝播相互化を体現しており、故に「九州」の多数の作者が共同創作をするモデルが確立された。伝播の非中心化と伝播目標の多元化によってどんどんネット上で読者が呼び込まれた。

しかし、王緋によれば、「ネットの広大な発表空間と低い敷居のため、誰でも文学と親密に接触するチャンスが与えられる。つまり、個人的な作品の展示と他人の作品の閲読である。しかし、これに伴い、膨大な情報の堆積のほか、作品の品質が玉石混交だという問題も生じる。このことから、ネット文学の生産機能を管理する重心は創作過程ではなく、発展と伝播に傾いていることが決定づけられる」<sup>99</sup>。

だからこそ、ネット文学の伝播機能が「九州」世界の構造に与える障害を越えるため、設定チームが結成され、また、紙媒体に進出し、雑誌が発行されたのである。

雑誌が発行されてから、読者の発言ルートが変化しはじめた。ネットでの自由な発言から編集部への手紙が変わった。例えば、2004年4月の『飛・奇幻世界』の回音谷コラムに、読者が設定をもっと作ってほしいというメッセージが、また、2004年の6月号には、読者から前回発行した雑誌に三つの誤字を発見したメッセージが載り、2004年5月号に掲載された「九州行紀」で、「夸父」と「夸夫」の名称の不統一について質問された。さらに、後にも「老妖夜談」と「雲中客棧」のような読者と作者との交流コラムが掲載された。

しかし、雑誌にもネット時代の交流モデルが残存している。例えば、2005年5月号に掲載された「<榊珠夫人>Q&A」はネットのスレッドをそのまま複製したものである。原文は「榊珠夫人」の作者が「天空之城」フォーラムで、読者の質問を回答するため、発表したスレッドである。

これらの読者が発した問いは代表性があるため、編集者によって、そのまま雑誌に掲載されたのである。

また、設定チームが設定を読者に伝達する際、よく読者に質問されるポイントを強調した設定を作るという形式が採用された。読者からの質問も設定創作の基準になった。例えば2005年4月号に掲載された「龍淵閣之間」はQ&A形式を採用している。設定チームは読者からの質問に対して答え、「龍淵閣」という場所の細部のイメージを設定した。その後、このようなQ&A形式は進化し、設定チームは直接に自問自答して、読者の視角から設定を書き込んだ。その一例が2005年5月号に掲載された「天駆十問」である。(P9)

王緋は、「2007年前後、ネット文学のルールはすでに完備に向かっていた。編集者と読者は二分化し、決定的な力として、ネット文学の生産における伝播とレベル分けをする権力を握っていた」と指摘した。(《21世紀新媒体与文学发展》P107)

---

<sup>99</sup>王緋 (2012) 『21世紀新媒体与文学发展』社会科学文献出版社、P107

確かに、2007年前後の幻想の文学全体はネット上の資源の共有により、創作疲労、審美疲労が発生していた。また、読者層の狭さが幻想文学の発展に影響を及ぼした。「九州」は作品の品質を確保したため、このような苦境に直面しなかったが、「九州門」事件に遭遇した後、システム内部にはまた新しい問題が発生した。つまり、2冊の雑誌以外に、南北の九州のウェブサイトである9ZとNovolandが二つ同時に運営を開始した。このような状況はますます激しくなり、更に『九州幻想』2011年の12月号では5つの公式プラットフォームが公開された。

その上、派生雑誌『九州志』と『幻想縦横』もネットでプラットフォームを創建した。さらに、読者が自発的に創建した百度贴吧のスレッド、作者の個人崇拜スレッドなど。「九州」に関する交流プラットフォームは絶えず増加し、管理の困難を招いた。これらのことは読者が「九州」に関心を持つことを困難にした。

### 第三節 九州の物語消費構造

早期の「九州」、特にネットにおける時期には欧陽友権が総括したネット文学の五つの機能が現れた。

第一に、娯楽機能

第二に、欲求の発散と満足

第三に、虚擬の人格機能

第四に、オンライン交流機能

第五に、文化消費機能<sup>100</sup>

また、文化消費について、彼はネット文学は直接あるいは間接の消費機能を持っていると認めた。

そして、ネットを創造のプラットフォームとする「九州」の消費構造を検討するには、大塚英志の『物語消費論』は80年代についての分析理論なので、不適な部分もある。一方、東浩紀の2000年からの物語消費についての再検討である『動物化するポストモダン』は『物語消費論』の不足点を補っている。

東浩紀はポストモダニズムの到来を指摘し、大塚英志が提出した「大きな物語」も消えてしまったと主張する。ところがポストモダンの到来によって、そのツリー型の世界象は崩壊してしまった。

---

<sup>100</sup>欧陽友権（2008）『網絡文学概論』北京大学出版社、P203

図3 a 近代の世界像 (ツリー・モデル)

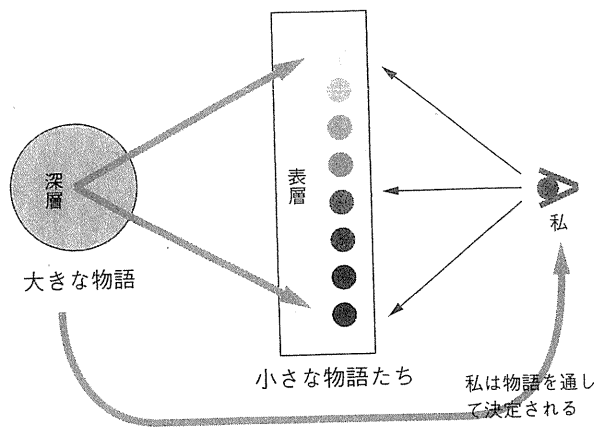
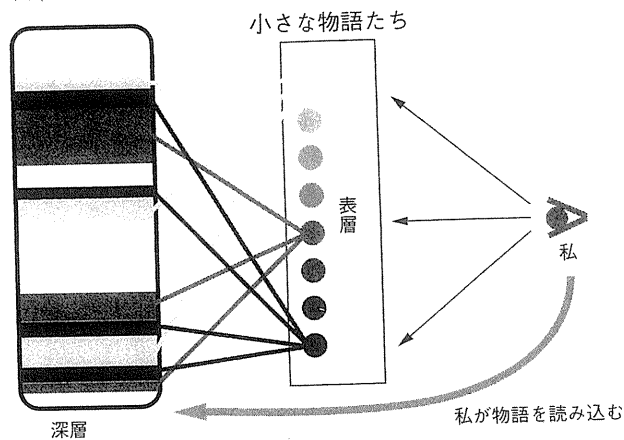


図3 b ポストモダンの世界像 (データベース・モデル)



東は「1980年代日本では、その一つの候補として、深層が消滅し、表層の記号がけが多様に結合していく「リゾーム」というモデルが示されることが多かった。しかし、筆者の考えては、ポストモダンの世界は、むしろ図3bのようなデータベースモデル（読み込みモデル）で捉えたほうが理解しやすい。」<sup>101</sup>

と指摘した。

その分かりやすい例はインターネットである。そこには中心がない。つまり、すべてのウェブページを規定するような隠された大きな物語は存在しない。しかしそれはまた、リ

<sup>101</sup>東 浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』、P52

ズームモデルのように表層的記号の組み合わせだけで成立した世界でもない指摘し、インターネットに応じて作られた個々のウェブページがある、という別種の二層構造を作り上げたと言った。

このような「大きな物語」は消えてなくなり、対応する断片的なストーリーの背後に「データベース」が出現するという現象は、ちょうどまい具合に「九州」の物語消費構造を解析できると思う。

第三章で、私は「九州」の出現は主に西洋ファンタジーに影響を受けたことを証明した。また、「九州」が自ら「東方奇幻」を吹聴しながら、実際の核心は主に歴史と武侠小説を構成要素としていることを分析した。更に、設定がうまく小説に描写されていないことも「九州」の特徴である。

さらに、「九州」の主な参加者はほとんどが外来のファンタジーの影響を受けた。これらのファンタジー作品はゲーム、文学、漫画、アニメーションなどの形式が含まれるが、このことと我が国が80年代に外来のアニメーションや童話、ドラマを導入したこと、あるいは日本の漫画の海賊版が流通したことも多少関係があると思う。

その他のマスコミの文学に対する影響について、謝迪南は「新神話主義」は1990年代の中後期に興った文化ブームである。技術(特にCG)の発展を基盤にして、伝統的な作品を手本として、商業利益と精神消費を最終目的とする、マルチメディア(文学、映画とテレビ、アニメ・漫画、絵画、コンピュータとネット)との共生の産物である。また、大衆の文化の1つの構成部分である。」と指摘した。<sup>102</sup>

本論は「九州」における外国のファンタジーの受容と内部の物語消費構造に着目する。その他のメディアの文学に及ぼした影響はここでは検討しない。

つまり、上述の大量の外来ファンタジーの輸入は東浩紀が述べた物語の氾濫である。これらの作品の要素が読者に要求されたデータを構成している。

また、前文で論証したように「九州」には実は完全な設定システムとメイン小説が存在しない。

さらに、本章の冒頭で述べた読者と閲読との関係についての考察においても、一般の同人小説と異なり、「九州」公式運営チームが設定の編集を許可するという形式について述べた。

上述の3点から、以下の観点を述べたい。

第一に、「九州」の設定は断片の再編成である。小説の描写から判断する限り、「九州」の作者のほとんどが外来ファンタジーに影響を受けており、設定チームが設定を編纂する過程では大量な歴史書と地理知識書を参考にした。また、その中の多くの設定も中国の神

---

<sup>102</sup>謝迪南「当「新神話主義」成為浪潮」『中国図書商報』2014年10月8日

話を原型にして作り上げられている。つまり、データ消費である。その後、「九州」が規模を具え始めると、読者と参加者の提案は新しいデータになる。「九州」のシステムによって、採択するかどうか決定される。

第二に、「九州」のシステムでは、読者と作者の行為が一致する。「九州」のオープン型創作システムでは、誰でも創作に参加できる形式である。通常読者と作者の関係と異なり、読者は創作する能力と権力を持っており、読者だけではなく、作者も「九州」システムを通じて、新しい作品を吸収する必要がある。これらの作品をつなぎあわせているのが第一で触れたデータである。

第三に、「九州」のシステムにおける読者と作者の行為は確かに同じだが、初期に抜擢された設定チームは「見せかけの公式」を構成し、表面上は開放的な体系だったが、設定チームが創作した作品に書かれたストーリーと設定に背かないことを前提にしている。また、「見せかけの公式」である設定チームには長編小説を創作する際、設定チームと協議しなければいけないという明文の規定があった。つまり、読者は「九州」の設定を消費しながら、創作を行えるという実際には存在しない「仮象」も消費しているだろう。このような仮象は「九州」システム内部にピラミッドと同じような階級を作り上げた。上から順にシステム創作者、主な小説作者、参加者、一般読者である。

これらデータベースを消費する人々はひとつの公式がない同人サークルを構成した。つまり、私は「九州」シリーズ作品を「九州」同人サークルの産物と見なす。

「共同体、個人そしてプロデュセージ——英語圏におけるファン研究の動向について」と述べる池田大臣によれば、ここ20年間の英語圏でのファン研究の流れは、三つの時期に区分される。その3つのパースペクティブは以下の通りである。

第一期は、「集合体としてのファン」に関心を持つ時期である。そこでの研究は、さらに、2つのタイプに分けられる。ひとつは、「解釈共同体」に関心を持つタイプである。このタイプの研究は、「ファンが共有する独自のテキスト解釈」を弱者の戦術として評価する。第二のタイプは、ブルデューの著作に影響を受けて、ファン行動の階級規定性を強調する。

第二期は「個人としてのファン」に注目する。ファン個人の動機や快楽、感情について説明しようとする。

第三期は「プロデュセージ」の時代と呼べるだろう。Web 2.0のサービスは「生産と利用」との区別をあいまいにする。ウキペディアの例が典型的な例だが、そのサイトでは、コンテンツの生産者と消費者は同一である。アクセル・ブランズは、この状態を「プロデュセージ Producership」と呼んでいる。この「プロデューサー Producer」によるコンテンツ生産への注目は、従来の「生産—消費」「オリジナルテキスト—ファンテキスト」という構造

再構築する可能性を秘めている。」<sup>103</sup>

池田大臣の分析に照らすと、「九州」は第三時期に属する。つまり、「web 2.0 の登場とともに出現したユーザーによるコンテンツ生産」の時期である。「プロデュセージ」は、フランスの定義によれば、「さらなる改良を追求する、共同的で持続的な、既存のコンテンツの構築と拡張」を指す。プロデュセージの環境においては、ユーザーが作り上げていくコンテンツ生産の過程は、生産者/利用者という区別が重要性を持たず、コンテンツを共有する利用者は、同時に生産者でもある。また、その生産と消費過程に関わる者たちは「プロデューサー producer」と呼ばれる。

上記のことは、「九州」の消費の内容がデータの仮設の上で、データを消費する人々が、管理者のない同人サークルを形成したことの証拠になるだろう。

池田大臣は「プロデュセージ Producership」の特徴を4つにまとめている。

- 1、「開かれた参加, 共同的な評価 Open participation, communal evaluation」
- 2、「流動的な多頭的構造, 一時的なメリトクラシー Fluid hierarchy, ad hoc meritocracy」
- 3、「完成されることのない人工物, 持続する過程 Unfinished artefacts, continuing process」
- 4、「共有の財産, 個人的報償 Common property, individual rewards」

私はこの四つの特徴以外に、「九州」には第一時期の特徴もあると考える。つまり、池田の指摘する「ファンが最初のテキストから「密猟」する意味は、彼ら/彼女ら自身の関心のみ仕えるのである」と「ファンダムは、読者と作家との間の徹底的な分離を維持しない点である」という指摘に合致するのだ。

なぜ英文圏と異なる「逆発展」が行われたのだろうか。このことに関して私は以下の観点を持っている。

まず、これは中国における密猟対象となるテキストの出現時間と関係があると思う。これらのテキストの出現時間は前述のように外来文学作品が大量に導入された80年代である。

次に、「九州」同人サークルの形成時期は、ネットの出現と発展の時期がほぼ同じである。

以上の二つの点が、「九州」同人サークルを「逆発展」状態にさせた。

この構造の下、人々が「九州」と口にするとき、実は、一つの記号が2つの意味を指す

---

<sup>103</sup> 池田 大臣 (2013) 「共同体、個人そしてプロデュセージ：英語圏におけるファン研究の動向について」『甲南女子大学研究紀要・人間科学編』49, P. 107-119



ことになる。つまり、「九州」シリーズと「九州」の同人サークルを同時に意味しているのである。

もし同人サークルである「九州」に創作された作品を同人作品と見なせば、それらはおのずと商業価値がある作品と商業価値がない作品に分けられる。つまり雑誌や単行本に掲載された作品、特に高く評価された作品は商業価値がある同人作品として認められる。それ以外の作品、または読者として作り出された歌曲、マッドムービーも商業価値を持った同人作品と認められる。

参加者と読者は作品を読むことによって、「九州」の背後にあるデータベースを消費する。

また、私は参加者と読者が消費したのは東浩紀が言及したデータベースだけではなく、消費されたものの一つに「九州」における人間関係があると判断した。

つまり、読者と参加者は「九州」同人サークルで小説を読みながら、サブカルチャー内部の人間関係も見ている。特に、設定チームが注目されている。

代表的な例は、前述の「江南今何在」というマッドムービーである。

2011年7月8日に、舞雩島主人により動画投稿サイト優酷にアップロードされた。一般の同人作品と異なるのは「九州」を題材にする同人作ではなく、「九州門」事件を背景にし、『東邪西毒』と『東方不敗』などの武侠映画を編集合成し、再構成したものである。歌の歌詞も「九州門」事件を描写している。

上述のように、最初の参加者は自分の好みの素材を再編成し、「九州」を1つのデータベースにした。用いられた素材は第二章で言及した歴史、外来ファンタジーなどである。基本的な構造が形成されてから「九州」の同人サークルが誕生した。一方、「九州」には「ダンジョンズ&ドラゴンズ」のようなゲーム基盤がないため、主に小説を読むことと書くことをゲームとして運営された。また、同人サークル内に創造力を持つ人と創造力を持ってない人がいるため、階級が生まれ、ピラミッドと同じ構造が形成された。ピラミッドのトップにいる設定チームは、創作力が高いため、読者により選抜された。また、ピラミッドの一番下の階にいる読者は小説とデータを消費する以外に、上層、つまり設定チームと主要参加者の間の人間関係も消費するという現象が確認できたのである。

以上をもって私の現代ファンタジー小説「九州」に関する考察の結論としたい。

年表

九州編年史

2001年から2005年までのネット時代

この表は「九州編年史」に基づいて、作成した。

■が付いているのは設定に関する出来事である。

◎が付いているのは小説に関する出来事である。

▲が付いているのは出来事である。

番号	日付	場所	人物	出来事
001	2001年12月17日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	水泡	▲ 西洋風のフアンタジーの小説を共同で創作しようという提案 水泡は『最佳拍档』でケンケン大陸(「凱恩大陸」という架空世界を共同の舞台にする西洋風のフアンタジーのシリーズ小説を書くため、人を呼びかけた。
002	2002年1月10日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	大角 (潘海天)	▲ 東洋風の大陸も付け加えようという意見 大角(ケンケン大陸に「東洋風の大陸も付け加えよう」という意見が提出された。大角は何は何か中国科幻銀河獎を獲得した潘海天である。この意見はすぐに江南、遙控、水泡、北星たちにも持たせた。これを機会に、彼らは東洋風のフアンタジー世界についての討論を始めつた。
003	2002年1月12日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	江南 遙控	■九州の最初の設定の発表 設定に関する最初の文章、「星空の歌：創世伝説」(原題「星空的埃歌：創世設定」以下同) 「墟荒創世の話」(「墟荒創世説」という創世伝説が発表された。
004	2002年1月13日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	江南 遙控	■「星屑の詩歌：天文に関する設定」(「星埃詩篇：天文設定」)に、9つの主な星および他の星に関する設定の発表 ▲この世界に名前をつけようという声があった。 これ後の一年間、世界の名前についての投票は何回が行われた。(名前が決められる前の世界は、「前身世界」と呼ばれていた。)

005	2002年1月14日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	江南 遙控 多事	<p>■「古九州の地理設定」(「古九州の地理設定」)の発表 前身世界を9つの大陸に分け、「九州」と総称した。(「荆、徐、揚、豫、青、兗、雍、梁、冀」)。これは前身世界初めの地理設定であり、現在でもそのまま用いられている地理の構造である。</p> <p>人種は5つあり、「人族」、「蛮族」、「羽族」、「鱗族」と「鯨族」である。「矮人」、「巨人」と「精霊」のような種族は西洋ファンタジーからのもののため、新しい意味がないから、このバージヨンには生まれつき体格が高くておきい種族と低くて小さい種族がない。</p> <p>同日、多事は「夸父」と「河洛」と種族の名称と設定を提案した。</p>
006	2002年1月15日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	江南	<p>◎前身世界の設定に基づく最初の小説『最後の姫武神』が発表された。 この小説は後廃棄された。</p>
007	2002年1月16日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	水泡	◎「暗夜」の発表
008	2002年1月16日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	遙控	<p>◎「夸父の金貨」(「夸父的金幣」)の発表 ■18日に、彼はこの文章を改正し、後ろに貨幣制度についての内容をつけ加えた。</p>
009	2002年1月16日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	大角	◎「永遠の島嶼」(「永生之島」)の発表 羽人についての最初の作品
010	2002年1月16日	清韻論壇 天馬行空版スレット	遙控	◎「種族と生物の設定についての提案」(「対種族和生物設定的建議」)の発表 主要な種族は6つで、「人類」(蛮族は人類のなか、ある民族である)、「羽人」、「龍」、「夸父」、「河絡」と「魅」である。「蛮族」と「鱗族」は種族のレベルから降格した。 【cf. 005】
011	2002年1月17日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	多事	◎「跋渉」(「跋渉」)の発表 多事の一編目のこの世界についての小説。

012	2002年1月18日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	江南	◎「九州 初」(「九州 初」) 『縹渺録』最初のバナーのイントロが発表された。
013	2002年1月18日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	北星	◎「九州」このシリーズを命名することを提案した。 「九州」は江南に先に小説タイトルが使われたから、反対された。
014	2002年1月19日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	Storyman = 説書人	■「官職問題に対する解決方法」(「関与官職問題的解決方法」)の発表
015	2002年1月21日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	今何在	▲「九州」といづが気になる(「我喜歡“九州”這個名字」)
016	2002年1月23日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	今何在	■「星と月一羽人伝説」(「星辰月羽伝説」)の初めの部分が発表された
017	2002年1月25日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	滄月	■「鯨人」の仮想 「鯨人」は後の「鯨族」と似ている
018	2002年1月28日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	北星	◎「河洛の伝説」(「河洛伝説」) 河洛種族に関する始めの小説である
019	2002年1月29日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	遙控	◎「星がこない夜 最後の戦争」(「无星之夜 - 休之战」)
020	2002年2月4日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	楊叛	◎「九州 聖歌」(「九州 聖歌」) 河洛種族のストーリー
021	2002年2月6日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	滄月	◎「九州 星が落ちる」(「九州 星墜」)
022	2002年3月5日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	江南	◎九州の地名を訂正する意見 北陸: 礪州、瀚州、寧州 西陸: 雲州、雷州、東州 中陸: 瀾州、宛州、越州
023	2002年3月6日	清韻フォーラム 天馬行空スレッド	水泡	■「宛州地理の設定 ver0.1.0」(「宛州地理設定 v0.1.0 版」)
024	2002年3月11日	清韻フォーラム	水泡	■「中州地理の設定 ver0.2.0」(「中州地理設定 v0.2.0 版」)

		天馬行空スレット		
025	2002年3月15日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	軒鞍	■「瀾州地理の設定 ver0.2.0」(「瀾州地理設定 v0.2.0版」)
026	2002年3月15日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	軒鞍	■「越州地理の設定 ver0.2.0」(「越州地理設定 v0.2.0版」)
027	2002年3月27日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	大角	■「九州概要 第一集」(「九州総述—第一集」) 種族に関する最低限規定は「九州に人種(原文「智慧生物」)は「人類」、「羽人」、「龍」、「夸父」、「河洛」、「魅」と「鯨人」の7種のみである」。
028	2002年4月17日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	軒鞍	◎「九州 流火」(「九州 流火」) 軒鞍による最初の作品である。
029	2002年5月	『驚奇档案』	潘海天	▲「驚奇档案」『驚奇档案』という雑誌で、潘海天による「九州星野」というコラムが始まった。 これは九州がネットから紙媒体へ進出する第一歩である。
030	2002年5月8日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	遙控	▲「九州シリーズに関する話題が「天馬行空」の三分の一を占めた」 この「共通世界」(共同世界)もフォーラムで最も注目されているところである。討論に参加した人たちは、当時すでに有名家、あるいはその後幻想創作界で有名な作者になった。
031	2002年5月19日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	今何在	■「九州基礎的な設定と説明 ver2.0」 公表された九州幻想世界の設定では、最初のものである。 「種族篇」で、種族について明確に規定された。 龍についての三つのルールが示された。
032	2002年6月13日	清韻フォーラム 天馬行空スレット	遙控	■「九州 設定についての訂正」(「九州 更改設定」)に、「極めて東洋化」(純東方化)させないため、地名が訂正された 荊洲→旌洲、豫洲→毓洲、青洲→慶洲、兖洲→晏洲、雍洲→咏洲、冀洲→紀洲、徐洲→緒洲、揚洲→泱洲、梁洲→良洲。 これらの名前は2003年1月25日に「システムの設定 ver0.3.0」が公表されるまで、使われていた。
033	2002年1月15日	清韻フォーラム		▲ネチズンによる投票で選ばれた設定チームは、遙控、江南、今何在、大角、軒鞍、水泡、

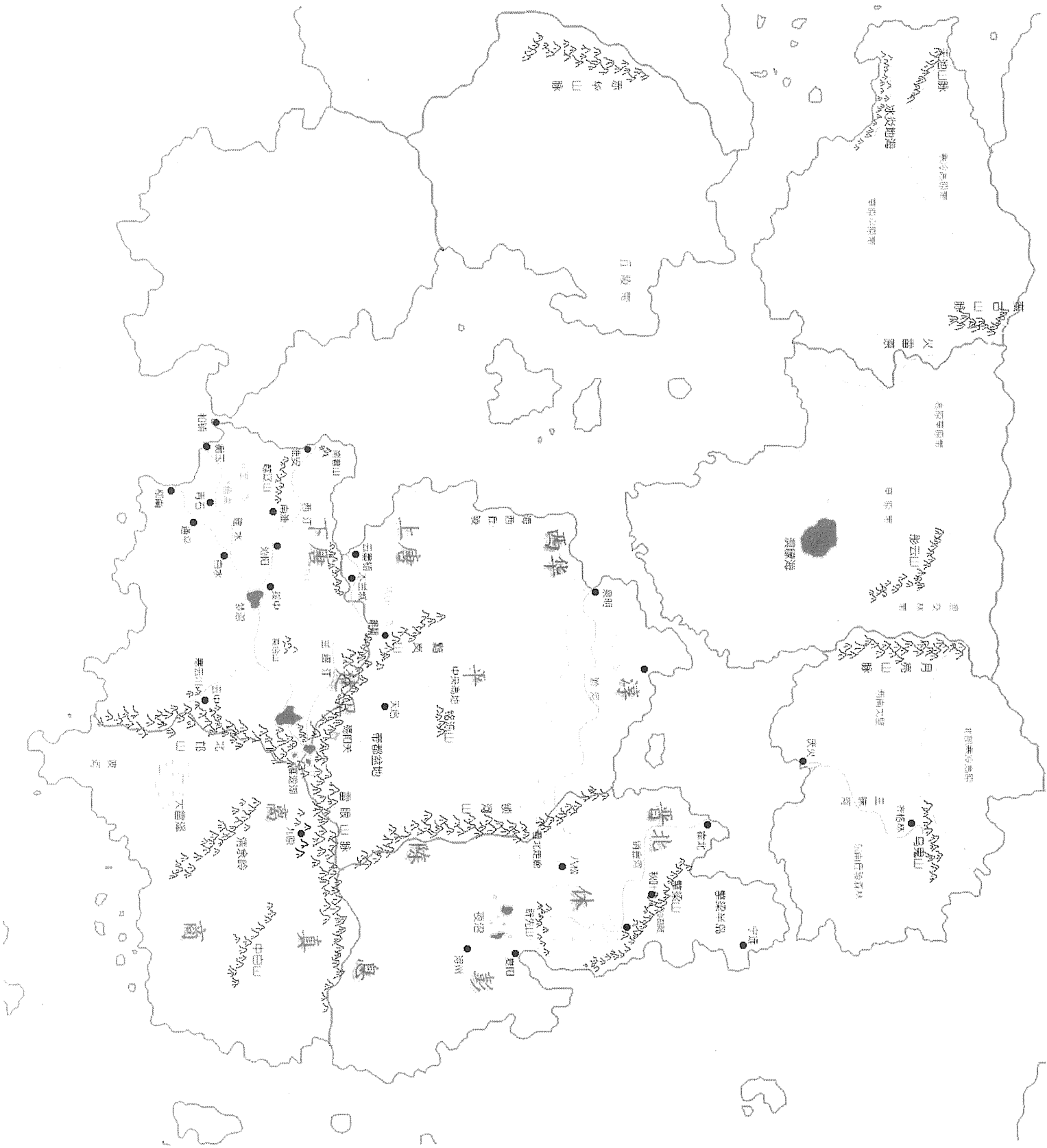
	～	天馬行空スレッド		多事であり、「七天神」と呼ばれた。
	2002年1月17日			
034	2003年1月16日	ディオゲネスフォーラム(第欧根尼论坛)		▲「龍淵紀事」の特設ページが開かれた 設定チームの創作と九州に関する討論はすべてディオゲネスフォーラム移動した 設定チームによる投票で、世界の名前は「九州」に決まった。 3)最初の公式設定が可決された。
035	2003年1月21日	ディオゲネスフォーラム	設定チーム	▲世界の名称についての討論は再会された。 「九州」と「九州」をはじめ、約百の名前について討論された。
036	2003年1月22日	ディオゲネスフォーラム	遙控	■設定組に「システムの設定 ver0.2.0」(「系統設定 v0.2.0」)を提案した。 全てのごとは「東洋風の設定」(東方風格設定)にならないように、示唆を与える。 主星は12個に増え、その中に、中国の星座を連想させる名前が使われていない。
037	2003年1月30日 ～ 2003年2月5日	ディオゲネスフォーラム	設定チーム	▲公式名称は「九州」に決まった
038	2003年3月4日	ディオゲネスフォーラム	遙控	■「星辰世界」(「星辰世界」)で、星辰について訂正した
039	2003年3月17日	九州幻想フォーラム	今何在	▲九州幻想世界に関する最初の独立したフォーラムが出来上がった 2003年3月6日に、今何在は九州の最初のドメイン(9z.net.cn)を登記した。その当時、後によく知られるドメインの 9z9z.com、も登記した。
040	2003年4月7日	九州幻想フォーラム	設定チーム	■『九州基礎的な設定 ver2.3』(「九州基礎設定 ver2.3」)が公表された 「魅」は「魅族」になり、種族の設定は「人」「羽」「河洛」「夸父」「魃」と「鯨」になった。
041	2003年5月17日 ～ 2003年5月19日	九州幻想フォーラム	今何在	■『九州基礎的な設定と説明 ver 2.0』(「九州基礎設定と説明 ver 2.0」)で、十二主星の名称とそれらが示す力量や隠された意味などを確立した。
042	2003年12月	『科幻世界』		▲年末に、『科幻世界』という雑誌の増刊号『科幻世界 奇幻版』が発行され、そのうち、創作チームによる、九州世界を背景とする作品が半分以上占めた。 この増刊は後の『飛 奇幻世界』という雑誌の前身である。

043	2004年3月			<p>▲九州ホームページの全面リニューアル 9z.net.cn はフォーラムのアドレスで、9z9z.com は書き終わったものを載せるアドレスである。 ▲九州フォーラムはいくつかのオリジナル作品と中心するポータルサイトとの協力関係ができた。 網易 新浪、龍の天空と幻創書盟主など。</p>
044	2004年5月5日	九州フォーラム	今何在	<p>■「九州基礎設定 ver.3.1」(「九州基礎設定 ver.3.1」)による九州の天文に関する設定が確立された</p>
045	2004年12月	Novoland. Itd.	江南 今何在 大角	<p>▲ novoland. Itd. の創立 江南はアメリカでの学業をやめ、帰国した。彼は今何在、大角と資本を出しあい、novoland. Itd を創立した。</p>
046	2004年2月 ～ 2004年12月	『科幻世界 奇幻版』		<p>▲『科幻世界 奇幻版』は 2004 年に増刊を六冊出した。その中に、九州を背景する小説は半分以上占めた。</p>
047	2005年1月	『飛 奇幻世界』		<p>▲『飛 奇幻世界』(『飛 奇幻世界』の創刊) 1月号から5月号まで、九州を背景とする小説は21編載った。九州に関するコラムが三回載った。</p>
048	2005年4月	「九州幻想世界」フォーラム		<p>▲九州のホームページのプログラムが変わり、「九州幻想世界」に名前を改めた。 アドレスは 9z9z.com である。</p>
049	2005年5月	複数の大学	江南 今何在 大角	<p>▲「九州」講座が行われた 江南、今何在と大角は相次いで、清華大学、北京大学、南開大学、人民大学、華東政法大 学、南京大學、武漢大學で「九州」講座を行った。</p>
050	2005年5月10日	北京航空航天大学		<p>▲原稿を募集するため、第一回「九州獎」の開会式が行われた。第一屆“九州獎”征文開幕式</p>
051	2005年5月21日			<p>▲九州シリーズ小説の単行本が出版された 『九州 縹渺録』(『九州 縹渺録』) 『九州 羽伝説』(『九州 羽伝説』)</p>
052	2005年7月	『九州幻想』		<p>▲雑誌『九州幻想』が創刊された</p>





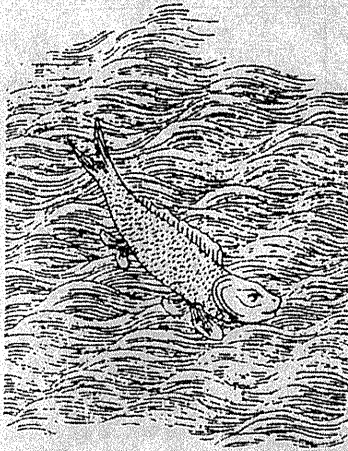
添付資料 2



添付資料 3

供其回游产卵。完成产卵后又回到西江一带生活。

分布：宛州鬼怒川、西江中游



■林隼

属性：动物，鸟类

描述：猛禽类体长约1尺半，翼展约3尺。毛色青绿。其嘴若钩。爪

地居民为得树上林隼卵，常捕之驯养。

分布：东陆及北陆宁州山林区皆有分布。



■水青树

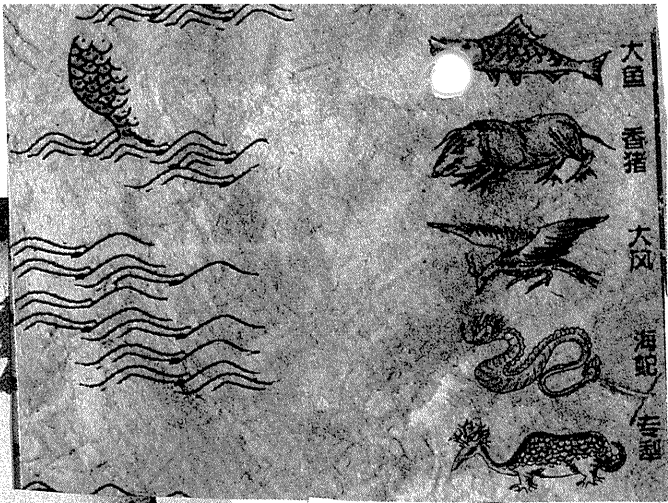
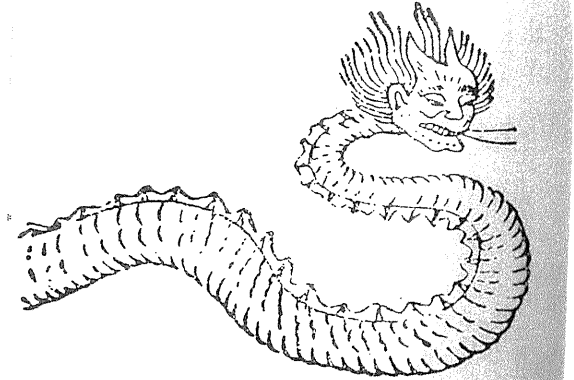


图 2

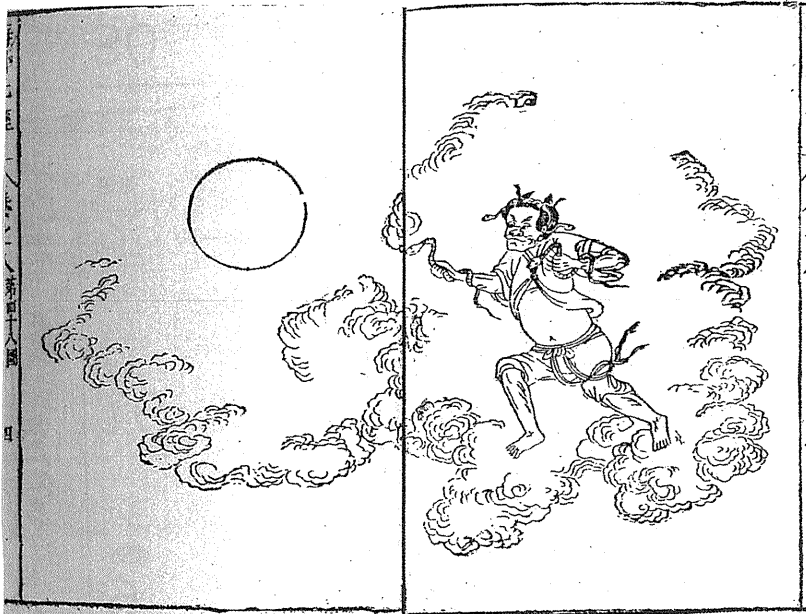


燭陰

图 3

图 1

图 5



夸父（蒋本山海经）



图 4

图 1 「九州地理雜誌」署名なし『飛・奇幻世界』2004年2下半月、pp119

图 2 「九州地図」署名なし2『飛・奇幻世界』004年10下半月、pp2

图 3 「燭陰」（燭竜）

鈴木博 訳(1999)『中国神話伝説大事典』大修館書店、pp349

图 4 夸父

公式ウェブサイト

图 5 夸父（蒋本山海经）

瀧本弘野 編著『中国神話・伝説人物図典』遊子館、pp348

## 参考文献

### 中国語資料

『科幻世界奇幻版』2004年2月下半月号～2004年12月下半月号

『飛・奇幻世界』2005年1月号～2006年9月号

『九州幻想』2005年7月号～2012年2月号

王緋 (2012) 『21世紀新媒体与文学發展』社会科学文献出版社

欧陽友権 (2008) 『網絡文学概論』北京大学出版社

彭懿 (1997) 『西方現代幻想文学論』少年兒童出版社年

### 日本語資料

池田 太臣 (2013) 「共同体、個人そしてプロデュセイジ：英語圏におけるファン研究の動向について」『甲南女子大学研究紀要. 人間科学編』49, pp. 107-119

東 浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』

岡崎由美 (2002) 『漂泊のヒーロー』大修館書店

大塚 英志 (2001) 『定本 物語消費論』角川書店

小谷 真理 (1998) 『ファンタジーの冒険』筑摩書房

## 謝辞

修士論文の執筆にあたり、多くの方からご指導をいただいた。指導教員の佐々木睦先生は、いつも熱心に指導し、励ましてくださった。そして、修論指導会の席で、平井博先生、木之内誠先生、落合守和先生、大久保明男先生、荒木典子先生ならびに首都大学東京中国文学研究室の院生の皆様から貴重なご意見をいただいた。また、佐藤賢先生と上原かおりさんは、論文の添削をしていただいた。

上記の方々に厚くお礼を申し上げたい。さらに、ここで一々お名前をかけることはできないが、多く人に支えていただきました。みなさまに心から感謝申し上げます。